流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書 11

－流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石五丁目遺跡・
市野谷駒木野馬土手・十太夫野馬土手－

平成 31 年３月

独立行政法人　都 市 再 生 機 構
公益財団法人　千葉県教育振興財団

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書 11

－流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石五丁目遺跡・
市野谷駒木野馬土手・十太夫野馬土手－

序　　文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第779集として、独立行政法人都市再生機構の流山新市街地地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市市野谷向山遺跡ほか４遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、縄文時代前期の集落跡や、近世の小金牧関係の野馬堀が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成31年３月

公益財団法人　千葉県教育振興財団
理　事　長　　平　林　秀　介

凡　　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による流山新市街地地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は下記の遺跡を収録したものである。

市野谷向山遺跡	千葉県流山市市野谷782－４の一部ほか	（遺跡コード220－036）
市野谷立野遺跡	流山市市野谷780－８ほか	（遺跡コード220－022）
西初石五丁目遺跡	流山市大畔482－６ほか	（遺跡コード220－045）
市野谷駒木野馬土手	流山市十太夫１－８の一部ほか	（遺跡コード220－056）
十太夫野馬土手	流山市十太夫119－１ほか	（遺跡コード220－048）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は第１章第１節に記載した。

5　本書の執筆・編集は、文化財主事　平井真紀子が担当した。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関から多くの御指導、御協力を得た。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、流山市教育委員会

7　本書で使用した地形図は、下記を合成・縮小したものである。

第２図　都市基盤整備公団　流山新市街地地区現況図　1/2,500（平成13年３月調整）

第３図　参謀本部陸軍測量局第１軍管地方迅速測図

「流山村」、「我孫子宿」（明治13年測量）

「野田町」、「守谷町」（明治14年測量）

8　本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。

図版１　在日極東アメリカ軍撮影（昭和22年８月）

9　本書で使用した図面の方位はすべて座標北であり、測地系は日本測地系による。

10　本書で報告する遺構の略号は、竪穴住居がSI、土坑がSK、溝状・道路状遺構がSDである。遺構番号は調査次ごとに新たに付されたため、同じ番号の遺構が複数存在するが、調査次数を示すかっこ付きの算用数字を遺構番号の前に加え、区別した。

11　縄文時代の繊維土器は、土器断面に「●」を付した。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　第２節　遺跡の位置と環境……5
第２章　市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡……6
　第１節　遺跡の概要……6
　第２節　旧石器時代……6
　第３節　縄文時代……7
　第４節　近世……38
第３章　西初石五丁目遺跡……42
　第１節　遺跡の概要……42
　第２節　旧石器時代……42
　第３節　縄文時代……43
　第４節　近世……50
第４章　野馬土手……52
　第１節　市野谷駒木野馬土手……52
　第２節　十太夫野馬土手……52
第５章　まとめ……55
報告書抄録……巻末

挿 図 目 次

第１章　はじめに
第１図　グリッドの呼称例……2
第２図　流山新市街地地区遺跡位置図……3
第３図　遺跡の位置と周辺の地形……4

第２章　市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡
第４図　旧石器時代出土石器……6
第５図　調査範囲と遺構の位置……7
第６図　遺構配置図……8
第７図　市野谷向山(24)SI001①……9
第８図　市野谷向山(24)SI001②……10
第９図　市野谷向山(24)SI001③……10
第10図　市野谷向山(24)SI002①……12
第11図　市野谷向山(24)SI002②……13
第12図　市野谷向山(24)SI003①……14
第13図　市野谷向山(24)SI003②……15
第14図　市野谷向山(24)SI003③……16
第15図　市野谷向山(24)SI003④……17
第16図　市野谷向山(24)SI004①……18
第17図　市野谷向山(24)SI004②……19
第18図　市野谷向山(24)SI004③……19
第19図　市野谷向山(27)SI001①……21
第20図　市野谷向山(27)SI001②……22
第21図　市野谷向山(27)SI001③……23
第22図　市野谷向山(27)SI001④……24
第23図　市野谷向山(24)SK001～SK005・
　(30)SK001・市野谷立野(36)SK001……26
第24図　土坑出土遺物……27
第25図　市野谷向山　遺構外出土土器①……30
第26図　市野谷向山　遺構外出土土器②……31

第27図　市野谷向山　遺構外出土土器③……32
第28図　市野谷向山　遺構外出土土器④……33
第29図　市野谷向山　遺構外出土土器⑤……34
第30図　市野谷向山　遺構外出土土器⑥……35
第31図　市野谷向山　遺構外出土土器⑦……36
第32図　市野谷立野　遺構外出土土器……36
第33図　市野谷向山　遺構外出土石器……37
第34図　市野谷立野　遺構外出土石器……38
第35図　野馬堀①……39
第36図　野馬堀②……40

第３章　西初石五丁目遺跡
第37図　旧石器時代出土石器……42
第38図　調査範囲と遺構の位置……43
第39図　(24)SI001 ……44
第40図　遺構外出土土器①……45
第41図　遺構外出土土器②……46
第42図　遺構外出土土器③……47
第43図　遺構外出土石器①……48
第44図　遺構外出土石器②……49
第45図　野馬土手……51

第４章　野馬土手
第46図　市野谷駒木野馬土手……53
第47図　十太夫野馬土手……54

表　目　次

第１章　はじめに
第１表　発掘調査一覧……1

図 版 目 次

第１章　はじめに
図版１　遺跡周辺航空写真（昭和22年撮影）

第２章　市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡
図版２　市野谷向山(25)№２グリッド、市野谷向山(25)№２グリッドセクション、市野谷向山(29)旧石器ブロック、市野谷向山(30)標準土層、市野谷向山(24)SI001、市野谷向山(24)SI002、市野谷向山(24)SI002炉、市野谷向山(24)SI002－P5遺物出土状況
図版３　市野谷向山(24)SI003、市野谷向山(24)SI003炉、市野谷向山(24)SI004、市野谷向山(27)SI001、市野谷向山(24)SK001・002、市野谷向山(24)SK003、市野谷向山(24)SK004、市野谷向山(24)SK005
図版４　市野谷向山(30)SK001、市野谷立野(36)SK001、市野谷向山(21)SK001、市野谷向山(21)SK003、市野谷向山(22)SK001・002、市野谷向山(22)SK003・004、市野谷立野(37)SK001～004、市野谷立野(37)SK005
図版５　市野谷立野(37)T1、市野谷立野(37)T1北壁セクション、市野谷向山(21)T6、市野谷向山(21)T7、市野谷向山(27)SD001・002、市野谷向山(31)SD001A地点、市野谷向山(31)SD001BC間、市野谷向山(31)SD002
図版６　出土遺物(1)
図版７　出土遺物(2)
図版８　出土遺物(3)
図版９　出土遺物(4)
図版10　出土遺物(5)
図版11　出土遺物(6)
図版12　出土遺物(7)
図版13　出土遺物(8)
図版14　出土遺物(9)

第３章　西初石五丁目遺跡
図版15　(23)旧石器時代遺物集中地点、(23)T5、(24)SI001、(24)SI001炉、(23)T2、(23)T4、(24)野馬堀、(24)T7
図版16　出土遺物(1)
図版17　出土遺物(2)

第４章　野馬土手
図版18　十太夫野馬土手

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１．調査に至る経緯

独立行政法人都市再生機構は、茨城県つくば市と都心を結ぶつくばエクスプレス（常磐新線）の沿線整備計画に関連して、千葉県流山市市野谷から東初石、十太夫地区一帯の土地区画整理事業を計画した。この事業は流山市新拠点構想として位置づけられ、事業実施にあたり、独立行政法人都市再生機構から区域内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会宛に提出された。区域内には、包蔵地14か所、野馬土手３か所が所在しており（第２図）、その取扱いについて千葉県教育委員会との間で度重なる協議が行われた。その結果、事業区域内には山林・雑木林・畑地のほか既存の住宅地が点在していることから、住宅地や緑地など現状保存する区域を策定し、現状保存が困難な区域については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、公益財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

平成12年から始まった調査も、平成30年度の発掘調査・整理作業をもって終了し、本報告が新市街地地区遺跡群の最終報告となる。

２．調査の経緯と経過

（１）発掘作業

今回報告する５遺跡の発掘調査の内容は第１表のとおりである。ただし、市野谷向山遺跡(20)については、流山運動公園周辺地区埋蔵文化財報告書として報告予定である。

第１表　発掘調査一覧

遺跡名	年度	調査次	面積（㎡）					調査期間	担当者	調査事務所長 調査課長	調査研究部長 文化財センター長
			調査対象	確認調査		本調査					
				上層	下層	上層	下層				
市野谷向山	29	(20)	247	48	－	0	－	29. 6. 1～29. 6. 8	蔀　　淳一	蜂屋　孝之	上守　秀明
		(21)	1,318	152	52	0	0	29. 8. 1～29. 8.31	蔀　　淳一	蜂屋　孝之	上守　秀明
		(22)	392	392	16	0	0	29.11. 1～29.11.29	大久保奈奈	蜂屋　孝之	上守　秀明
	30	(24)	1,922	230	76	560	0	30. 4.10～30. 5.29	大久保奈奈	蜂屋　孝之	島立　　桂
		(25)	456	46	36	0	0	30. 4.12～30. 4.27	山岡磨由子	蜂屋　孝之	島立　　桂
		(27)	1,165	147	44	56	0	30. 5. 1～30. 5.30	山岡磨由子	蜂屋　孝之	島立　　桂
		(29)	312	312	48	0	0	30. 7. 2～30. 7.13	糸川　道行	蜂屋　孝之	島立　　桂
		(30)	696	696	32	0	0	30. 7.17～30. 7.31	糸川　道行	蜂屋　孝之	島立　　桂
		(31)	1,341	621	56	0	0	30. 8.21～30. 9.11	糸川　道行	蜂屋　孝之	島立　　桂
市野谷立野	28	(36)	581	58	24	0	0	29. 1.16～29. 1.27	白鳥　　章	蜂屋　孝之	上守　秀明
	29	(37)	2,845	390	92	0	0	29. 9. 1～29. 9.27	蔀　　淳一	蜂屋　孝之	上守　秀明
		(38)	659	82	28	0	0	29.11.30～29.12.15	大久保奈奈	蜂屋　孝之	上守　秀明
西初石五丁目	29	(23)	818	84	80	0	169	29. 4.17～29. 5.24	蔀　　淳一	蜂屋　孝之	上守　秀明
		(24)	746	98	30	0	0	29. 6.19～29. 7. 6	蔀　　淳一	蜂屋　孝之	上守　秀明
市野谷駒木野馬土手	23	(2)	223	28	－	－	－	23.11.16～23.11.25	髙橋　博文	橋本　勝雄	及川　淳一
十太夫野馬土手	28	(31)	679	30	－	－	－	29. 2.15～29. 2.21	岡田　誠造	蜂屋　孝之	上守　秀明

（２）整理作業

平成30年度

文化財センター長　島立　桂

整理課長　　田島　新

担当職員　　文化財主事　平井真紀子

内　容　市野谷向山遺跡　　記録整理～報告書刊行

市野谷立野遺跡　　記録整理～報告書刊行

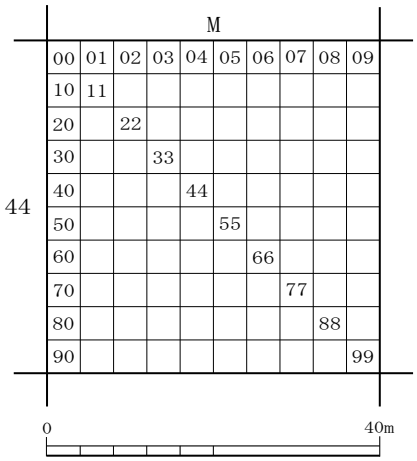
西初石五丁目遺跡　　記録整理～報告書刊行

市野谷駒木野馬土手　　記録整理～報告書刊行

十太夫野馬土手　　記録整理～報告書刊行

３．調査の方法と概要

調査にあたり、平面直角座標（第Ⅸ座標系）に基づいてグリッドの設定を行っている。新市街地地区内の調査対象範囲を覆うように、40m×40mの方眼網を設定し、南北方向を北から１、２、３･･･、東西方向は西からＡ、Ｂ、Ｃ･･･とし、この数字とアルファベットを組み合わせて大グリッド名とした。さらに大グリッドを４ｍ×４ｍの小グリッドに100分割し、北から00～90、西から00～09とした。グリッド名は、大グリッドと小グリッドを組み合わせ、例えば44M－00と呼称した（第１図）。



第１図　グリッドの呼称例

上層の調査では、調査対象面積の10％についてトレンチを設定し、遺構の有無や時期及びその分布を把握するため確認調査を実施した。トレンチの設定方向は各調査区の形状などに即しており、必ずしも方眼に沿っていない。確認調査で検出された遺構が希薄な場合は、トレンチを適宜拡張して精査し、遺構が広範囲に分布する場合は、本調査範囲を設定し引き続き調査を行った。

下層の調査は上層の調査が終了した後、調査対象面積の４％について２ｍ×２ｍのグリッドを設定し確認調査を行った。石器などの遺物が集中的に出土した地点については拡張後、本調査に移行した。

この項の最後に、報告書抄録に記載した北緯・東経の数値について述べる。今回の報告書では、各遺跡の調査地点内または近いところで、最もふさわしいとみられるグリッド交点から数値を起こした。市野谷向山遺跡は52U－00グリッド北西交点で、日本測地系座標でX＝－15,540m、Y=8,300mである。これを世界測地系に変換すると、X=－15,185.0321m、Y＝8,006.8585m、北緯35° 51′ 47″、東経139° 55′ 19″である。市野谷立野遺跡は47Y－00グリッド北西交点で、日本測地系座標でX＝－15,340m、Y=8,460mである。これを世界測地系に変換すると、X=－14,985.0475m、Y＝8,166.8626m、北緯35° 51′ 54″、東経139° 55′ 26″である。西初石五丁目遺跡は24H－00グリッド北西交点で、日本測地系座標でX＝－14,360m、Y=7,780mである。これを世界測地系に変換すると、X=－14,005.0987m、Y＝7,486.8592m、北緯35° 52′ 25″、東経139° 54′ 58″である。なお、数値はWeb版のTKY2JGDに拠っている。

第２図　流山新市街地地区遺跡位置図

第３図　遺跡の位置と周辺の地形

第２節　遺跡の位置と環境（第２・３図、図版１）

今回報告する５か所の遺跡が所在する流山市は、千葉県の北西部に位置し、東京湾に注ぐ江戸川に沿って南北に長い市域を形成している。江戸川に沿った市の西部は平坦な沖積低地であり、東部は高低差のある台地が広がっている。近年では、ＪＲ武蔵野線、東武アーバンパークライン（旧　東武野田線）の在来線に加え、つくばエクスプレス線（ＴＸ）の開通など都心からの利便性が高まり、急激な住宅都市化が進んでいる。３か所の遺跡は、このつくばエクスプレス線流山おおたかの森駅の周辺に位置する。

第２図によると、流山おおたかの森駅の北西部29Ｘグリッド付近（標高15m～16m）に坂川の源流とされる湧水地が所在する。そこから「牛飼沢」を通り、38Ｘ・Ｙ、39Ｘ・Ｙグリッド付近で蛇行して湿地帯を形成する。流路はさらに蛇行しながら大久保遺跡の北西から南西方向に続く。一方、市野谷二反田遺跡西側の41Ｒグリッド付近にも湧水地があり、湧き出た水は市野谷向山遺跡の北側の45Ｓグリッドあたりで北東からの流れと合流し、氾濫原のような湿地帯を形成している。台地縁辺部には坂川の源流域を囲むように遺跡が集中している。

第３図では周辺の旧地形と遺跡立地を把握するために、明治13・14年測量の迅速測図を用いて、低地（薄いスクリーントーン）と台地・微高地とを区分したうえで水系を示し、遺跡位置を示した。

本書以前の各報告書については、参考文献として以下に掲載する。

参考文献

栗田則久　2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書１－流山市市野谷宮尻遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

栗田則久ほか　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市西初石五丁目遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

伊藤智樹ほか　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書３－流山市市野谷入台遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

山岡磨由子ほか　2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書４－流山市市野谷二反田遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

新田浩三ほか　2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書５－流山市大久保遺跡（下層）・市野谷向山遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（下層）・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡－』（財）千葉県教育振興財団

新田浩三　2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書６－流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡－旧石器時代編』（公財）千葉県教育振興財団

森本和男ほか　2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書７－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡（上層）・市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（上層）・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団

橋本勝雄ほか　2016『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書８－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・十太夫第Ⅲ遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団

池田大助　2017『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書９－流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、流山市駒木野馬土手－』（公財）千葉県教育振興財団

城田義友ほか　2017『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書10－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（下層）・西初石五丁目遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』（公財）千葉県教育振興財団

第２章　市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡

第１節　遺跡の概要（第５図）

市野谷向山遺跡と市野谷立野遺跡は隣接する遺跡であり、今回検出された野馬堀が遺跡をまたいで連続する遺構と考えられるため、まとめて報告する。今回報告する市野谷向山遺跡第20次～第22次・第24次・第25次・第27次・第29次～第31次調査、市野谷立野遺跡第36次～第38次調査の調査状況は、第５図のとおりである。ただし、市野谷向山遺跡第20次調査については、流山運動公園周辺地区埋蔵文化財報告書として報告予定である。

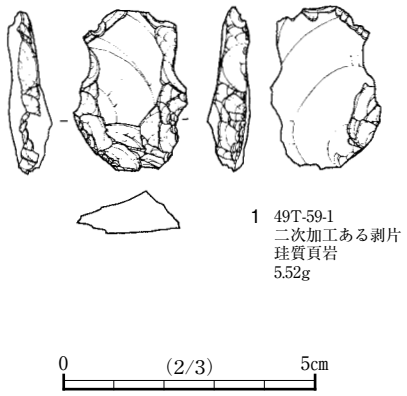
市野谷向山遺跡では、これまでの調査で、旧石器時代の石器集中地点、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構と遺物が検出されている。今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡５軒、土坑６基のほか、近世の野馬堀、シシ穴を検出した。また、旧石器時代の遺物が若干出土している。

市野谷立野遺跡では、これまで旧石器時代の石器集中地点、縄文時代の竪穴住居跡や陥穴などが確認されている。今回の調査では、第36次調査で縄文時代の陥穴が１基、第37次調査では近世の野馬堀３条とシシ穴５基が検出された。

第２節　旧石器時代（第４図、図版２・６）

市野谷向山遺跡第29次調査では、立川ローム層Ⅲ層（ソフトローム層）から二次加工ある剥片1点、礫片２点が出土した。

１は、不定型の剥片による二次加工ある剥片である。素材剥片の打面部周辺には細かな調整加工が連続し、それ以外の部位には粗い調整加工が主要剥離面側から施されている。石材は灰色を呈する嶺岡産の珪質頁岩である。



第４図　旧石器時代出土石器

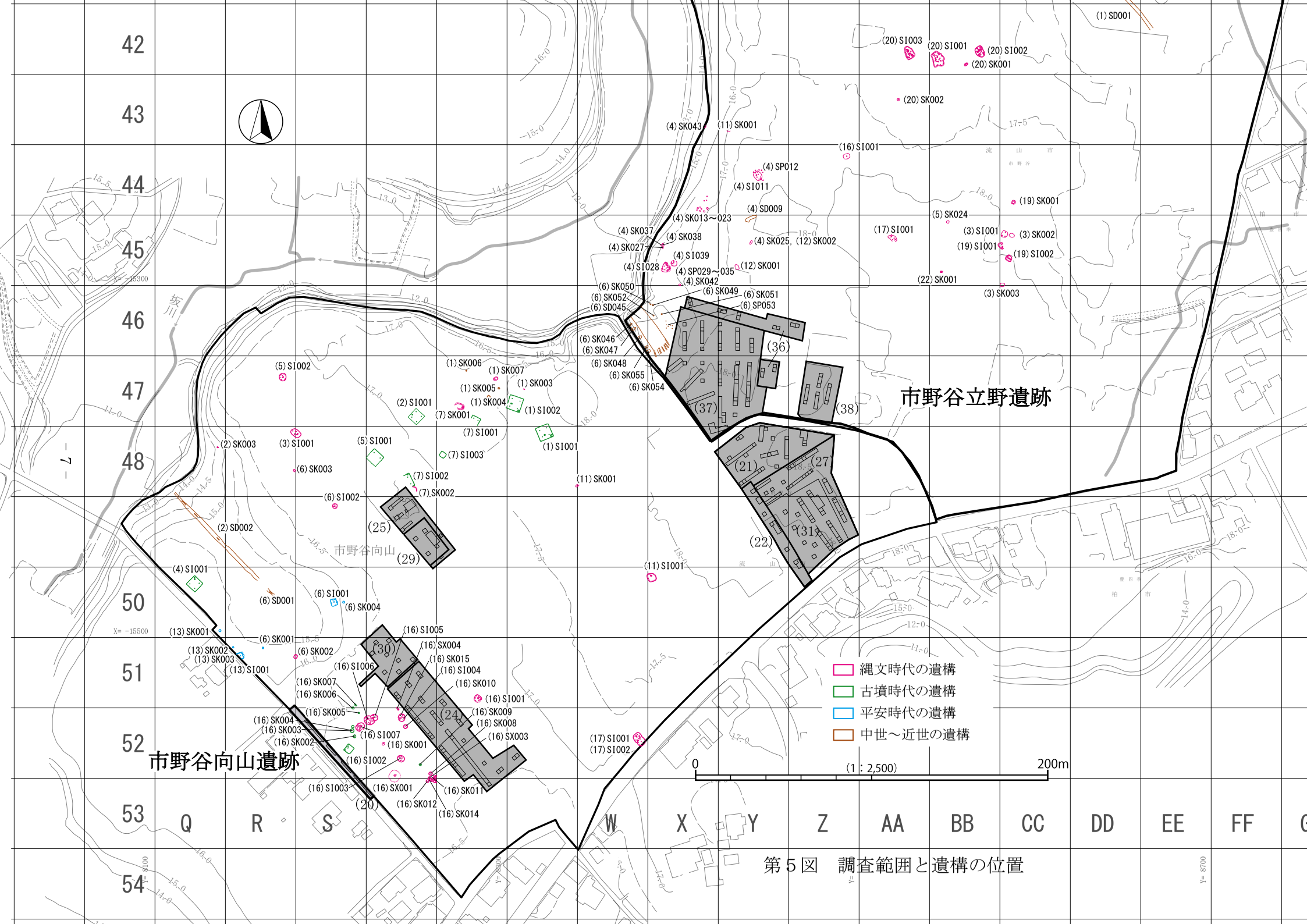
第３節　縄文時代（第６図）

縄文時代の遺構は、市野谷向山遺跡第24次調査区で前期黒浜式期の竪穴住居跡１軒、中期加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡３軒、中期の土坑５基、第27次調査で黒浜式期の竪穴住居跡１軒を検出している。全体的に散漫な分布であるが、第24次調査区と隣接する第16次調査区で発見された遺構と合わせると、前期と中期に小規模な集落が形成されていたことがわかる。第16次調査区では加曽利ＥⅣ式の土器埋設炉(16)SX001が出土し、既に報告しているが、今回報告する３軒の竪穴住居跡とほぼ同時期と思われ、中央に空白地帯を有する集落が、南側の未調査区に広がる可能性がある。

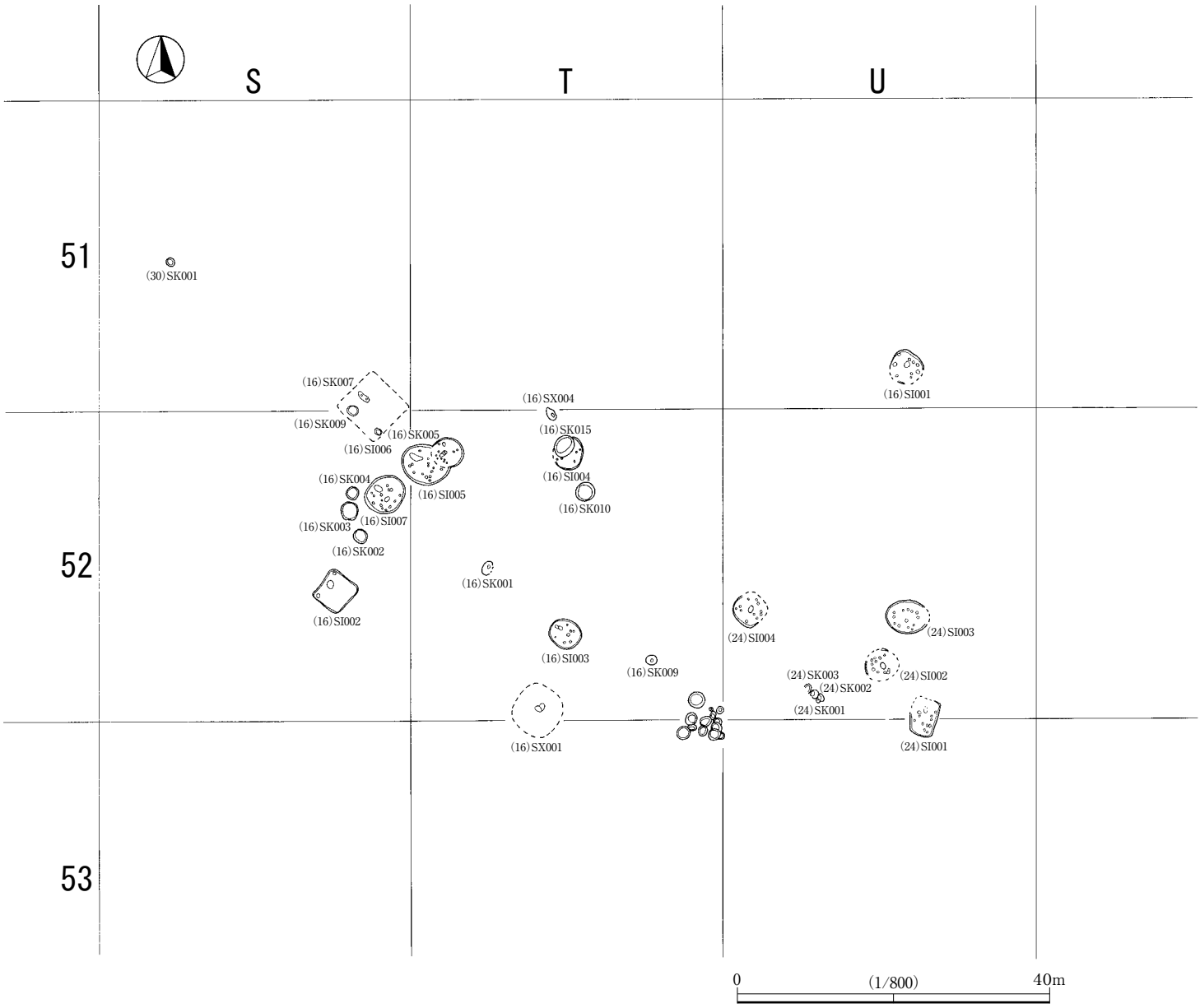
１．竪穴住居跡

市野谷向山遺跡(24)SI001（第７～９図、図版２・６・８）

52Ｕ－96・53Ｕ－06グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈するが、北側は木根による攪乱を受け不明確である。主軸方位はＮ－12°－Ｅ、規模は4.79ｍ×3.27ｍ、確認面からの深さは22㎝である。炉は北側に位置し、(24)SK005によって北半分が壊されている。黒褐色土に焼土粒・焼土ブロックが多量に



第５図　調査範囲と遺構の位置

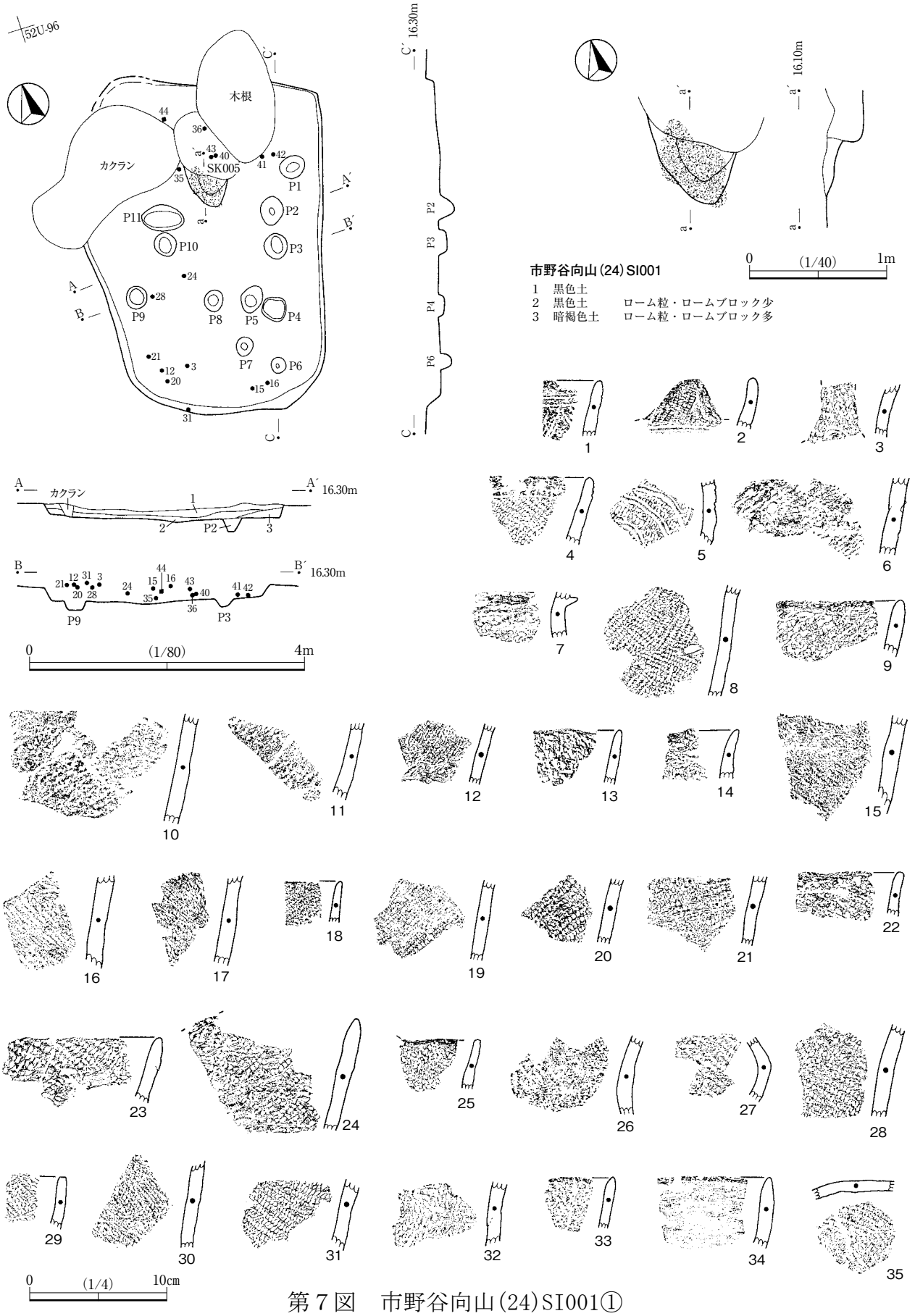


第６図　遺構配置図

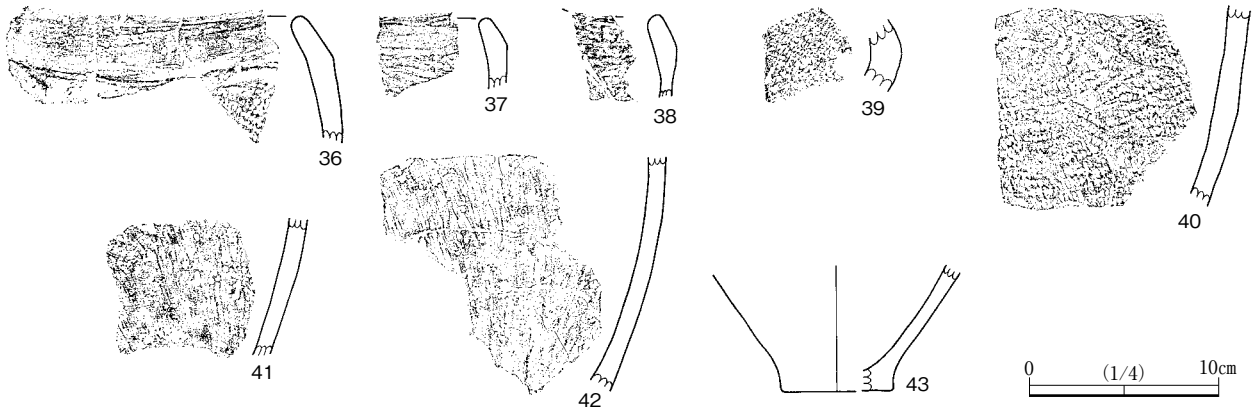
混入し、底面はロームブロックで火熱を受け硬化している。ピットは12基検出された。Ｐ11のみ62㎝×40㎝の長楕円形、他は径20㎝～40㎝程である。床面からの深さは７㎝～27㎝とばらつきがあり、規則性は認められない。

出土遺物　覆土上層から中層にかけて出土した。１～35は前期黒浜式、36～43は中期加曽利Ｅ式と思われるが、中期の土器は(24)SK005に帰属するものであろう。

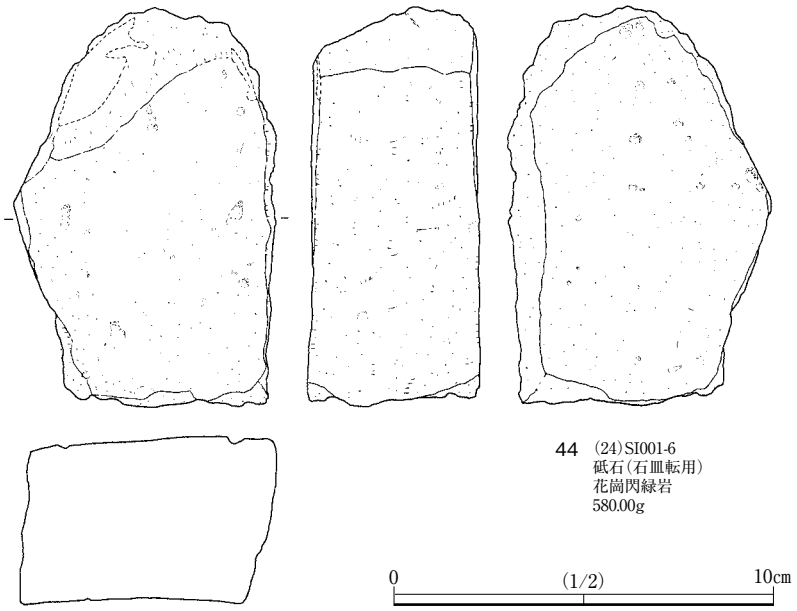
１は平行沈線文のみが施された口縁部片、２～５は縄文を地文とし、沈線文が加えられるものである。６は無節Ｌを地文とし、刺突文が施される。７は鍔状隆起線を有する。８～32は縄文のみが施される。８は単節LRとRLの羽状施文、９～12は無節Ｌ、13～17は無節Ｒ、18～21は単節LR、22～28は単節RLである。29～31は附加条縄文と思われる。29・31は附加条第１種で共に軸縄はRL、29はＲを２本、31はＲを１本附加したもの、30はＬ１本とＲ１本を組み合わせた軸縄不明の附加条である。32は撚糸文Ｒもしくは附加条と思われる。33・34は無文の口縁部片である。35は底部片で、外面に単節RLがみられる。黒浜式の口縁部片は端部に向かって器厚を減じる形状のものが多いが、29の口唇部は溝状を呈する。胴部は小片



第７図　市野谷向山(24)SI001①



第８図　市野谷向山(24)SI001②



第９図　市野谷向山(24)SI001③

が多く、全体の器形を窺うことはできない。緩やかに外反する26や、丸みをもって屈曲する27以外はほぼ直線的に開く。

36～38は内傾する口縁部の破片である。36は隆起線で口縁部無文帯を区画し、胴部にLRが施される。37は横方向のミガキ、38は沈線区画がみられる。39は橋状把手の一部、40はLRが多方向に施される。41・42は胴部下位の破片で縦方向のミガキが施されている。43は復元径6.0㎝の底部片で、41・42と同じく縦位のミガキが施されている。

44は砥石である。花崗閃緑岩の石皿を転用しており、欠損面を擦って使用している。他に被熱痕のある砂岩製の礫片が出土している。

市野谷向山遺跡(24)SI002（第10・11図、図版２・７・８）

52Ｕ－74・75・84・85グリッドに位置する。木根等による攪乱が著しく、平面形は不明確だが、円形を呈すると思われる。規模は径約4.4m、確認面からの深さは13㎝である。炉は中央に位置する。0.73m×0.69mの楕円形を呈し、床面からの深さは28㎝である。ピットは11基検出され、炉を中心に円形に配置されるようである。深さは16㎝～40㎝である。

出土遺物　遺物は炉とＰ５から集中して出土している。１は接合しないものの、同一個体と思われる深鉢で、復元口径35.0cm、底径7.0㎝、現存高30.0㎝を測る。口縁部無文帯を作出する隆起線と、無文の帯状部の頂部が付着する。単節LRを地文とし、底部はやや突出した形となる。２～４は口縁部の隆起線に単位文を構成する隆起線が付着するもので、４は隆起線の集約部が叉状の小突起となる。14・15のみ区画線に沈線を用いるが、他は隆起線によって区画される。７ａ～７ｃは壺型土器の胴部片か。８・13は隆起線にナゾリが加えられる。16・17は単節LRのみが施される胴部片で、ともに胎土に雲母を含む。18の隆起線より以下は条線か。いずれも加曽利ＥⅣ式の範疇で捉えられるものである。

石器は黒曜石製の剥片が３点出土しているが、小片のため図化はしなかった。

市野谷向山遺跡(24)SI003（第12～15図、図版３・６・７・９）

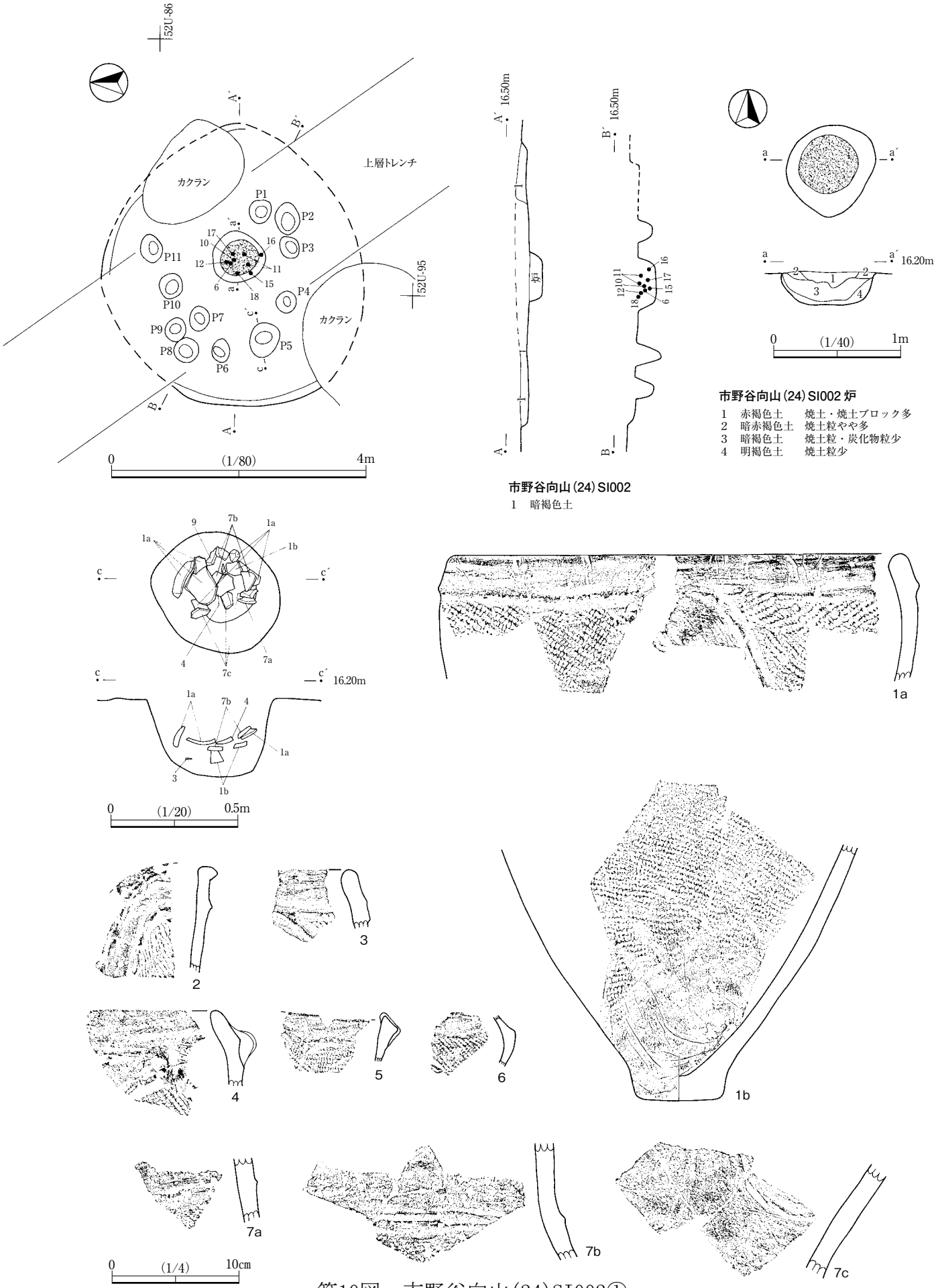
52Ｕ－65・66・75・76グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、東端は木根により破壊されている。主軸方位はＮ－88°－Ｗ、規模は5.52m×4.33m、確認面からの深さは25㎝である。炉は中央やや南寄りに位置し、0.77m×0.55mの不正形で、床面からの深さは45㎝である。ピットは12基検出された。炉を中心に円形に配置され、径15㎝～35㎝、深さは15㎝～49㎝とばらつきがある。

出土遺物　覆土上層から中層にかけて出土した。１は復元口径17.6㎝、現存器高19.6㎝の深鉢である。４単位の波状口縁で、胴部中位が緩やかに括れる。口縁部無文帯を作出する隆起線は、波頂部に集約され、突起状となる。逆Ｕ字状の無文の帯状部は沈線で区画され、口縁部の隆起線に付着する。無文部は胴部下位で幅広となる。２・３は緩やかな波状を描く口縁部片で、沈線により文様を描出する。胴部の無文部を作出する沈線は波状となり、口縁部の区画沈線に近接する。４の口縁部無文帯を作出する隆起線は波頂部に向かってせり上がる。胴部は沈線により文様を描出、横位連繋弧線文の頂部は、口縁の隆起線にほぼ接する。５は３の同一個体か。６～10は沈線により口縁部無文帯を区画する。11～22は沈線により横位連繋弧線文が描出される胴部片である。15・20・22は縄文部と無文部の文様効果が逆転している。

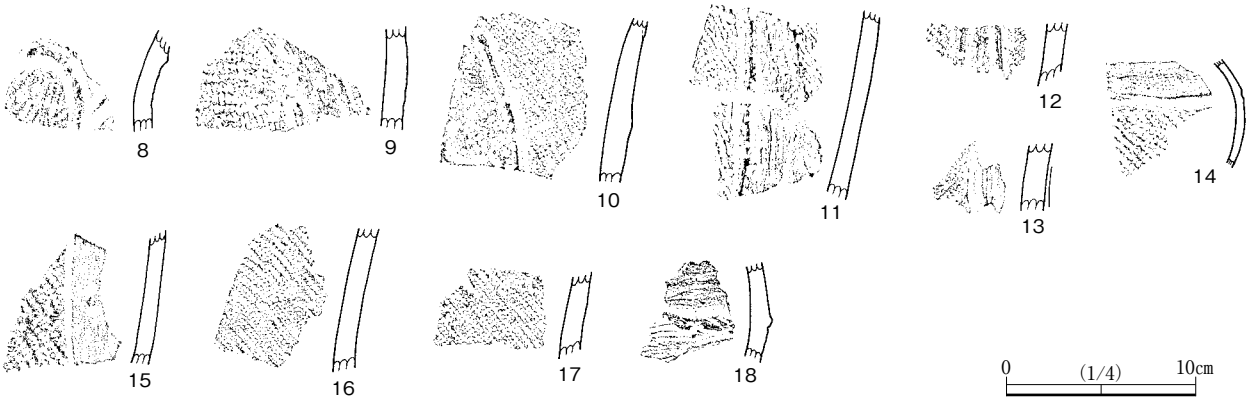
23～30は口縁部無文帯及び胴部無文の帯状部を隆起線によって区画する。25は隆起線が集合して突起状になる。31も隆起線による区画だが剥離している。隆起線脇のナゾリが縄文に及ぶ。32～43は隆起線による懸垂区画、44～46は楕円区画である。

47～57は口縁部無文帯を区画する隆起線と縄文のみの破片である。47の波頂部は膨らみをもち、下から上に向かって円形の窪みが穿たれる。52は隆起線というより稜線に近く、縄文が隆起線上に及ぶ。胴部の縄文は下端で向きが変わり羽状になっている。58～61は縄文のみ、62は縦方向のミガキが施された胴部片である。63～71は底部である。ナデもしくはミガキが施される。65は明瞭な区画線はなく、縄文のみが残る。僅かに粘土の高まりがみられる部分があり、隆起線による懸垂文の可能性がある。

72～80は橋状把手である。72は波頂部に架かる橋状把手である。隆起線区画の懸垂文が波頂部に抜け、橋状把手となる。隆起線は両側にナゾリが加えられる。口縁部無文帯を区画する隆起線直下には刺突文が１条廻る。73は波頂部に橋状把手が架かり、更にその上に環状把手が付く。口縁部無文帯及び文様は沈線



第10図 市野谷向山(24)SI002①



第11図　市野谷向山(24)SI002②

により作出される。区画沈線は弧を描き、横位に連繋するものと思われる。74は両耳壺で、口縁部無文帯を作出する隆起線より以下に橋状把手が付く。75・76も両耳壺と思われるが、把手部分を欠損している。77～80は把手部分のみの遺存である。81～85は壺型土器の口縁部片および胴部片であろう。81は口縁部無文帯を作出する隆起線と、弧状に垂下する隆起線が集約して突起状となる。

いずれも加曽利ＥⅣ式の範疇で捉えられるもので、地文縄文は単節LRが主体を占める。

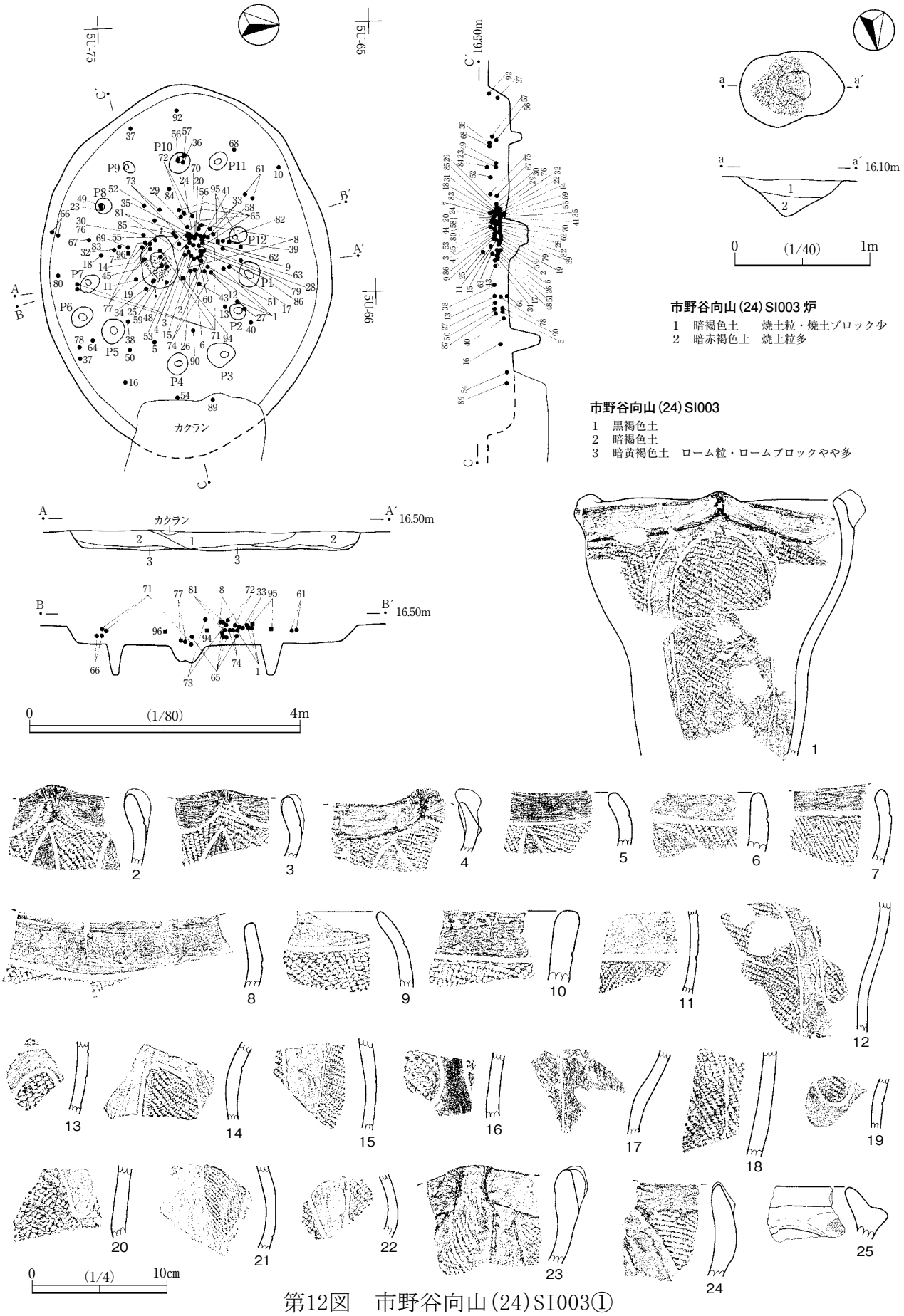
86～93は覆土中から出土した前期の土器である。86～88は関山式、89～93は黒浜式であろう。86は半截竹管による鋸歯状文で、上端には円形刺突文が施される。87の上端は沈線と刺突文、下端には押引き文が廻る。地文は附加条第１種（軸縄RLにＲ２本附加、軸縄LRにＬ２本附加）の羽状施文である。88はLRの環付末端が施される。89はLRの縦施文、90は無節Ｌで焼成前の穿孔がみられる。91はRL、92は低い隆帯より以下にLRを羽状施文している。93は附加条第１種（軸縄RLにＬ２本附加）である。

94～96は打製石斧である。94は短冊形で点紋緑泥片岩を石材とする。95は分銅形で、安山岩を石材とする。薄く扁平な円礫を素材とし、剥離の末端は板状節理の影響で、階段状を呈する。被熱により分割した可能性がある。96は刃部の破片で、ホルンフェルスを石材とする。他にチャートを石材とする石鏃未成品、安山岩製の石皿などが出土している。

市野谷向山遺跡(24)SI004（第16～18図、図版３・６・７・９・10）

52Ｕ－60・61・70グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈すると思われるが、北東部分のプランははっきりしない。主軸方位はＮ－48°－Ｅ、規模は一辺約４ｍ、確認面からの深さは32㎝である。炉は中央に位置し、1.03ｍ×0.57ｍの長楕円形で、床面からの深さは９㎝である。ピットは12基検出された。炉を中心に円形に配置され、径22㎝～43㎝、深さは８㎝～31㎝とばらつきがある。

出土遺物　覆土上層を中心に散漫な出土状況を示す。１～５は同一個体と思われる。注口土器で、注口部の上に橋状把手が付く。口縁部無文帯を隆起線で区画、胴部は沈線による横位連繋弧線文である。弧線文の頂部は隆起線と離れている。縄文（LR）は施文方向を変えて羽状になっている所もみられる。縄文は隆起線・沈線どちらにも乗っている。６の口縁部無文帯を区画する沈線は、波頂部に向かって弧を描く。横位連繋弧線文の頂部が口縁部の沈線に付着し、単位文化している。胎土に大粒の赤色スコリアを多く含む。７は波頂部に向かって横位連繋弧線文の頂部が付着する。口縁部は隆起線で区画される。８は幅広の沈線による枠状の区画で、RLを充填している。９・10は口縁部無文帯を沈線により区画、LRを多方向に



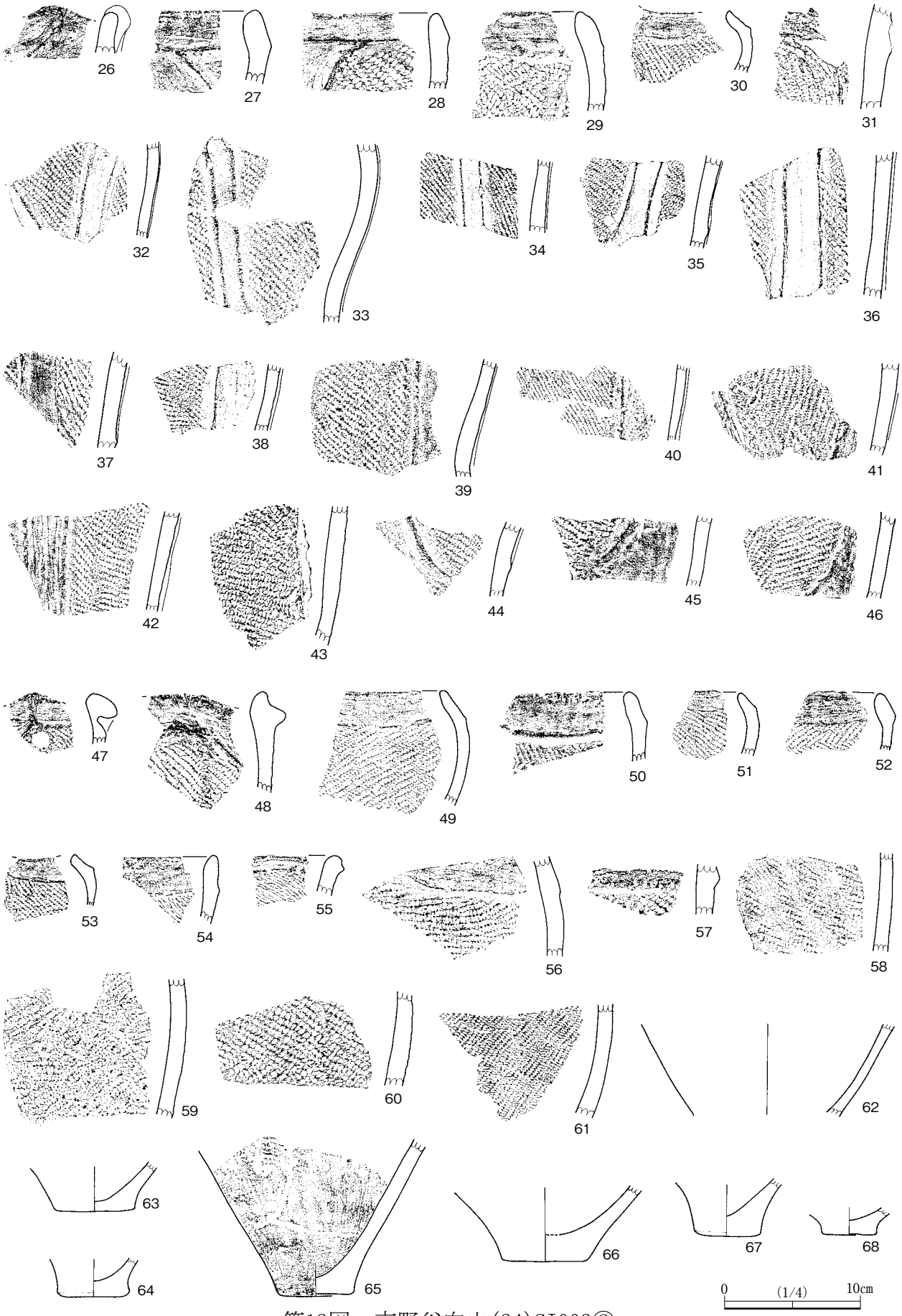
市野谷向山(24)SI003 炉

1　暗褐色土　　焼土粒・焼土ブロック少
2　暗赤褐色土　焼土粒多

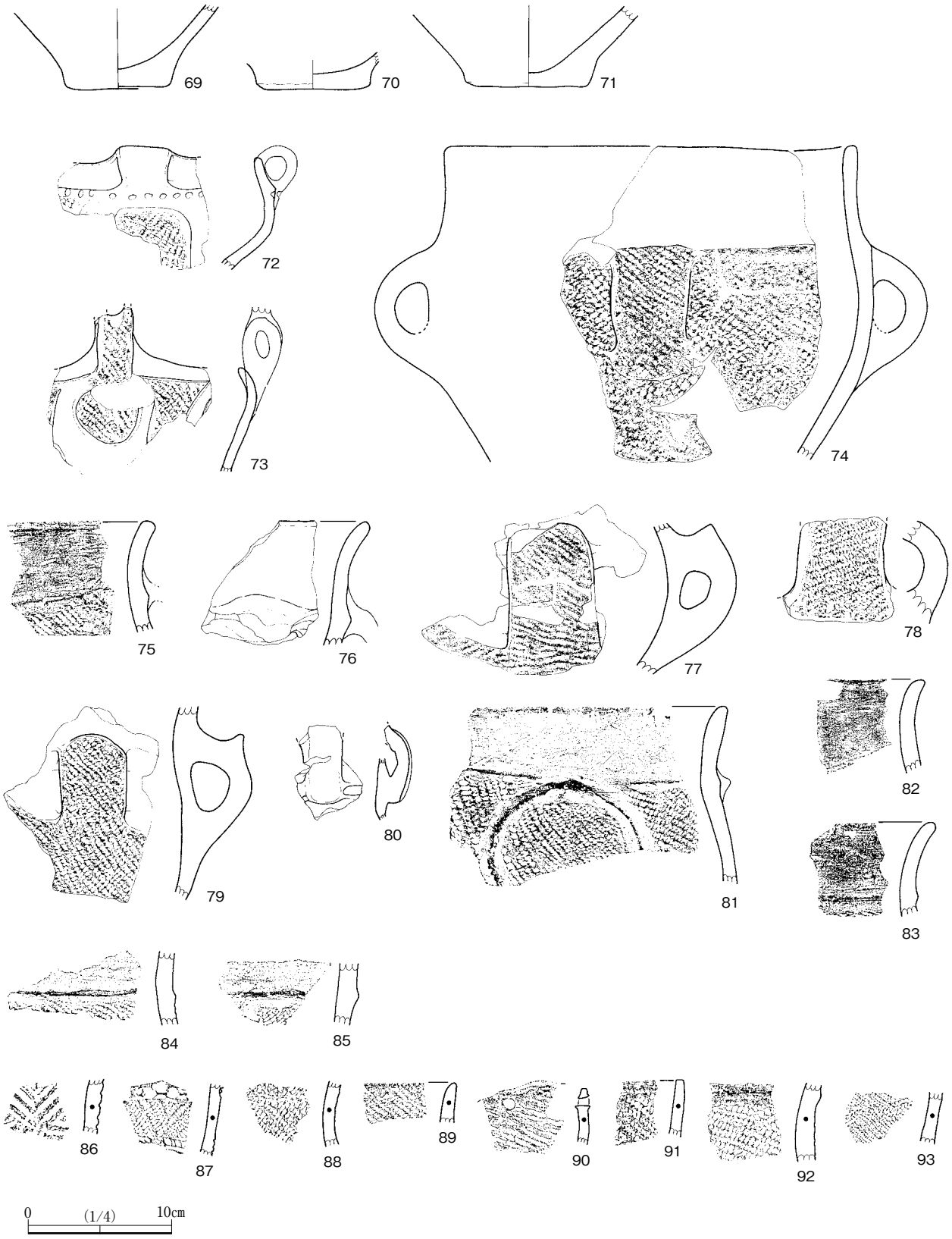
市野谷向山(24)SI003

1　黒褐色土
2　暗褐色土
3　暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックやや多

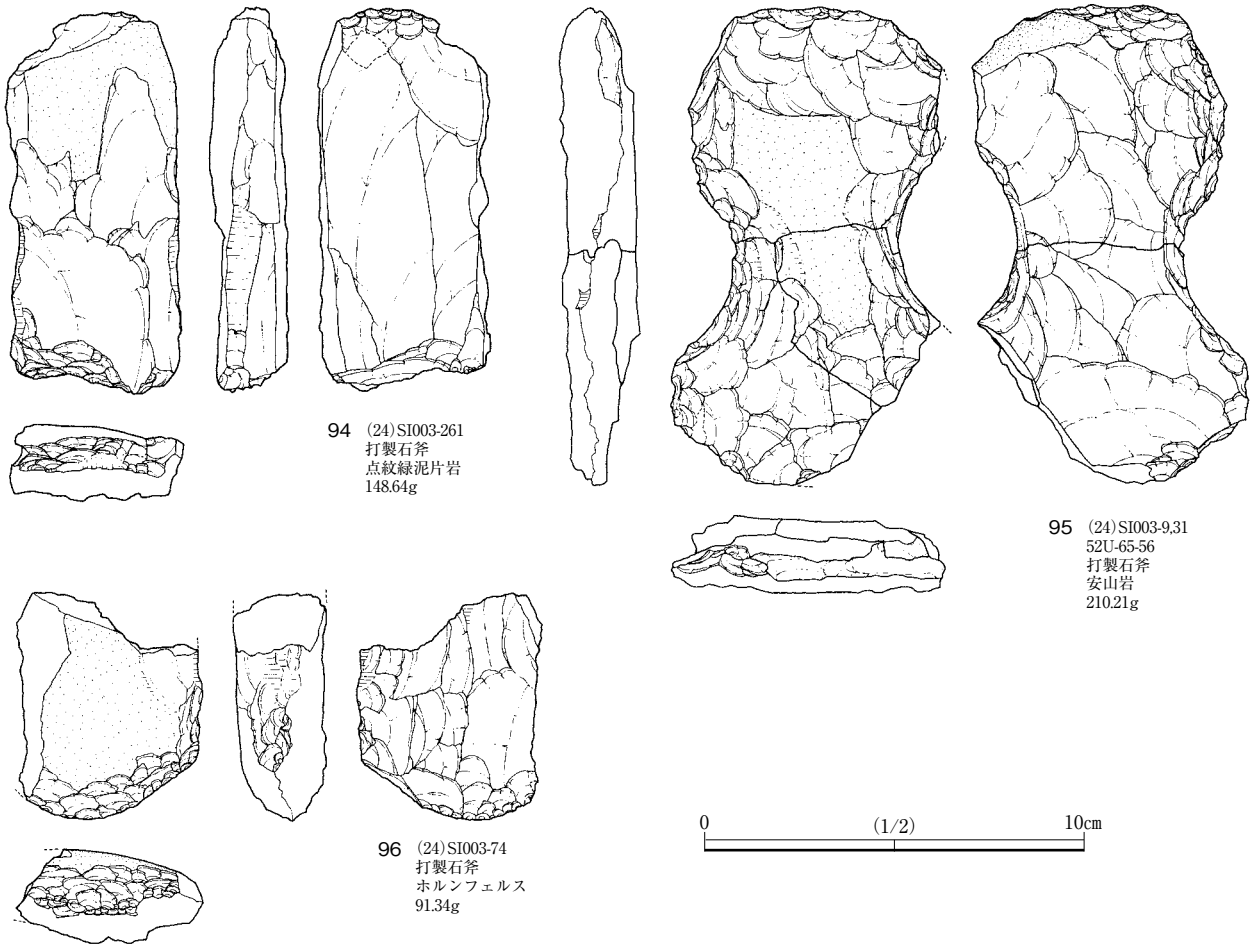
第12図　市野谷向山(24)SI003①



第13図　市野谷向山(24)SI003②



第14図　市野谷向山(24)SI003③



第15図　市野谷向山(24)SI003④

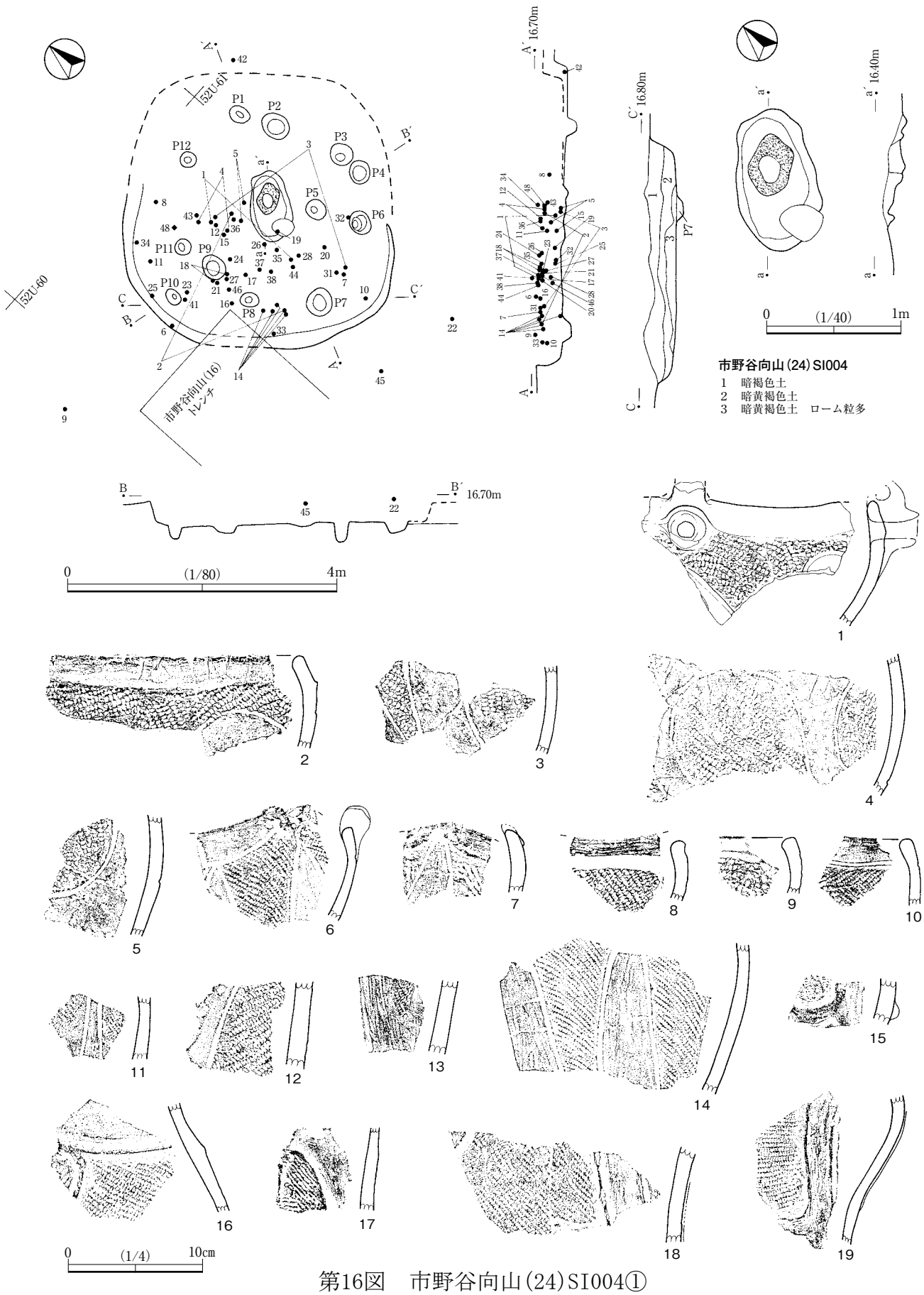
施文している。11・12は沈線による懸垂区画、13・14は沈線による横位連繋弧線文である。弧線文の先端は尖っている。

15は隆帯と沈線による区画文、16～27は隆起線による区画文が描出される胴部片である。16は弧線文あるいは渦巻き文が描かれる。隆起線のナゾリは縄文に及ぶ。17・19・20・22・23・25は横位連繋弧線文であろう。

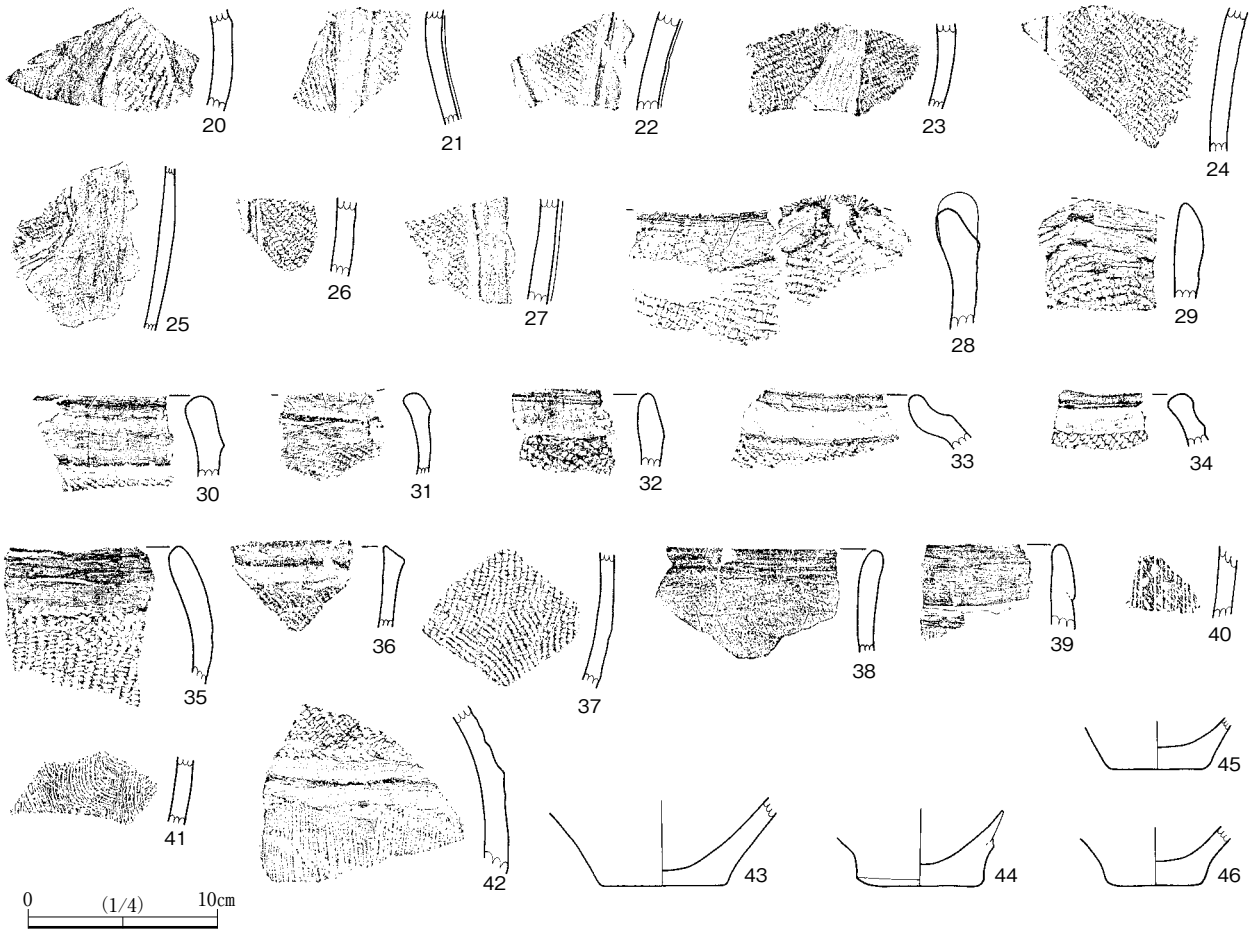
28～35は口縁部無文帯を区画する隆起線と縄文のみの口縁部片である。28は隆起線が波頂部で集約し突起状になる。29が２本対の微隆起線が口縁部に沿って施される。30の隆起線は断面三角形に近い。ナゾリが縄文に及んでいる。32・34・35は縄文が隆起線に乗っている。36は口唇部断面形が三角形を呈する。37はLRが多方向に施文されている。38は壺型土器の口縁部であろう。39～41は櫛歯状工具による条線が施されたものである。42は隆起線を境に調整が異なる。隆起線より上が縄文RL、下が櫛歯状工具による条線で、縄文はナゾリによって消されている所がある。条線はナゾリより後に施されている。43～46は底部である。ミガキもしくはナデで仕上げられる。

いずれも加曽利ＥⅣ式の範疇で捉えられるもので、一部加曽利ＥⅢ式の新しい部分を含む可能性がある。

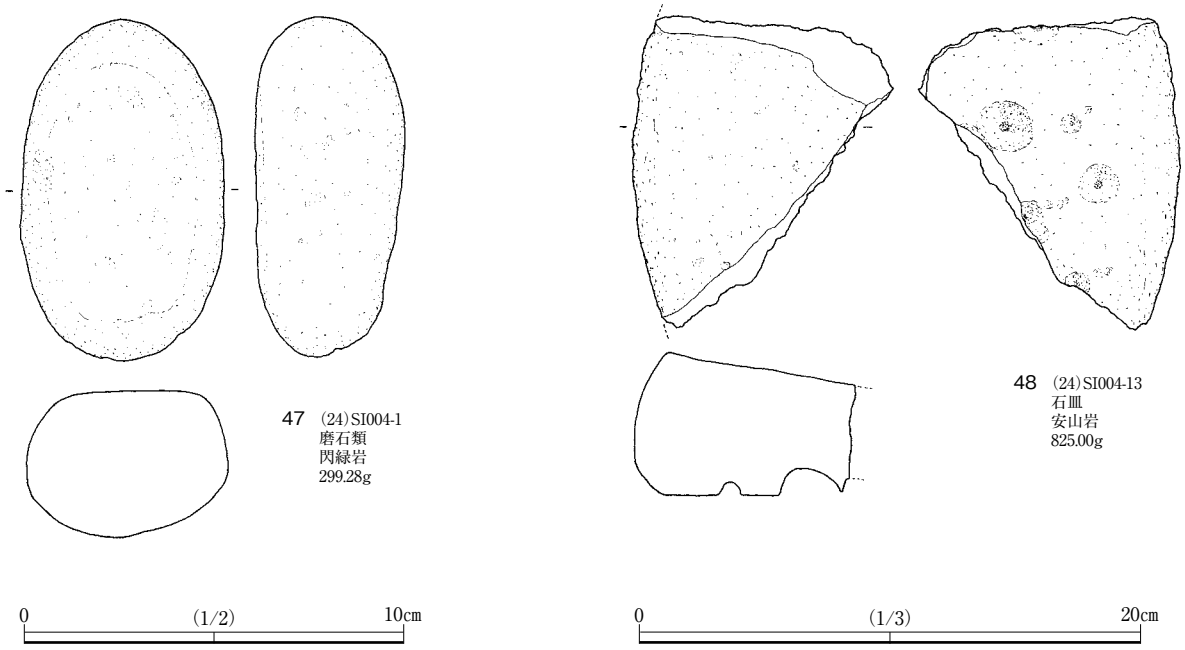
47は閃緑岩を石材とする磨石類で、敲打痕はみられない。48は安山岩を石材とする石皿である。裏面に直径２㎝以下の凹みが複数みられる。他に安山岩、砂岩、石英斑岩を石材とする礫片、黒曜石、チャート



第16図 市野谷向山(24)SI004①



第17図　市野谷向山(24)SI004②



第18図　市野谷向山(24)SI004③

の剥片が出土している。

市野谷向山遺跡(27)SI001（第19～22図、図版３・６・７・11）

48Ｚ－32・33・42・43グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈するが、北東部分は攪乱を受け、不明確である。主軸方位はＮ－25°－Ｗ、規模は6.25ｍ×4.73ｍ、確認面からの深さは18㎝である。炉は検出されなかった。ピットは４基検出されたが、いずれも９㎝以下と浅く、配置もばらつきがあることから、本住居址に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物　遺物の出土量は多く、95点を図示した。土器は前期黒浜式が主体で、わずかに関山式を含む。１～15は関山式である。１は単節縄文RLを地文とし、２条の平行沈線によって三角形文が描出され、区画線に沿って刺突文が施される。２は３条の平行沈線により文様が描出される。３～12・14も２と類似の文様をもつ。５は口唇部に条線がみられ、波状口縁に沿うように３条の沈線が廻り、その上に刺突文が施される。10は鍔状隆起線が付される。13は１条の沈線で弧線を描き、円形刺突文が施される。15は鋸歯状の沈線文である。

16～91は黒浜式である。16は注口土器で、口縁と注口基部に押引き文が廻る。17は波状口縁に沿って押引き文が２条廻り、垂下する押引き文で文様を描く。18・19は結節沈線文、20・21は刺突文が施される。20は輪積み痕を境に文様が変わり、上半はループ文、下半は刺突文である。22～27は沈線文が施されるもので、26のみ縦位の沈線、他は格子目状沈線である。28～38は縄文を地文に沈線もしくは結節沈線で文様が描かれる。39は口縁部に条線が施される。40は無節Ｌを地文に鍔状隆起線が付される。

41～87は縄文を文様の主体とする。41～46は異なる縄文原体によって羽状縄文が施されるものである。41・42は無節ＬとＲ、43～46は単節LRとRLによる。41には施文単位の境にミミズ腫れ状の粘土の盛り上がりがみられる。47～69は単一の縄文原体によるもので、47～54は無節Ｌ、55は無節Ｒ、56・57はLR、58～69はRLが施される。70～85は附加条縄文である。70・71はＬもしくはＲを２本附加した軸縄不明の附加条が羽状構成をとる。72は附加条第１種で軸縄RLにＲを２本附加したもの、73・74は附加条第２種でｒを１本附加したものである。75～80はＬを２本、81～84はＲを２本附加しているが、いずれも軸縄は不明である。85は附加条第２種、無節Ｌを軸にＲを２本附加している。86・87は結節回転文か。

88～91は底部である。88は沈線文、89・90には無節Ｌが施されている。

92は繊維を含まず、横位の平行沈線が施される口縁部片で、興津式と思われる。

石器類は８点出土し、３点を図示した。93は黒曜石製の石鏃である。片側の脚部のみが遺存する。94は石英斑岩製の磨石類である。被熱によるためか、基部を欠損している。95は安山岩製の石皿である。半分ほど欠損しているが、両面ともよく使いこまれている。他にガラス質黒色安山岩製の二次加工ある剥片、花崗岩、砂岩、安山岩を石材とする礫片が出土している。

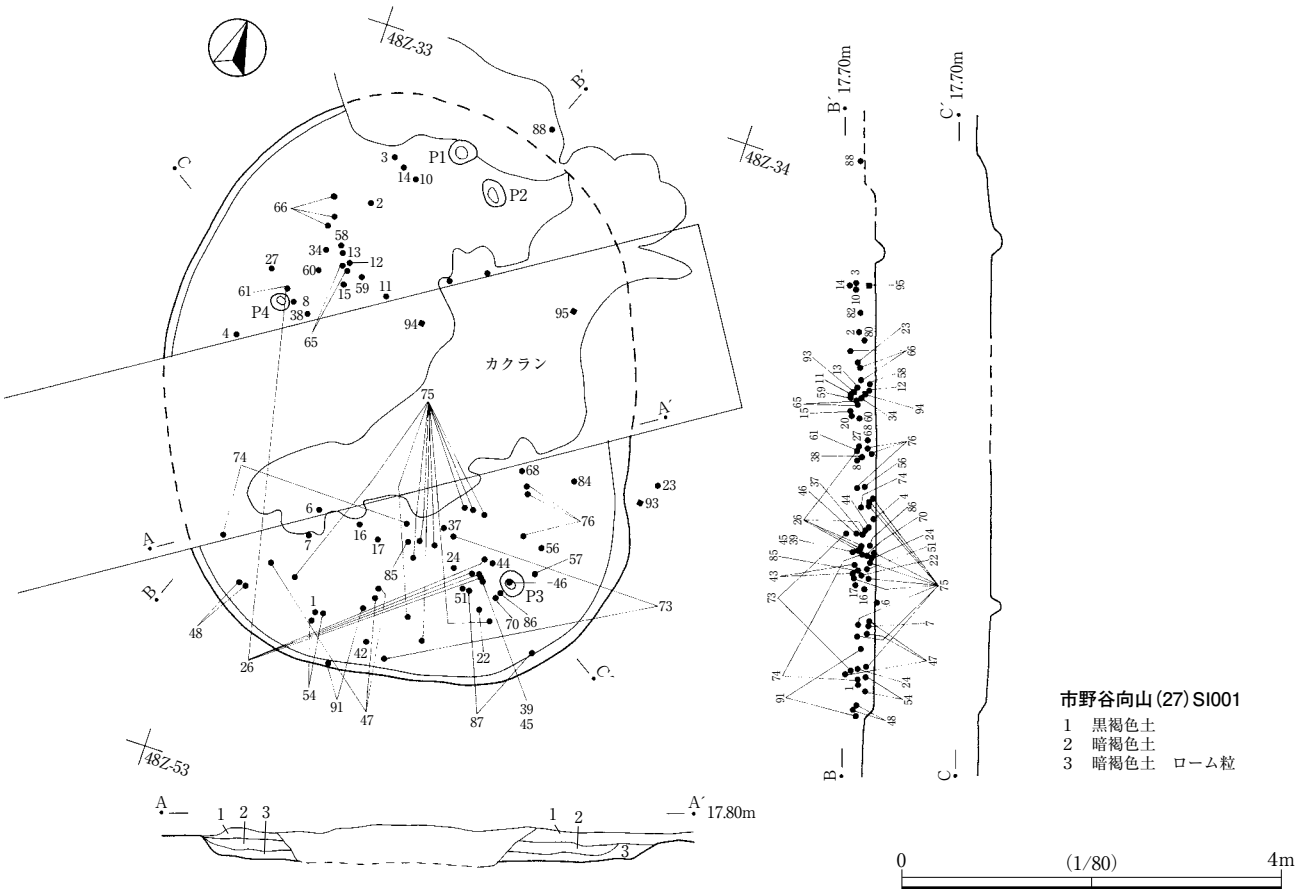
２．土坑

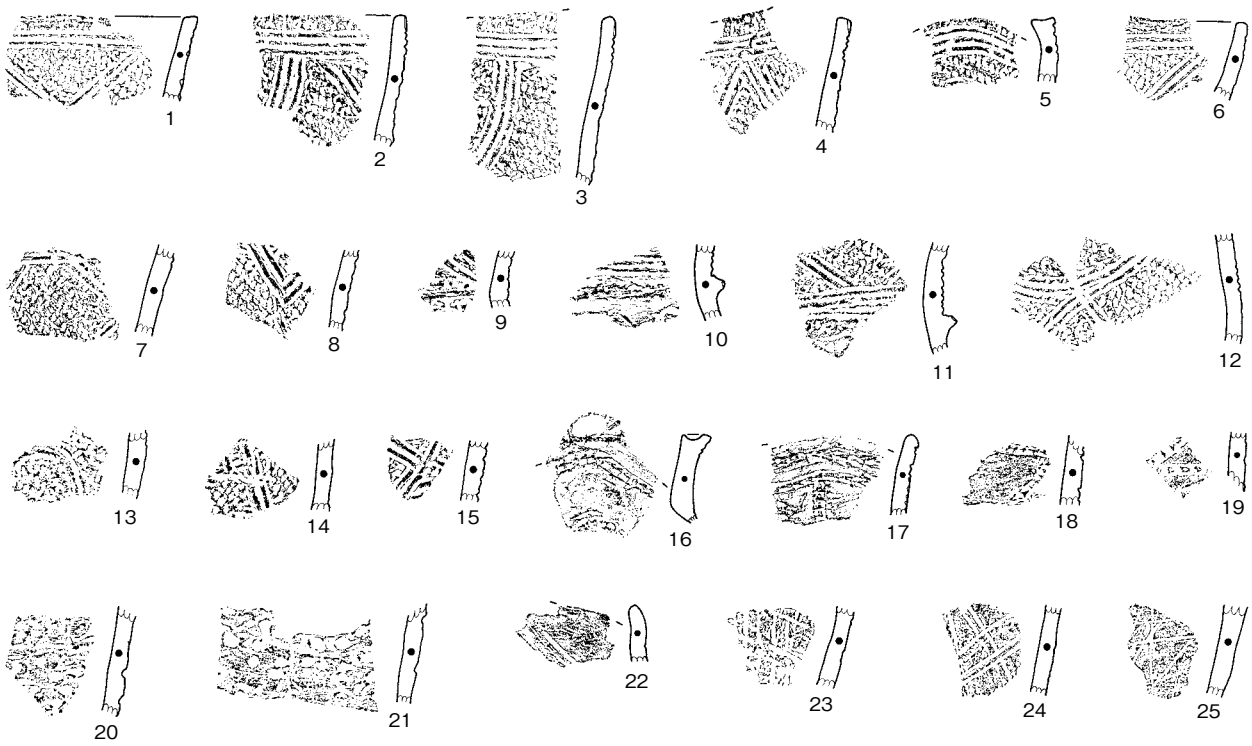
市野谷向山遺跡(24)SK001（第23図、図版３）

52Ｕ－93グリッドに位置する。1.08ｍ×0.68ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは54㎝である。西側に0.62ｍ×0.50ｍ、深さ35㎝の小ピットが重複する。

市野谷向山遺跡(24)SK002（第23図、図版３）

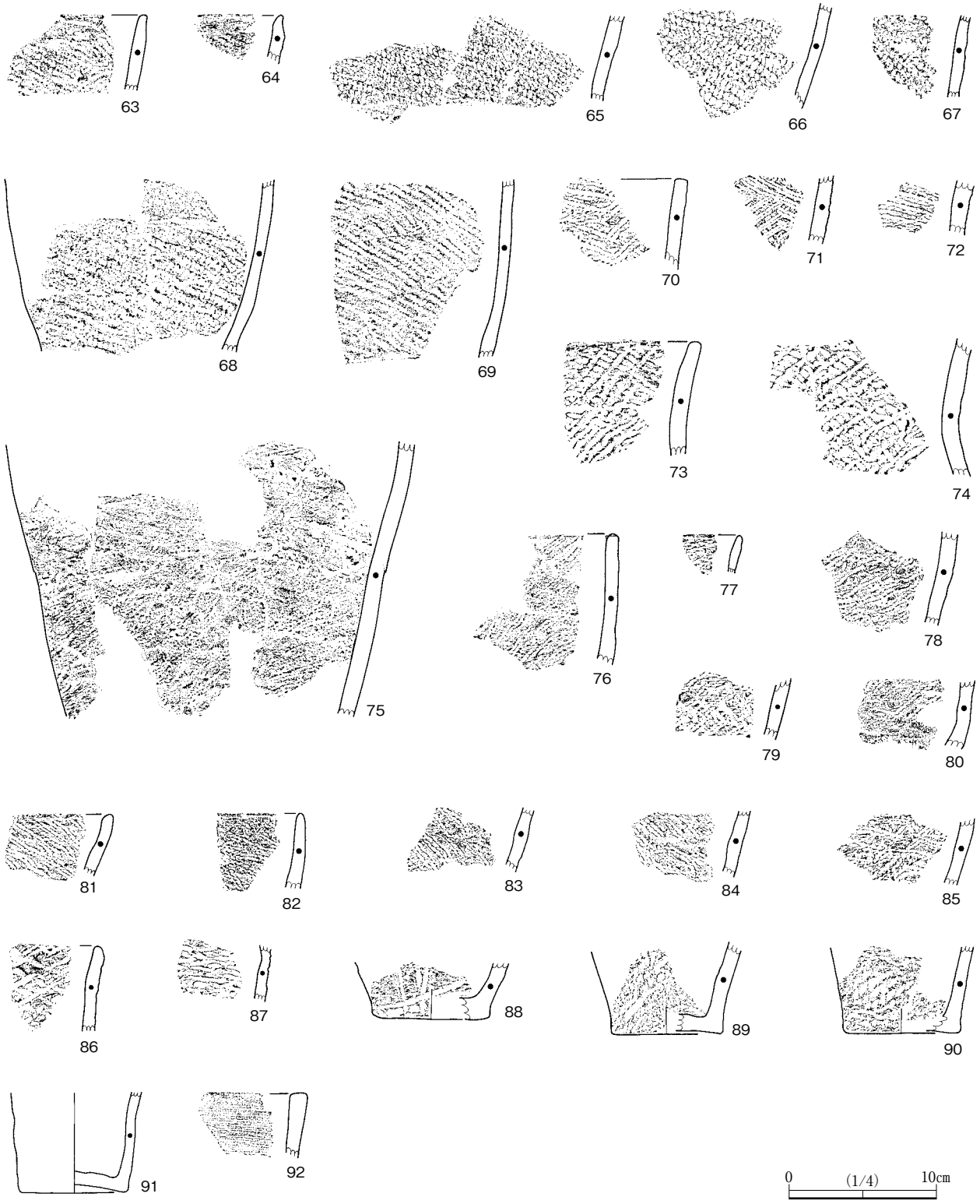
52U－92・93グリッドに位置する。(24)SK001の北西に接するが、新旧関係は不明である。0.89ｍ×0.65ｍ



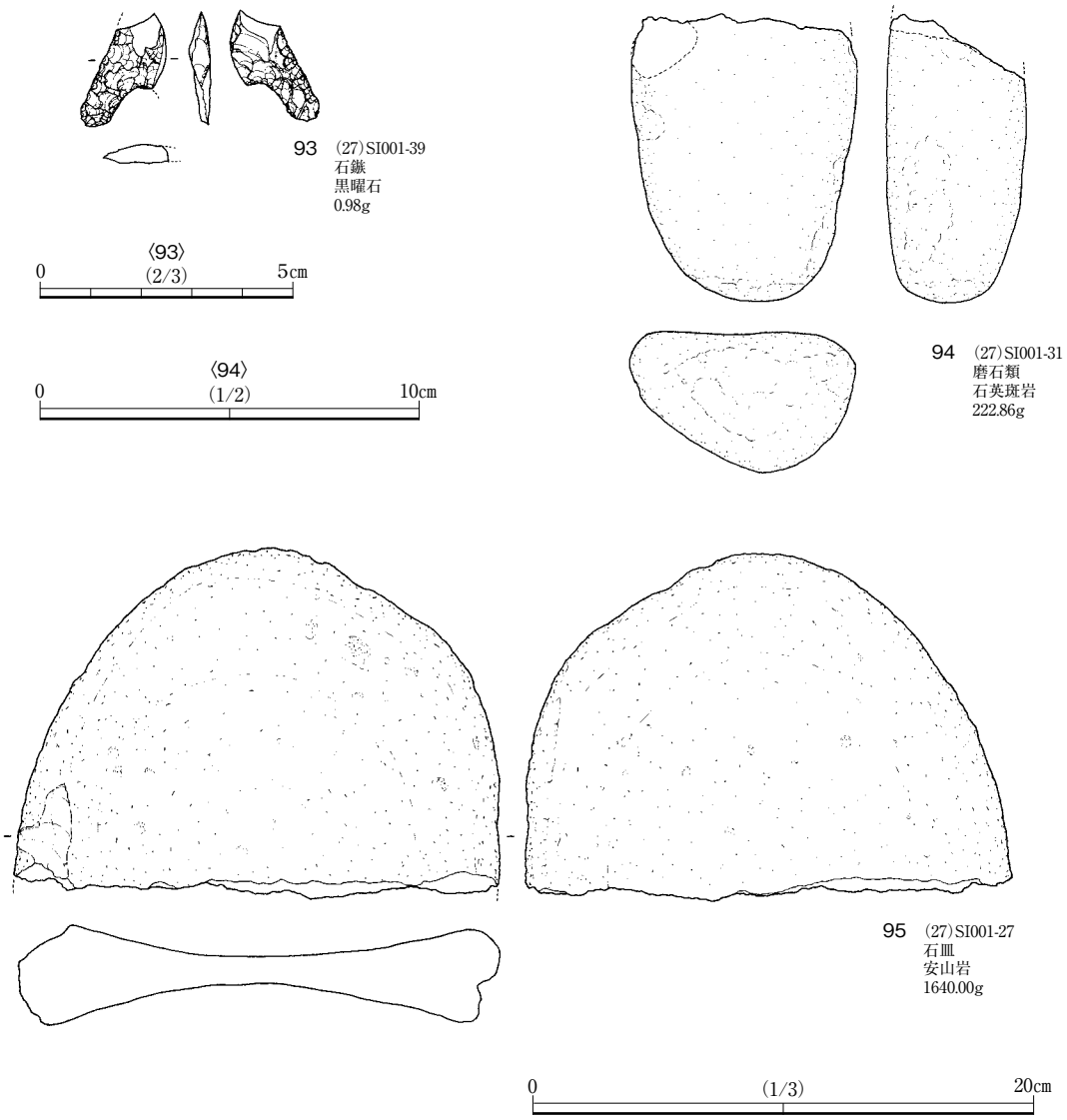


第19図　市野谷向山(27)SI001①

第20図　市野谷向山(27)SI001②



第21図　市野谷向山(27)SI001③



第22図　市野谷向山(27)SI001④

の楕円形で、確認面からの深さは42cmである。南西に底面径35cm、深さ24cmの小ピットが重複する。

市野谷向山遺跡(24)SK003（第23・24図、図版３・11）

52U－82・92グリッドに位置し、(24)SK002の北西に近接する。南西端は調査区外のため未検出である。平面形は長楕円形を呈し、長軸0.98m以上、短軸0.80m、確認面からの深さは23cmと浅い。

出土遺物　覆土中から少量の土器が出土した。１は単節RL、２は櫛歯状工具による条線が施される。小片のため詳細な時期は不明だが、加曽利Ｅ式期のものと思われる。

市野谷向山遺跡(24)SK004（第23図、図版３）

52U－83グリッドに位置する。0.38m×0.30mの楕円形で、確認面からの深さは38cmである。覆土は暗褐色土を主体とする。

市野谷向山遺跡(24)SK005（第23・24図、図版３・11）

52Ｕ－96グリッドに位置する袋状土坑である。(24)SI001の炉を壊して築かれるが、北東部分は木根のため不明確である。やや歪な長楕円形を呈し、検出面での規模は1.15m、底面では1.18m、(24)SI001の床面からの深さは62㎝である。覆土は暗褐色土を主体とする。出土した遺物から本遺構の時期は加曽利E式期と思われる。

出土遺物　覆土中からややまとまった量の土器が出土している。１は口縁部無文帯を作出する区画隆起線と無文の帯状部が付着し、突起となる。単節LR施文後、部分的にナゾリが施されている。２は口縁部無文帯を区画する隆起線上にRLが施される。沈線によって弧状に区画された無文部が隆起線に接する。３も隆起線上にRLが施されている。隆起線直下の縄文は横方向、以下は縦方向に施文される。沈線によって区画された無文部は、斜方向に垂下する。４は無文部を区画する沈線が波頂部手前で向きを変え、枠状の区画になる。５は口縁部無文帯を沈線で区画、沈線直下の縄文RLは横方向、以下は縦方向に施文される。６～10は沈線、11は微隆起線による懸垂区画がみられる。７・９はＵ字状の区画か。12はRLが施される。13は胴部片を利用した土器片錘である。長さ57㎜、幅42㎜、厚さ13㎜、周縁部を打ち欠いて作っており、紐かけははっきりとしている。文様の特徴から、加曽利ＥⅣ式期に帰属するものと思われる。

市野谷向山遺跡(30)SK001（第23・24図、図版４・11）

51Ｔ－42グリッドに位置する。径1.08mのやや歪な円形で、確認面からの深さは26㎝である。壁の立ち上がりはやや急角度で、底面との境は明瞭である。

出土遺物　覆土中から大型の破片を含む土器片を多く出土した。１は波状口縁の深鉢で、口縁部から胴部上半が内湾し、胴部中位で括れる器形である。両側に沈線を伴った渦巻文を主とし、パネル化して単節RLが充填される。地文は単節RLである。２は隆帯と沈線による枠状の区画文である。摩滅が著しく、縄文原体は不明である。３・４は隆帯と沈線により胴部を横位に区画している。５は高さのある隆帯による横位区画で、弧状沈線が垂下する。６は２条一組の隆起線による区画、７は隆起線による弧線文区画、８は両側に沈線を伴った隆起線による区画である。９はやや丸みを帯びた隆帯が、沈線状のナゾリを伴いながら弧状に垂下する。10・12は２条一組の隆起線と沈線による懸垂文区画、11は沈線による横位連繋弧線文、13は沈線による磨消懸垂文である。14～20は櫛歯状工具による条線が施された鉢である。口縁部を沈線によって区画する。胴部上半はコンパス文風、下半は縦位の直線となる。いずれも文様の特徴から、加曽利ＥⅢ式期に属するものと思われる。

３．陥穴

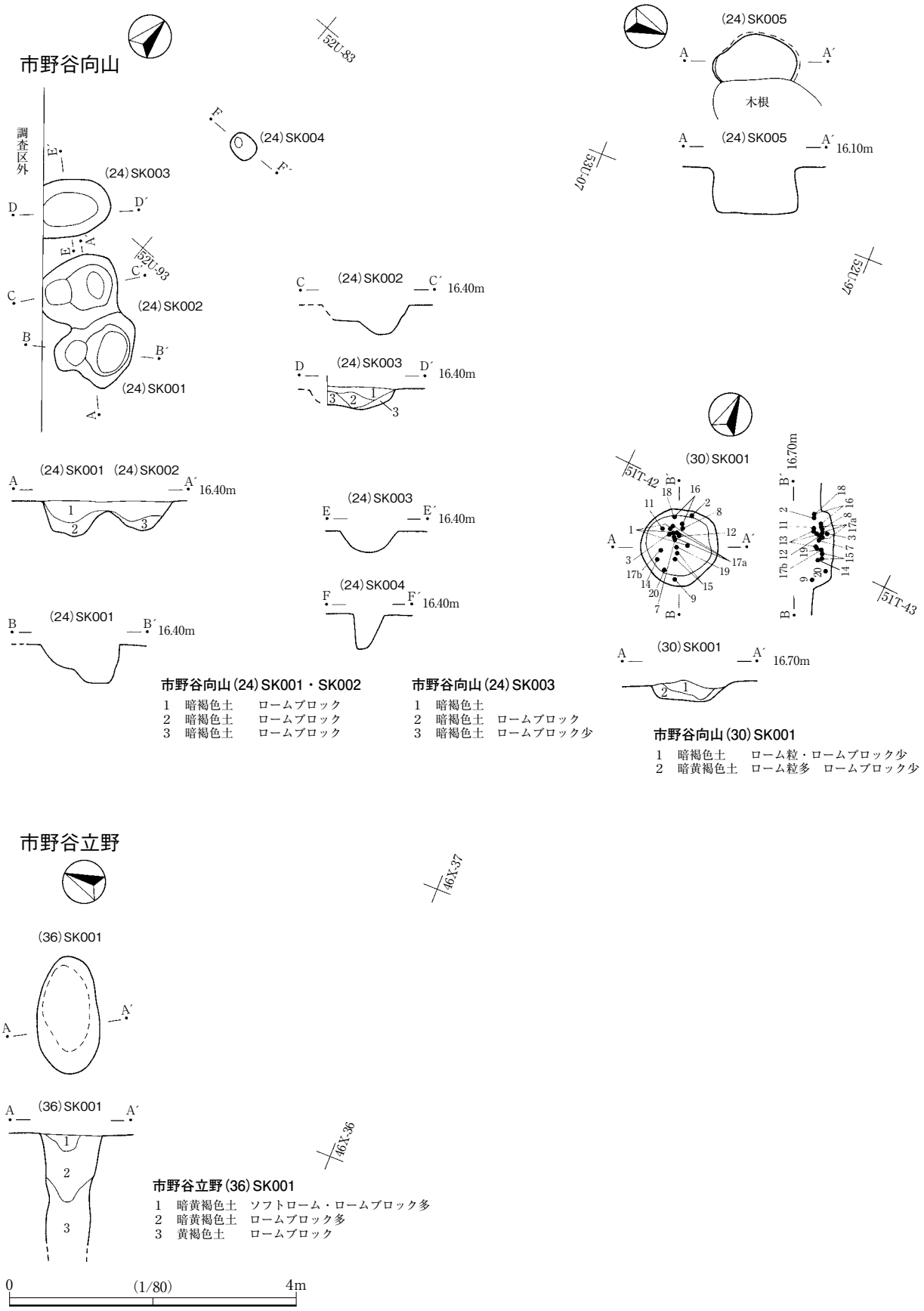
市野谷立野遺跡(36)SK001（第23図、図版４）

46Ｘ－25・26グリッドに位置する。1.55m×0.86mの長楕円形で、２mほど掘り進めたところで危険回避のため調査を中止した。

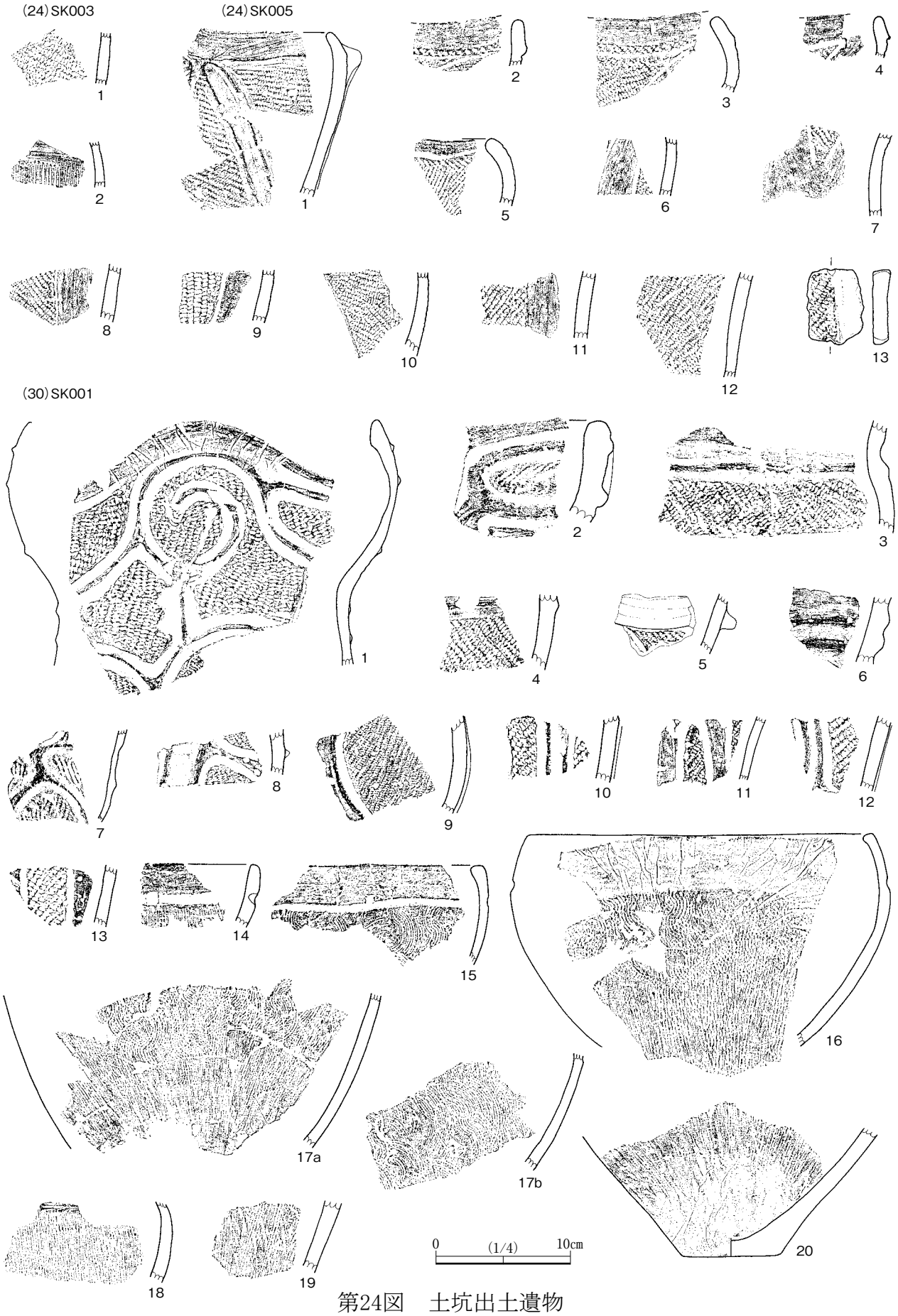
４．遺構外出土土器

(1) 市野谷向山遺跡（第25～31図、図版８・11～14）

遺物の出土は多く、遺構の検出された51Ｔ・52Ｕグリッドに特に集中する。時期は遺構出土の土器と同じく、前期黒浜式と中期加曽利Ｅ式が主体で、ごくわずかに早期、後期・晩期の土器が混じる。



第23図　市野谷向山(24)SK001 ～ SK005・(30)SK001・市野谷立野(36)SK001



第24図　土坑出土遺物

１～５は早期の土器である。１は撚糸文系の口縁部片で、撚糸文ℓが施される。２は沈線文系、３～５は条痕文系である。５はキザミを伴った隆起線により文様が描かれる。

６～15は前期関山式である。６は２個の瘤状貼付け文を有する口縁部片で、貼付け文間に半截竹管による沈線文が描かれる。地文は単節LRである。７・８は口縁部を鍔状隆起線で区画、環状の単位文がみられる。区画内に押引き文が充填される。７の地文は附加条第２種（軸縄RLにＬ２本附加）である。８も附加条と思われるが、摩滅のため判然としない。９は２本対の隆帯が横位に廻り、隆帯を上下に繋ぐ区画文がある。胴部は単節LRが施される。10は半截竹管による重弧文に刺突文が付随する。11～13は沈線により文様が描出される。14は沈線による菱形状の文様と思われる。文様帯の上下は沈線によって区画される。地文は単節LRで、無文部と縄文部がある。15は単節RLで、ループ文が３段みられる。

16～187は黒浜式である。16・17は沈線と刺突文、18は櫛描文、19～25は沈線で文様が描出される。26～30は縄文を地文とし、結節沈線あるいは押引き文で文様が描出される。31～44は縄文を地文として結節沈線により文様が描出される。36は無節Ｒ、他は全て単節RLを地文とする。45は単節RLを地文に楕円形の沈線文が描かれる。46・47は単節RLを地文に刺突文が施される。48～57は鍔状隆起線を有するものである。48・49は隆起線の片側あるいは両側に刺突文が付随する。52は口唇部に隆帯を貼付け、胴部屈曲部との間に文様を展開、２本対の隆帯により鋸歯状文を描く。地文は単節LRで、胴部はLRとRLの羽状縄文である。58～61は貝殻背圧痕文が施される。62～82は異なる縄文原体によって羽状もしくは菱形構成をとるものである。62・63は無節ＬとＲ、64～79は単節LRとRL、80はRLとＬ、81・82は附加条による。81は附加条第２種（軸縄ＬにＬ２本、軸縄ＲにＲ２本附加）、82は附加条第２種（軸縄ＲにＬ２本、軸縄ＬにＲ２本附加）である。83～178は単一の原体によるもので、83～97は無節Ｌ、98～102は無節Ｒ、103～132は単節LR、133～161はRLで、端末結節を有するものもみられる。146・147は注口土器である。162～172は附加条縄文である。162は附加条第２種（軸縄RLにＲを１本附加）、163は附加条第１種（軸縄RLにＲを２本附加）、165・166は附加条第２種（軸縄ＬにＬ２本附加）、171は附加条第１種（軸縄RLにＬを２本附加）、他は軸縄不明でＬもしくはＲを附加するものである。172はＬとＲを一組にして附加した軸縄不明の附加条で、網目状に見える所もある。173は結節回転文か。174はＬ２本を一組にして交互に巻いた網目状撚糸文、175は撚糸文Ｌ、176はＲを２本一組、177はＲとＬを一組にした撚糸文である。178は条痕文か。節のはっきりしないLRの可能性もある。179・180は無文である。181～187は底部である。上げ底を呈するものが多く、182・187は輪高台状である。

188・189は諸磯式と思われる。188は単節RLを地文に平行沈線によって山形文が描かれる。189が半截竹管による波状沈線が描かれる。周縁部が研磨され、丸みを帯びている。190は口縁部に条線帯をもつ。浮島式か。191は磨消貝殻文で興津式である。

192～296は加曽利Ｅ式である。192は沈線による懸垂文区画で、複節RLRが充填される。193・194は撚糸文Ｒが施される。195～197は楕円区画文、198は隆起線による区画をもつ。199・200は沈線による逆Ｕ字状の区画で、地文の単節RLは口縁部直下と胴部で施文方向を変えている。201・202は隆帯と沈線による区画文、203は２本一組の隆起線による懸垂文、204・205は沈線による磨消懸垂文で、204にはＵ字状の沈線文もみられる。以上は加曽利ＥⅢ式であると思われる。205は口縁部を区画する沈線直下に円形刺突文が廻る。207は沈線上に刺突文が重ねられる。208は口縁部無文帯を作出する区画文がみられないもので、長方形の沈線区画が口縁部直下から始まる。209は波頂部下に山形の沈線区画が描かれ、LRが充填さ

れる。210～216は口縁部無文帯を沈線で区画する。217・218は沈線による入り組み文である。219～230は沈線による区画文がみられる胴部片である。

231～267は隆起線によって文様が描出される。231・232は口縁部無文帯を区画する隆起線に、無文の帯状部が付着する。233・234・236～238は隆起線が集約して突起となる。252は隆起線で区画された無文の帯状部が口縁端部へと延びる。区画内は単節LRが充填される。253～267は隆起線による懸垂文あるいはU字状の区画がみられる胴部片である。255は単節LRに弧状の隆起線が貼り付けられ、無文部はみられない。261の無文部は研磨が強いためか凹んでいる。268・269は縄文のみがみられる胴部片で、268は複節RLR、269は単節RLである。

270・271は壺型土器の口縁部で、隆起線により口縁部無文帯を作出する。272はラッパ状の突起で、口縁部を区画すると思われる微隆起線が突起部まで延び、微隆起線上に縄文が及んでいる。273は微隆起線文で文様が描出される壺型土器の把手部分である。274～276は橋状把手である。277～286は櫛歯状工具による条線が施される。277は口唇部直下から条線が施される。278は沈線により口縁部無文帯が作出される。299・280は流水文風、282はナゾリを伴った隆起線による懸垂区画がみられる。287～296は底部である。287は胴部欠損後破断面を研磨している。

297～319は後期～晩期に属する土器である。297～301は称名寺式である。297は動物意匠をもつ把手で、円形刺突文によって目が表現される鳥頭形把手と思われる。文様は円形刺突文を伴った隆起線によって描出される。地文は単節RL、中央より右に沈線によって区画された無文部がみられる。298は環状把手と橋状把手が複合したものである。口縁部下端は沈線で区画され、列点文が２条廻る。胴部は単節RLが施される。299・300は屈曲する口縁部に沈線とキザミが施される。301は沈線区画に刺突文が充填される。302は隆帯上にキザミが施される口縁部片である。堀之内式か。303～305は加曽利Ｂ式である。303は綾杉状の条線文、304は斜位の条線文と猛進部にキザミが施される。305は磨消縄文である。306は安行１式の胴部片である。沈線を伴った帯状文による区画内に条線を充填する。307は安行２式の口縁部片である。口縁部縄文帯を沈線で区画し、キザミを伴った貼付け文を付している。308は帯縄文を有する晩期の鉢の胴部であろう。309～317は後期～晩期に伴う粗製土器の口縁部片である。318は沈線による入組三叉文が描かれる。319は後期に属する深鉢の底部で、底部外面に網代痕がみられる。

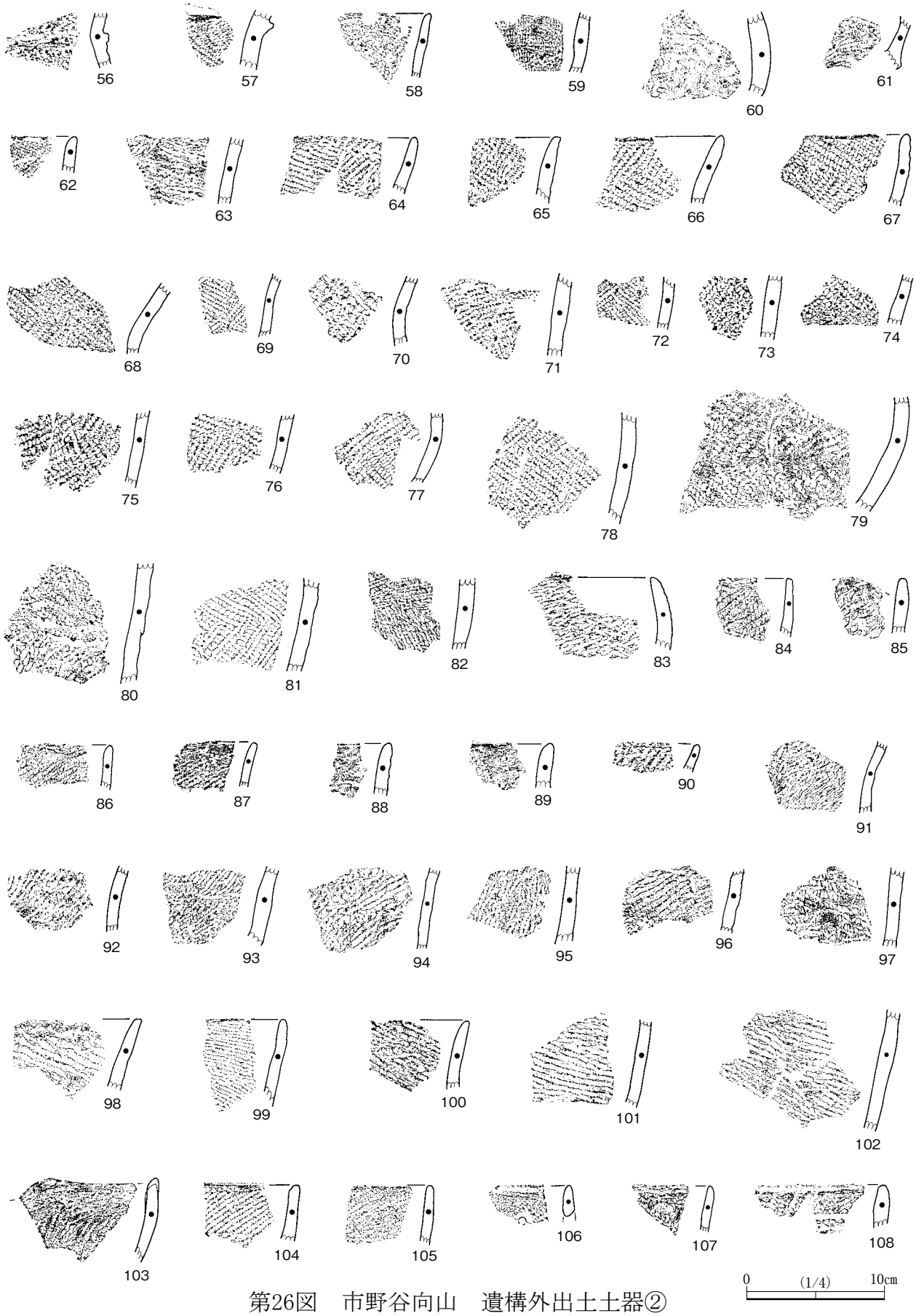
(2) 市野谷立野遺跡（第32図、図版14）

前期黒浜式の小片が主体で、僅かに中期・後期の土器を含む。１～11は黒浜式である。いずれも縄文のみを文様とする。１～４は無節Ｌ、５は遺存部下半にLRを施した後、上半部を斜方向になでている。６は単節LR、７は単節RL、８はＲ２本を一組にした網目状撚糸文か。９は附加条第２種（軸縄ＲにＲ２本附加、軸縄ＬにＬ２本附加）による羽状施文である。10は軸縄RLにＬを２本、11は軸縄RLにｒを１本附加した附加条第１種である。12～14は胎土に繊維を含まない。12は斜格子状の沈線が施された胴部片である。浮島式か。12は単節LR、13は刻みを伴った沈線が廻る底部片である。12・13は諸磯式と思われる。

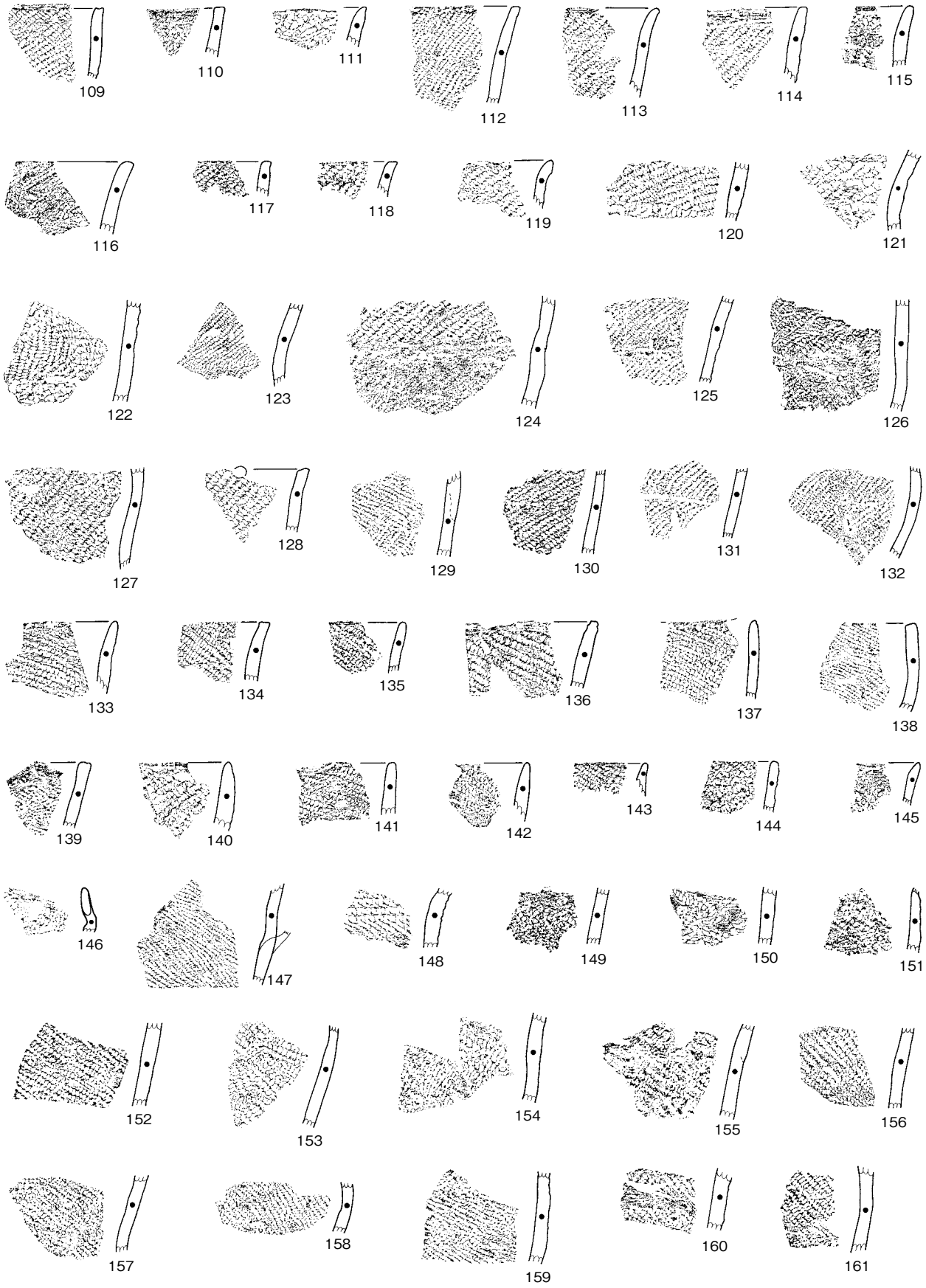
15は波状口縁で、隆起線により口縁部無文帯を区画する。隆起線は波頂部で鍵の手に屈曲する。胴部は沈線による長方形区画で、RLが充填される。加曽利ＥⅢ式と思われる。

16～18は後期の土器である。16・17は縄文帯が沈線で区画される。18は粗製土器の胴部片で、条線を地文とし、爪形文を伴った沈線が横位に廻る。

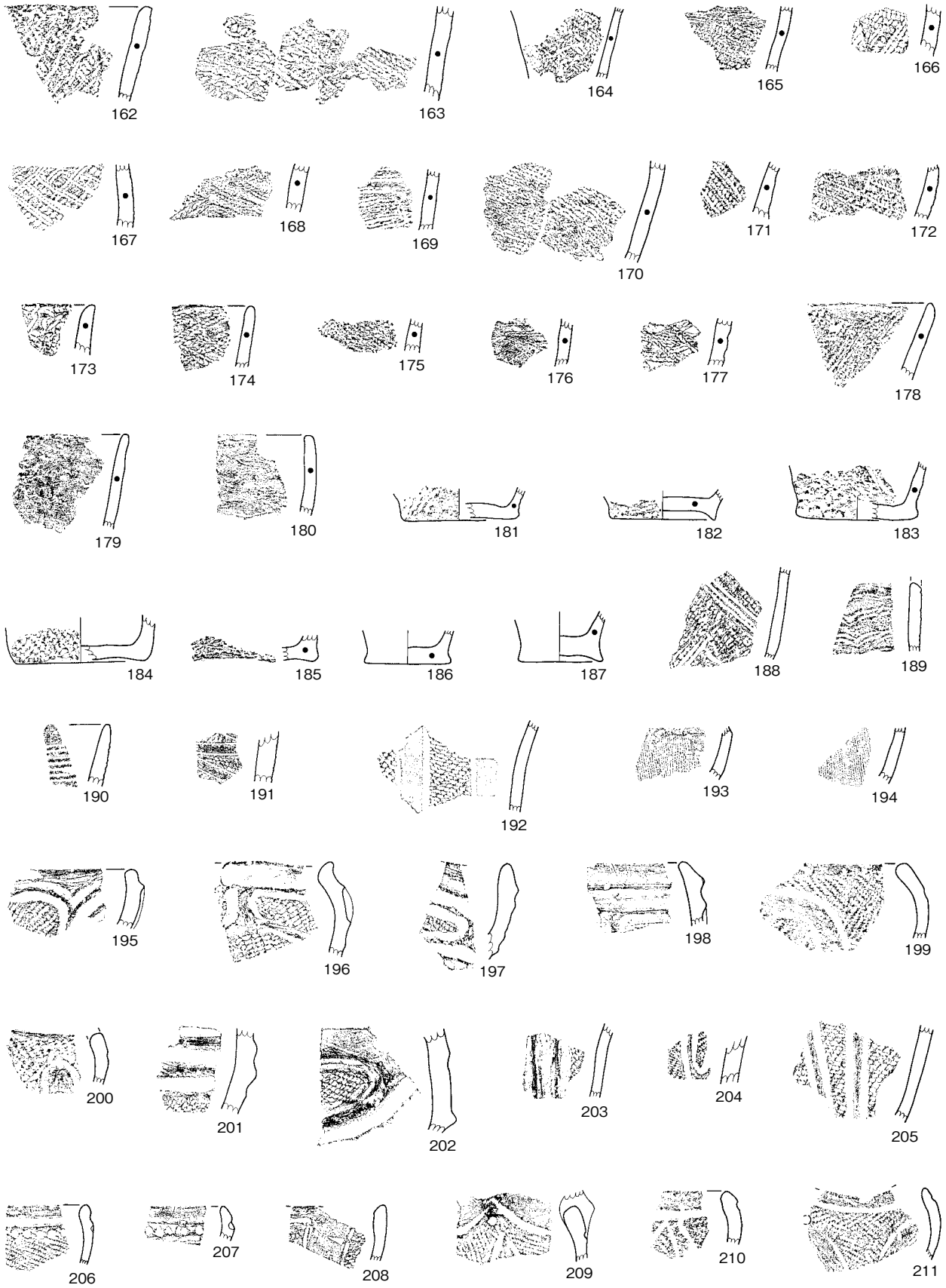
第25図　市野谷向山　遺構外出土土器①



第26図　市野谷向山　遺構外出土土器②

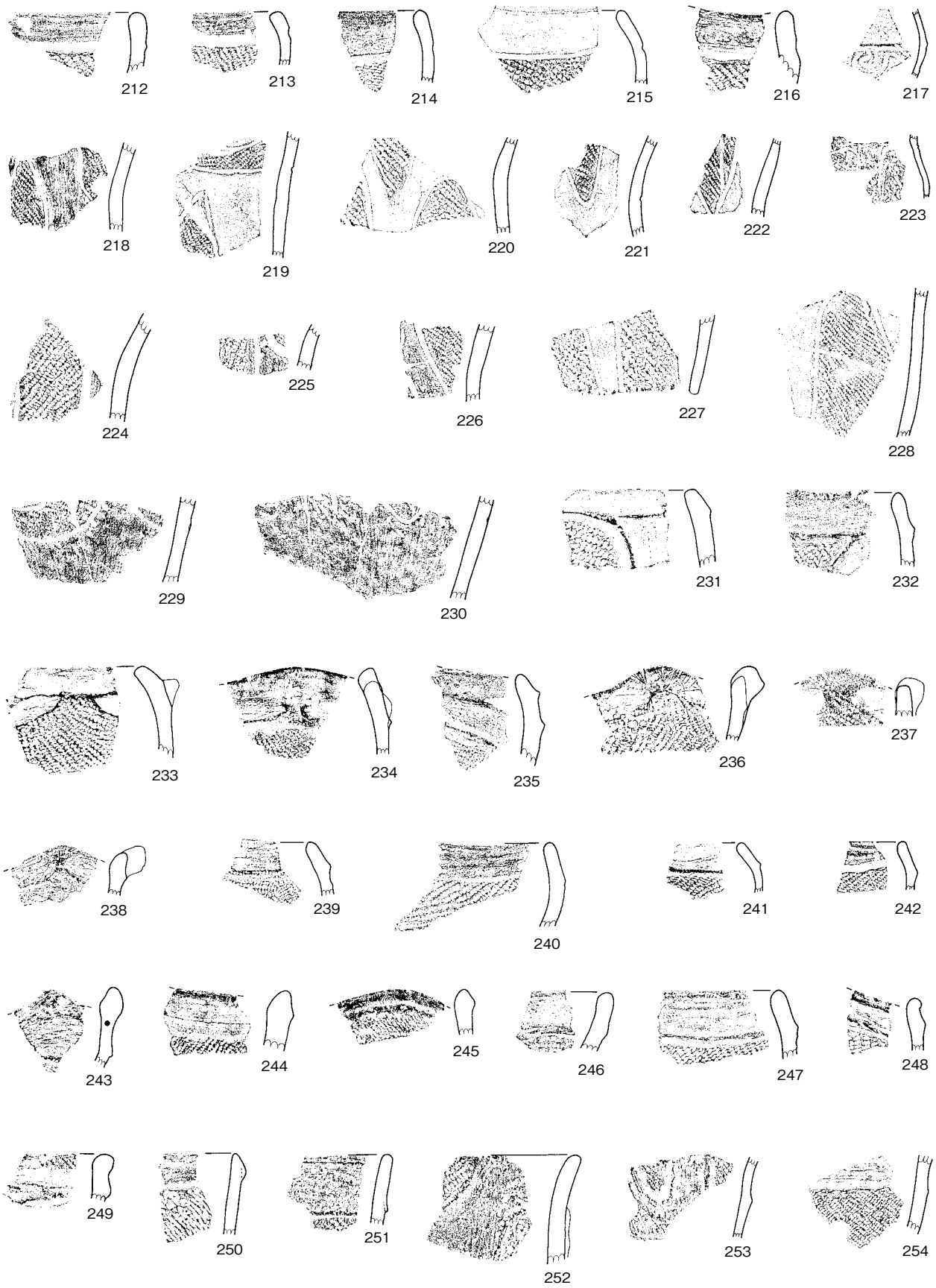


第27図　市野谷向山　遺構外出土土器③

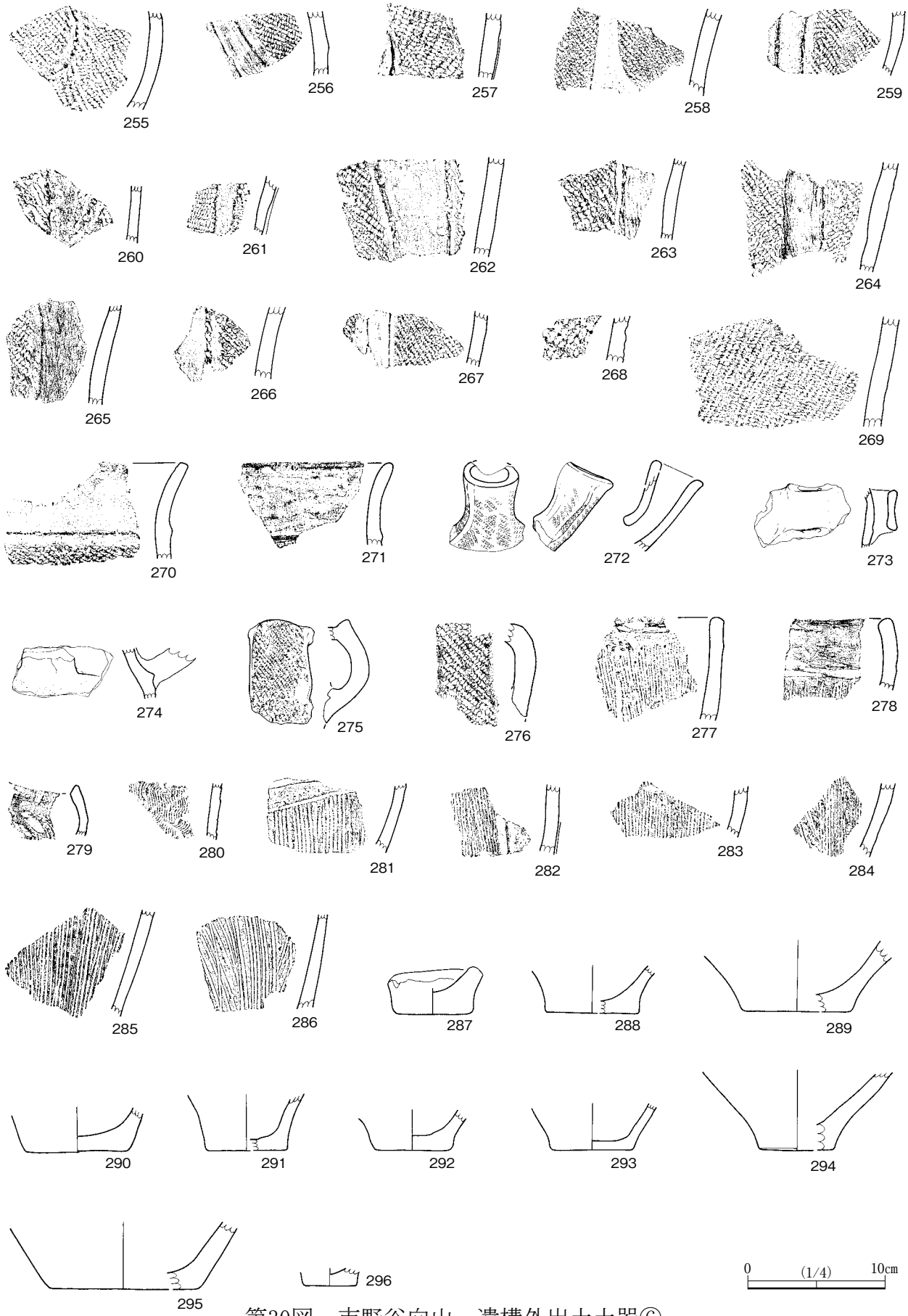


第28図　市野谷向山　遺構外出土土器④

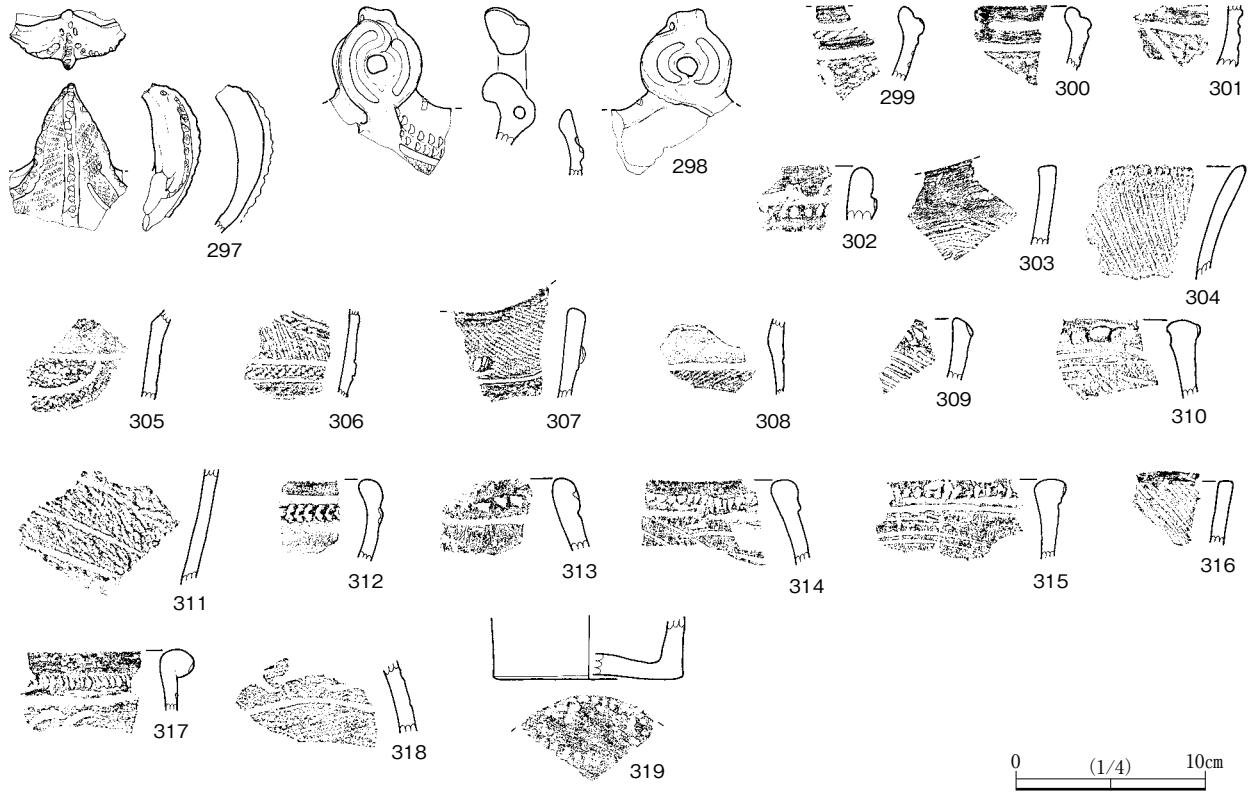
0 (1/4) 10cm



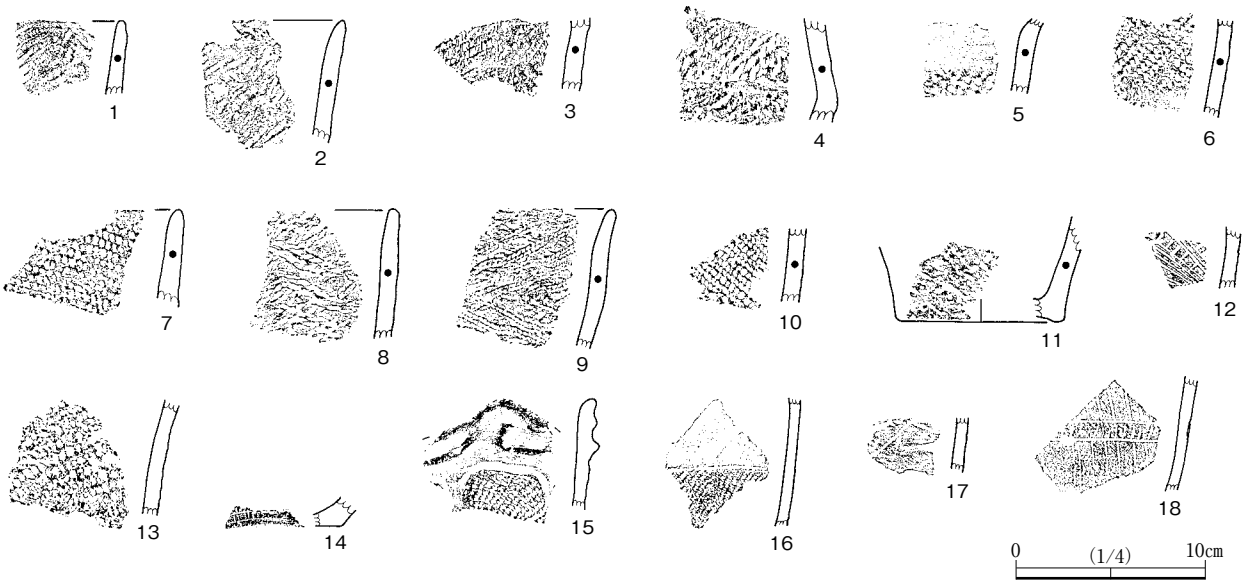
第29図　市野谷向山　遺構外出土土器⑤



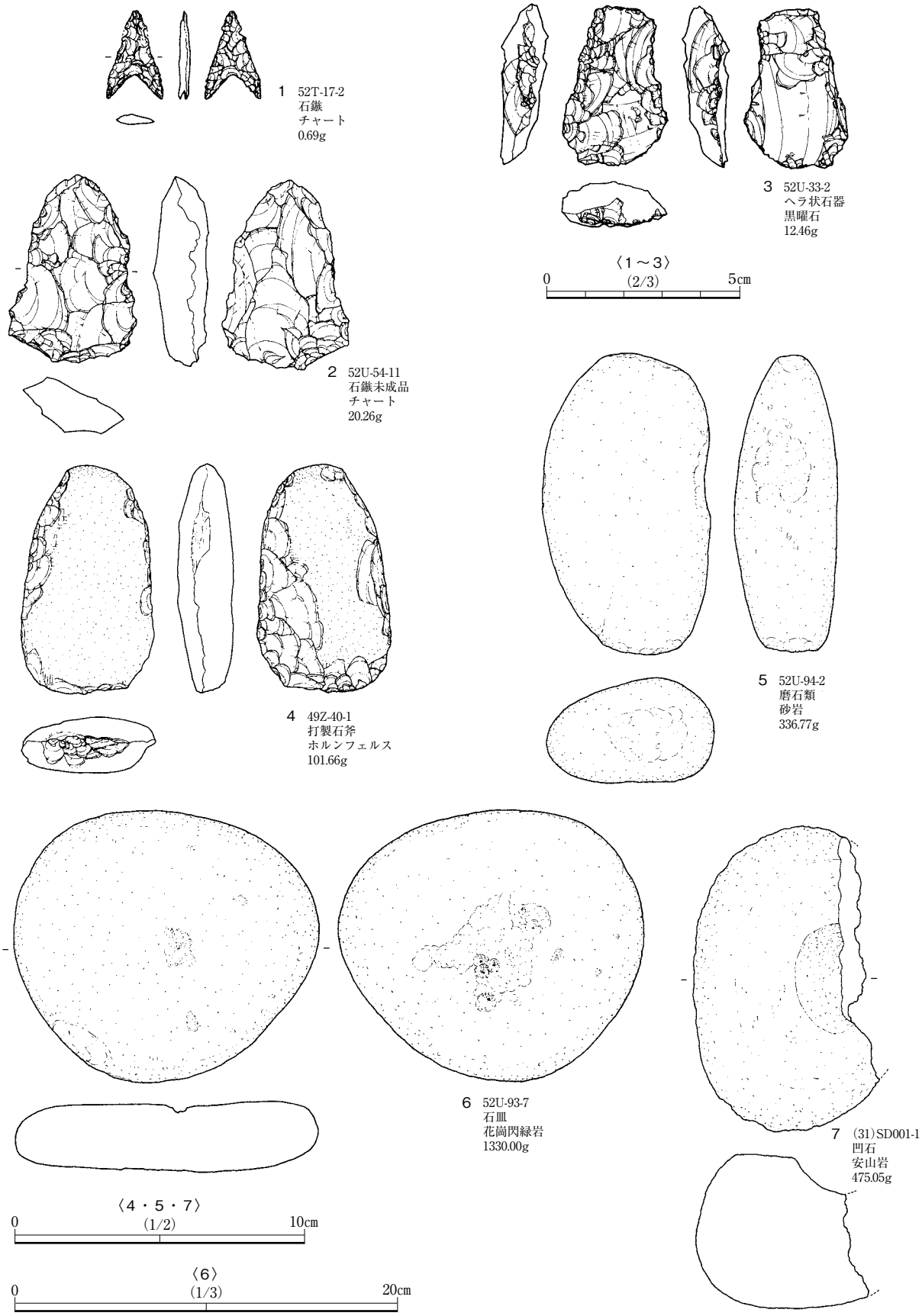
第30図　市野谷向山　遺構外出土土器⑥



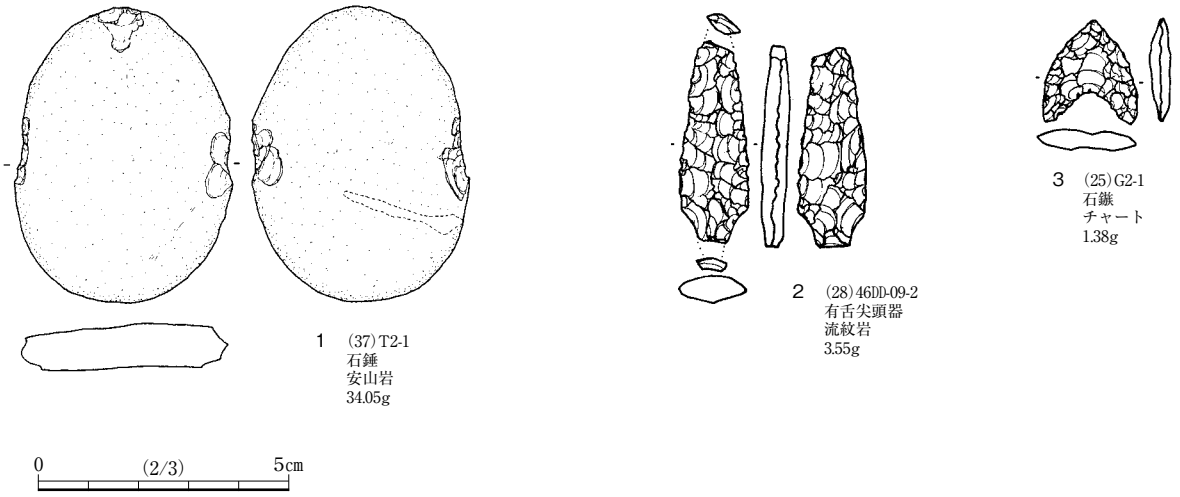
第31図　市野谷向山　遺構外出土土器⑦



第32図　市野谷立野　遺構外出土土器



第33図　市野谷向山　遺構外出土石器



第34図　市野谷立野　遺構外出土石器

５．遺構外出土石器

(1) 市野谷向山遺跡（第33図、図版６）

石器類は22点出土し、７点を図示した。１はチャート製の石鏃、２はチャート製の石鏃未成品、３は黒曜石製のヘラ状石器である。４は扁平な礫を素材とする打製石斧で、ホルンフェルス製である。５はやや細長い砂岩製の礫を素材とする磨石類である。敲打痕が擦れて滑らかになっており、擦ったり敲いたり、連続した作業が窺える。６は扁平な円礫を使用した石皿で、花崗閃緑岩を石材とする。７は安山岩製の凹石で、片側1/4程を欠損する。

(2) 市野谷立野遺跡（第34図、図版６）

石器類は第37次調査で４点出土し、１点を図示した。１は安山岩製の石錘である。扁平な円礫の上辺と左右に加工が施されている。

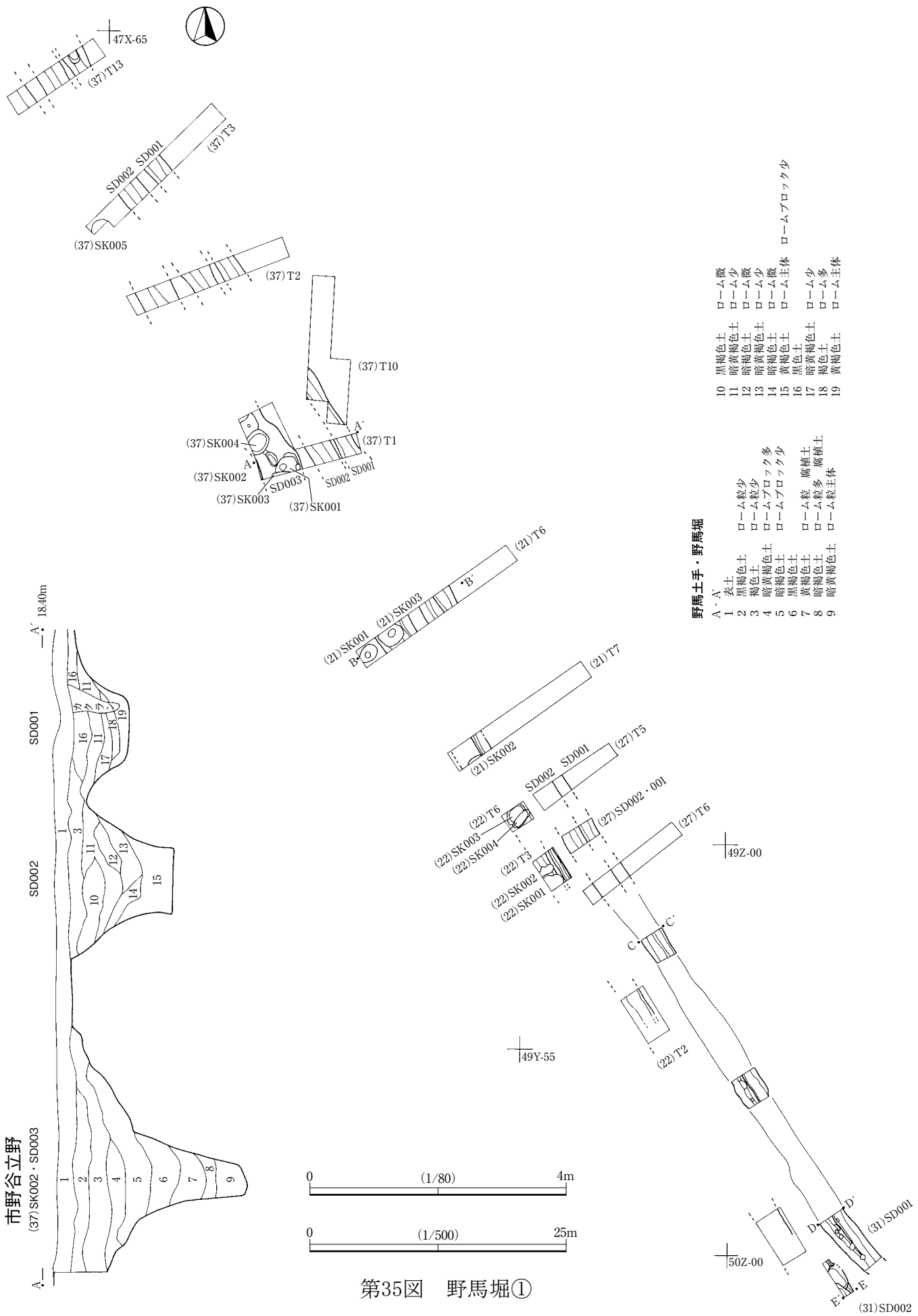
２・３は前回の報告の追加分である。２は流紋岩製の有舌尖頭器である。先端部・基部共に欠損している。３はチャート製の石鏃である。両面に加工が施されている。

第４節　近世

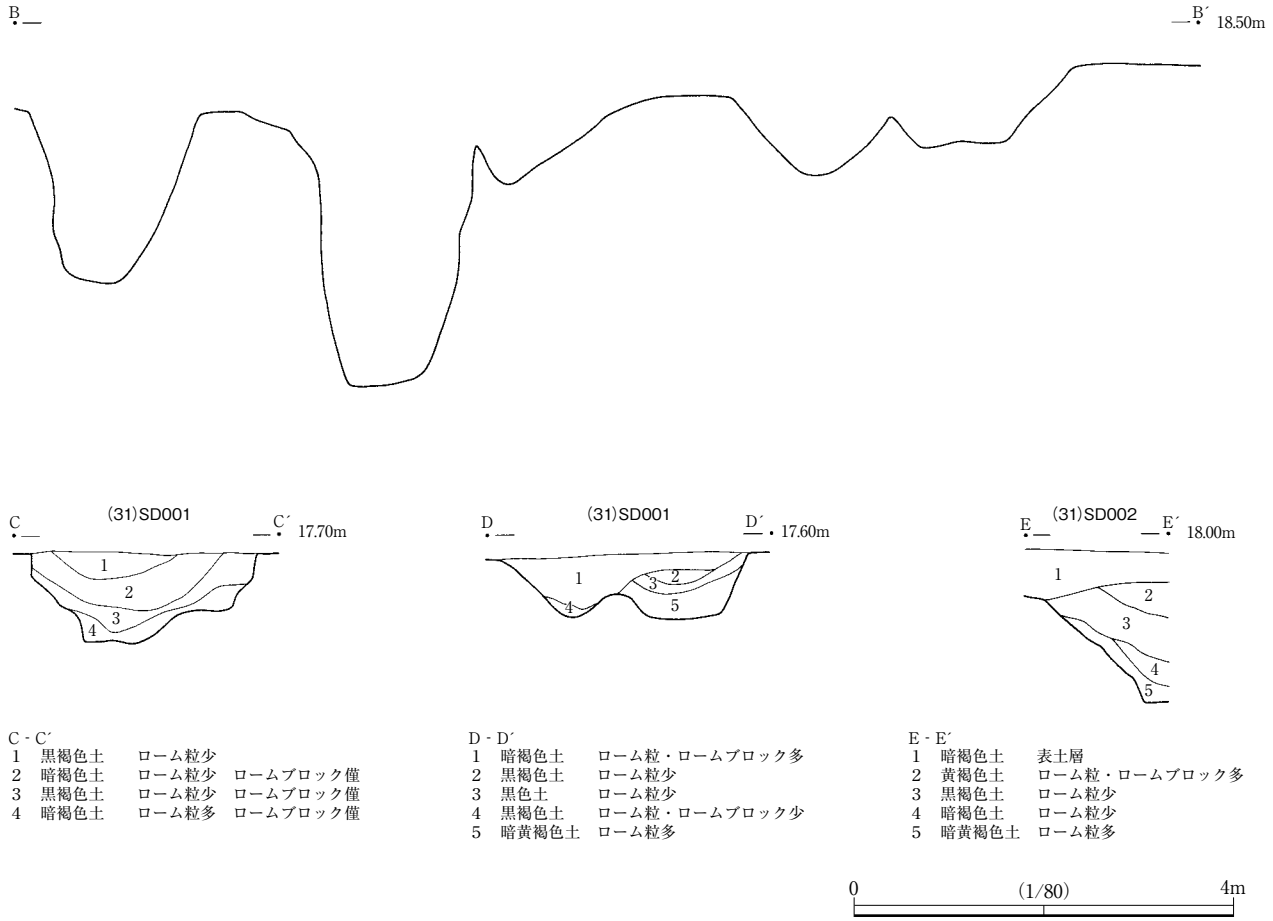
近世の遺構として市野谷立野遺跡(6)SD045から続く野馬堀３条、シシ穴12基が検出された。これらの遺構は、市野谷立野遺跡の南西端から市野谷向山遺跡の東端にかけて分布している。市野谷立野遺跡第37次調査で検出されたシシ穴の一部には、以前掘ったものの一角を壊すように掘っているものがみられた。このことから、シシ穴は常時開口していたのではなく、必要に応じて掘られ、それが済むとほどなく埋められていた可能性が推測される。

SD001・SD002・SD003（第35・36図、図版５・14）

47Ｘ、48Ｙ、49Ｙ、49Ｚ、50Ｚグリッドに位置する。南東から北西方向へ直線的に延びる溝で、現存長は143ｍである。いずれもトレンチによる部分的な調査であるため、詳細は不明だが、土手や盛り土は検出されなかった。３条平行に並び、一番東側の溝をSD001、中央の溝をSD002、西側の溝をSD003と


47X-65
(37)T13
(37)T3
SD002 SD001
(37)SK005
(37)T2
(37)T10
A´
(37)T1
(37)SK004
A
(37)SK002
SD003
SD002 SD001
(37)SK003
(37)SK001
(21)T6
B´
(21)SK001
(21)SK003
B
(21)T7
(21)SK002
(27)T5
SD002 SD001
(22)T6
(22)SK003
(22)SK004
(27)SD002・001
(27)T6
(22)T3
(22)SK002
(22)SK001
49Z-00
C´
C
49Y-55
(22)T2
D´
D
(31)SD001
50Z-00
E´
E
(31)SD002
A´ 18.40m
SD001
SD002
A
市野谷立野
(37)SK002・SD003
0 (1/80) 4m
0 (1/500) 25m
野馬土手・野馬堀
A・A´
1 表土
2 黒褐色土 ローム粒少
3 褐色土 ローム粒少
4 暗黄褐色土 ロームブロック多
5 暗褐色土 ロームブロック少
6 黒褐色土
7 黄褐色土 ローム粒 廃植土
8 暗褐色土 ローム粒多 廃植土
9 暗黄褐色土 ローム粒主体
10 黒褐色土 ローム微
11 暗黄褐色土 ローム少
12 暗褐色土 ローム微
13 暗黄褐色土 ローム少
14 暗褐色土 ローム微
15 黄褐色土 ローム主体 ロームブロック少
16 黒色土
17 暗黄褐色土 ローム少
18 褐色土 ローム多
19 黄褐色土 ローム主体

第35図　野馬堀①



第36図　野馬堀②

した。シシ穴はSD003内に掘り込まれている。47Y－66グリッド付近でのSD001の幅は2.05m、深さ112㎝、SD002の幅は2.40m、深さ192㎝、SD003の幅は3.50m、深さ152㎝である。48Y－00グリッド付近でのSD001の幅は1.78m、深さ113㎝、SD002の幅は2.50m、深さ182㎝、SD003は西端が調査区外にかかるため不明確だが幅4.30m以上である。SD002の底面は平坦で幅1.20mを有し、立ち上がりがシャープに作られている。SD001・SD003の立ち上がりは緩やかである。覆土は暗褐色土を主体とし、混入物の多寡によって分層される。南端に位置する第31次調査区のSD001から17世紀～18世紀代のカワラケ、肥前磁器、瀬戸・美濃陶器、18～19世紀前葉の灯火具、焙烙が出土している。また、破断面を研磨した５㎝前後の土製・陶製円板が14点出土しているが、用途は不明である。

参考資料　　江戸遺跡研究会編　2001『図説江戸考古学研究事典』

市野谷向山遺跡(21)SK001（第35図、図版４）

48Y－51グリッドに位置する。SD003の西側に掘り込まれている。1.90m×1.38mの長楕円形で、確認面からの深さは170㎝である。覆土は黒褐色土を主体とする。遺物は出土していない。

市野谷向山遺跡(21)SK002（第35図）

48Y－73・74グリッドに位置する。SD003内に掘り込まれ、遺構北端のみの検出で、規模は不明であ

る。

市野谷向山遺跡(21)SK003（第35図、図版４）

48Ｙ－41・42グリッドに位置する。SD003内に掘り込まれ、２基のシシ穴が切り合うと思われる。2.48m×2.08mの楕円形で、確認面からの深さは375㎝である。覆土は褐色土と暗褐色土を主体とし、白色粘土層がみられる。

市野谷向山遺跡(22)SK001（第35図、図版４）

49Ｙ－05・06グリッドに位置する。西端は調査区外のため未掘である。幅1.40mの長楕円形を呈すると思われ、１mほど掘り進んだところで危険回避のため調査を中止した。

市野谷向山遺跡(22)SK002（第35図、図版４）

49Ｙ－05グリッドに位置する。西端は調査区外のため未掘である。幅0.72mの長楕円形を呈すると思われ、１mほど掘り進んだところで危険回避のため調査を中止した。(22)SK001と(22)SK002は切り合っていないが、土層断面の観察により、(22)SK001はSD003の底面付近から、(22)SK002はSD003がある程度埋まってから掘り込まれていることが分かり、新旧関係が推測できる。

市野谷向山遺跡(22)SK003（第35図、図版４）

48Ｙ－94グリッドに位置する。SD002・SD003を掘り込んで作られている。トレンチ調査のため北側は未検出であり、南側を(22)SK004に切られる。長さ2.38mの楕円形を呈すると思われ、１mほど掘り進んだところで危険回避のため調査を中止した。

市野谷向山遺跡(22)SK004（第35図、図版４）

48Ｙ－94グリッドに位置する。SD002・SD003を掘り込んで作られている。2.28m×0.70mの長楕円形を呈し、１mほど掘り進んだところで危険回避のため調査を中止した。

市野谷立野遺跡(37)SK001（第35図、図版４）

48Ｘ－09グリッドに位置する。SD003を掘り込んで作られている。トレンチ調査のため南側は未検出である。遺構検出面での平面形は長さ2.30mの長楕円形、底面では0.79m×0.43mの長方形を呈する。確認面からの深さは333㎝を測る。

市野谷立野遺跡(37)SK002（第35図、図版４）

48Ｘ－08・09グリッドに位置する。SD003を掘り込んで作られている。平面形は1.42m×0.83mの長楕円形で、確認面からの深さは298㎝である。

市野谷立野遺跡(37)SK003（第35図、図版４）

48X－09・19グリッドに位置し、(37)SK001と切り合う。トレンチ調査のためごく一部のみの検出である。

市野谷立野遺跡(37)SK004（第35図、図版４）

47Ｘ－99・48Ｘ－09グリッドに位置する。SD003を掘り込んで作られている。トレンチ調査のため西端は未検出である。平面形は幅2.00mの楕円形を呈すると思われる。深さがあるため、プランのみの検出に留めた。

市野谷立野遺跡(37)SK005（第35図、図版４）

48Ｘ－04グリッドに位置する。トレンチ調査のためごく一部のみの検出である。深さは350㎝以上あり、安全のため途中で調査を中止した。覆土は暗褐色土と暗黄褐色土が主体である。

第３章　西初石五丁目遺跡

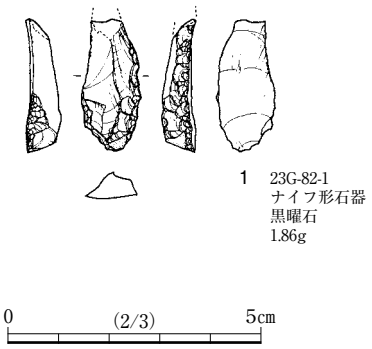
第１節　遺跡の概要（第38図）

今回報告するのは第23次・第24次調査であり、調査状況は第38図のとおりである。調査範囲は遺跡西側に位置する。本遺跡では、これまでの調査で旧石器時代の遺物集中地点や縄文時代の竪穴住居跡・土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡・土坑、近世の野馬土手や野馬堀、溝状遺構、シシ穴などが検出されている。これまでの成果は、上・下層の第１～第17次調査の成果は報告書第596集（2008年刊行）、下層の第18・第19次調査は報告書第706集（2013年刊行）、上層の第18～第20次調査と下層の第20次調査は報告書第735集（2015年刊行）、上・下層の第21・第22次調査は報告書第769集（2017年刊行）にて報告済みである。

今回の調査範囲では、第23次調査区で旧石器時代遺物集中地点１か所、第24次調査で縄文時代の竪穴住居跡１軒、第20次調査区から続く野馬堀２条が確認された。

第２節　旧石器時代（第37図、図版15・17）

第23次調査では、23G－82グリッド周辺の立川ローム層Ｖ層上面から石器が１点出土している。この付近は遺跡の南端に近く、南の谷津に臨む台地縁辺に位置する。標高は21ｍである。１は黒曜石製のナイフ形石器である。先端部を欠損する。縦長剥片を素材とし、右側縁に加工を施している。



第37図　旧石器時代出土石器

第３節　縄文時代

１．竪穴住居跡

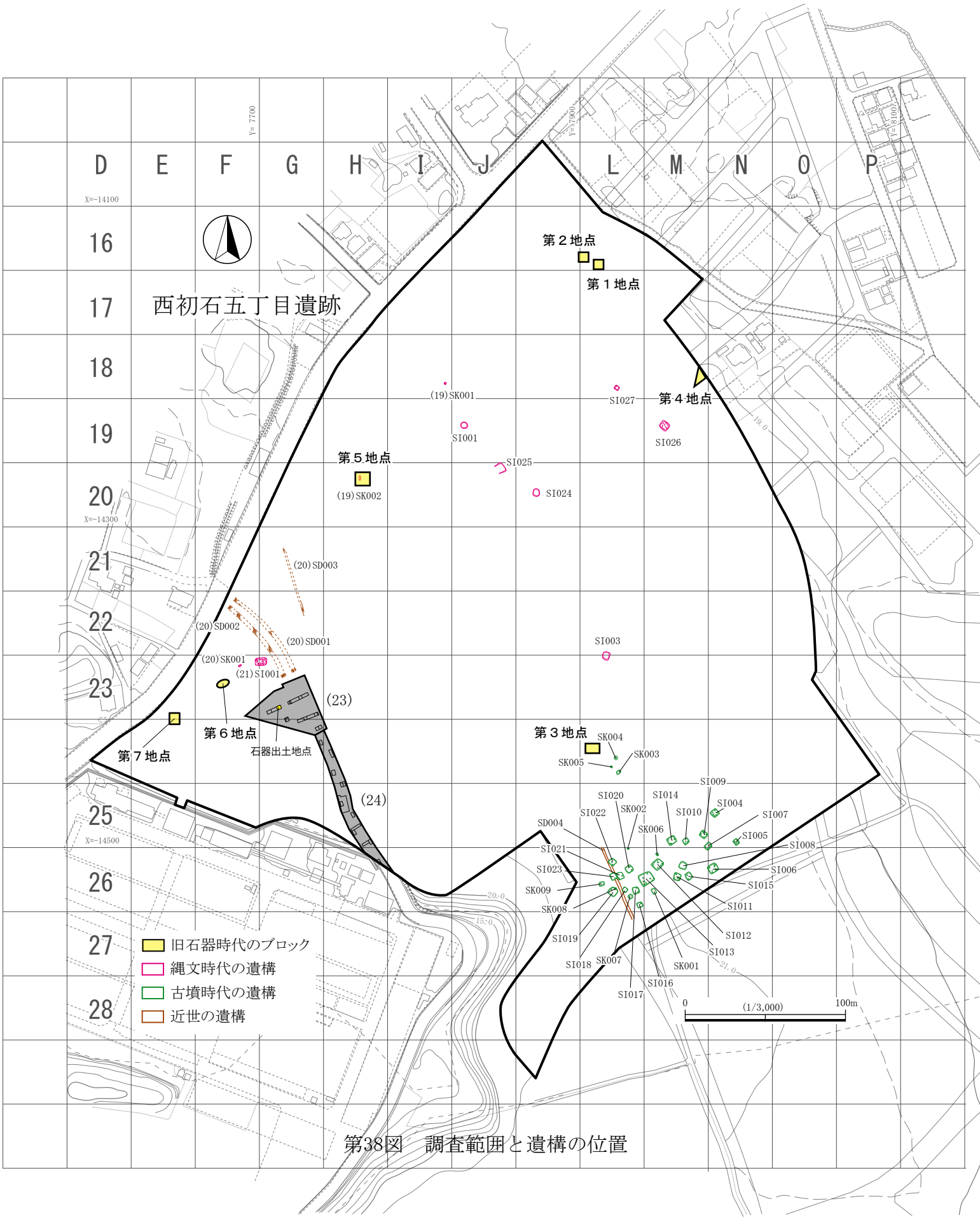
(24)SI001（第39図、図版15・16）

25Ｈ－22・32グリッドに位置する。東側と西側を近世の野馬堀に壊され、遺構の形状・規模は不明である。土器片集中地点と炉跡各１か所、ピット２基が検出されたことから住居跡と判断した。炉跡は確認トレンチの南側、土器集中地点はトレンチの北側にあり、土器集中地点周辺からは焼土も確認された。

出土遺物　小片ばかりで器形を復元できるものはなく、９点を図示した。１は単節LRが施文された口縁部片、２・３は縄文を地文に沈線で文様が描出される。２は無節Ｌ、３はLRである。４～８は貝殻背圧痕文がみられる。６は補修孔を有する。９は復元径8.0㎝の底部で、LRが施されている。いずれも前期黒浜式に帰属するものと思われる。

２．遺構外出土縄文土器（第40～42図、図版16・17）

前期黒浜式と中期加曽利Ｅ式を主体とする。１～４は半截竹管による平行沈線と刺突文を組み合わせた文様で、関山式であろう。５～91は黒浜式である。５は横位に平行する押引き文が多段に配され、口唇部に刺突文が施される。６～９は沈線、刺突文、押引き文が単独あるいは組み合わされて文様が描出される。10～14はそれに地文として縄文が施されている。７は菱形文、11・12は鋸歯状の文様と思われる。15



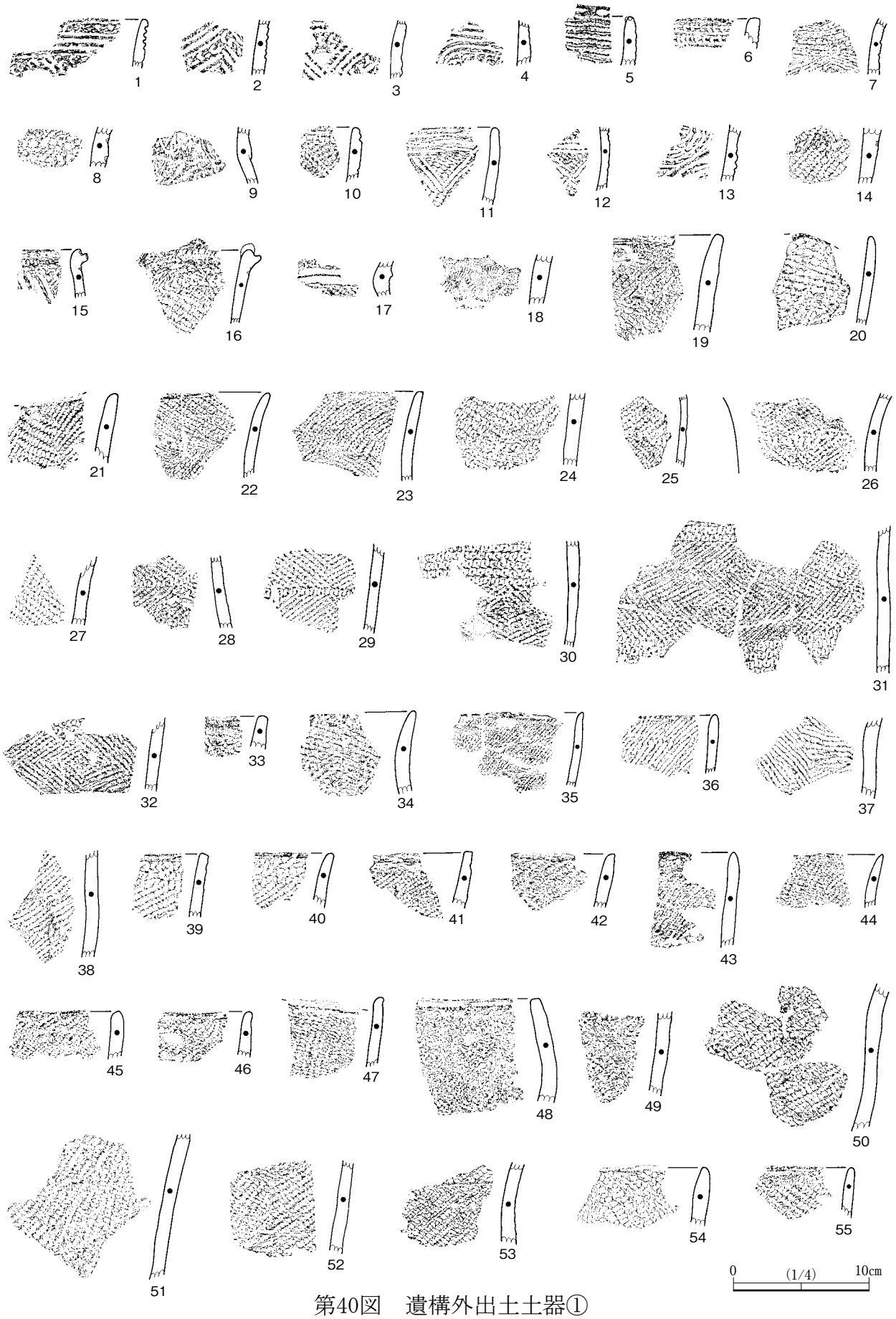
第38図　調査範囲と遺構の位置

第39図　(24)SI001

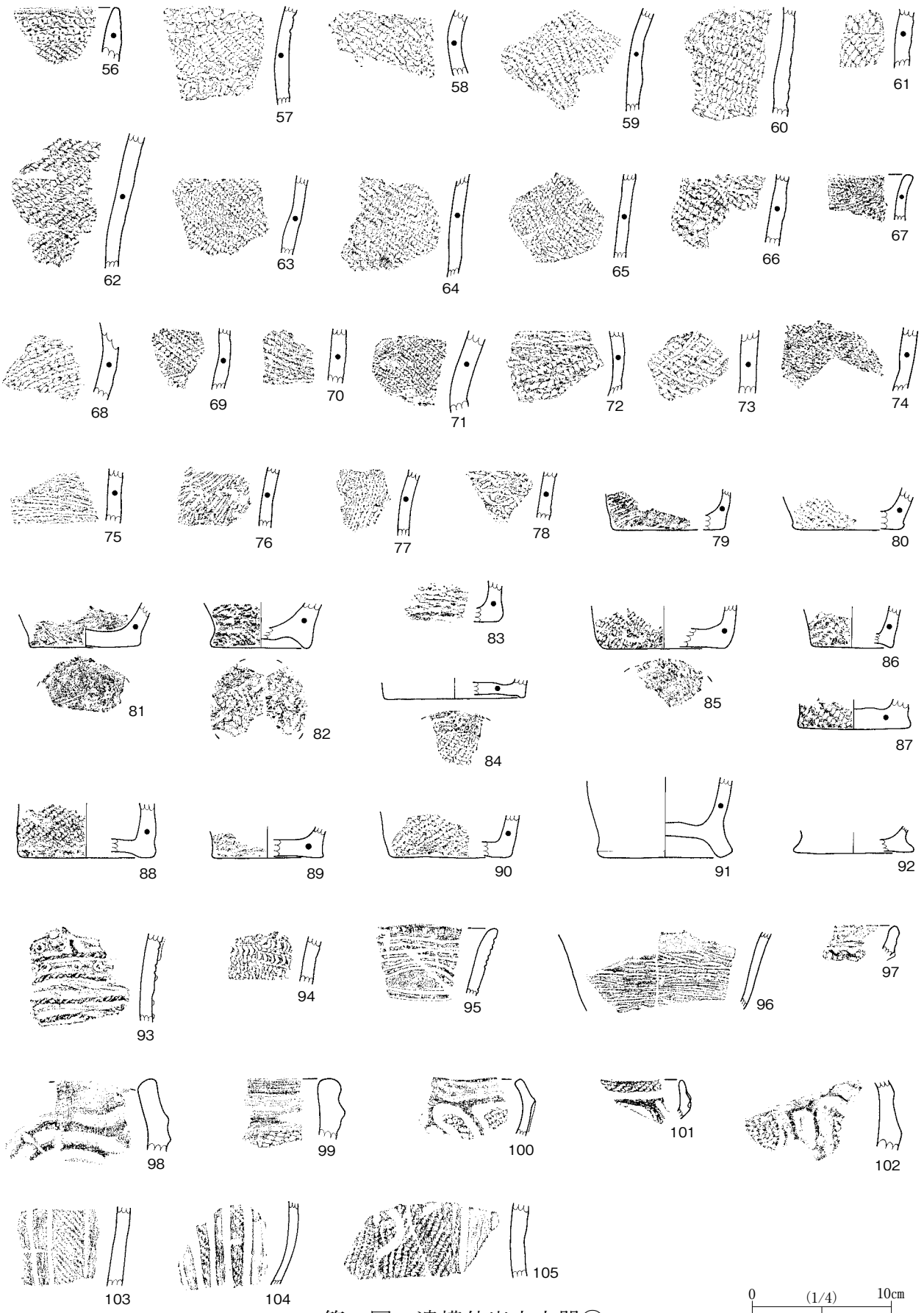
～17は鍔状隆起線が廻る。15は鍔状隆起線の端部に刻みが施され、上下に刺突文を伴う。16は双頭の波状口縁で、鍔状隆起線直下に刺突文が廻る。18は貝殻背圧痕文で、殻頂部付近の圧痕がみられる。19～34は縄文が羽状もしくは菱形構成をとる。19・34は無節ＬとＲ、20はRLとＬ、21・24～27・29はRLとLRの羽状で25・26・29には末端環付がみられる。22・23は附加条第１種（軸縄LRにＲを２本、軸縄RLにＬを２本附加）による。28・30～32はLRとRLが菱形構成をとり、多段のループ文がみられるものである。33はループ文が施された口縁部片である。35～66は単一の原体による縄文が施されたもので、35～38は無節Ｌ、39～53はLR、54～66はRLでループ文のみられるものもある。67・75・76は撚糸文L、68～72は附加条縄文、73・74は網目状撚糸文である。77は撚糸文Ｒの結束部分、78は結節文か。79～92は底部である。82・91は高台風、86・88は上げ底を呈する。92は底部が突出する特異なかたちで、浮島式であろうか。

93・94は諸磯式である。93は刻みを伴った浮線文で文様が描出、円形刺突文が付されている。94は沈線と爪形文による文様で、RLを地文とする。95～97は浮島式と思われる。96は櫛歯状工具による条線もしくは半截竹管による条線が施され、のち横位に連続する短沈線を胴部に施している。97は輪積み痕上に凹凸文がみられる。

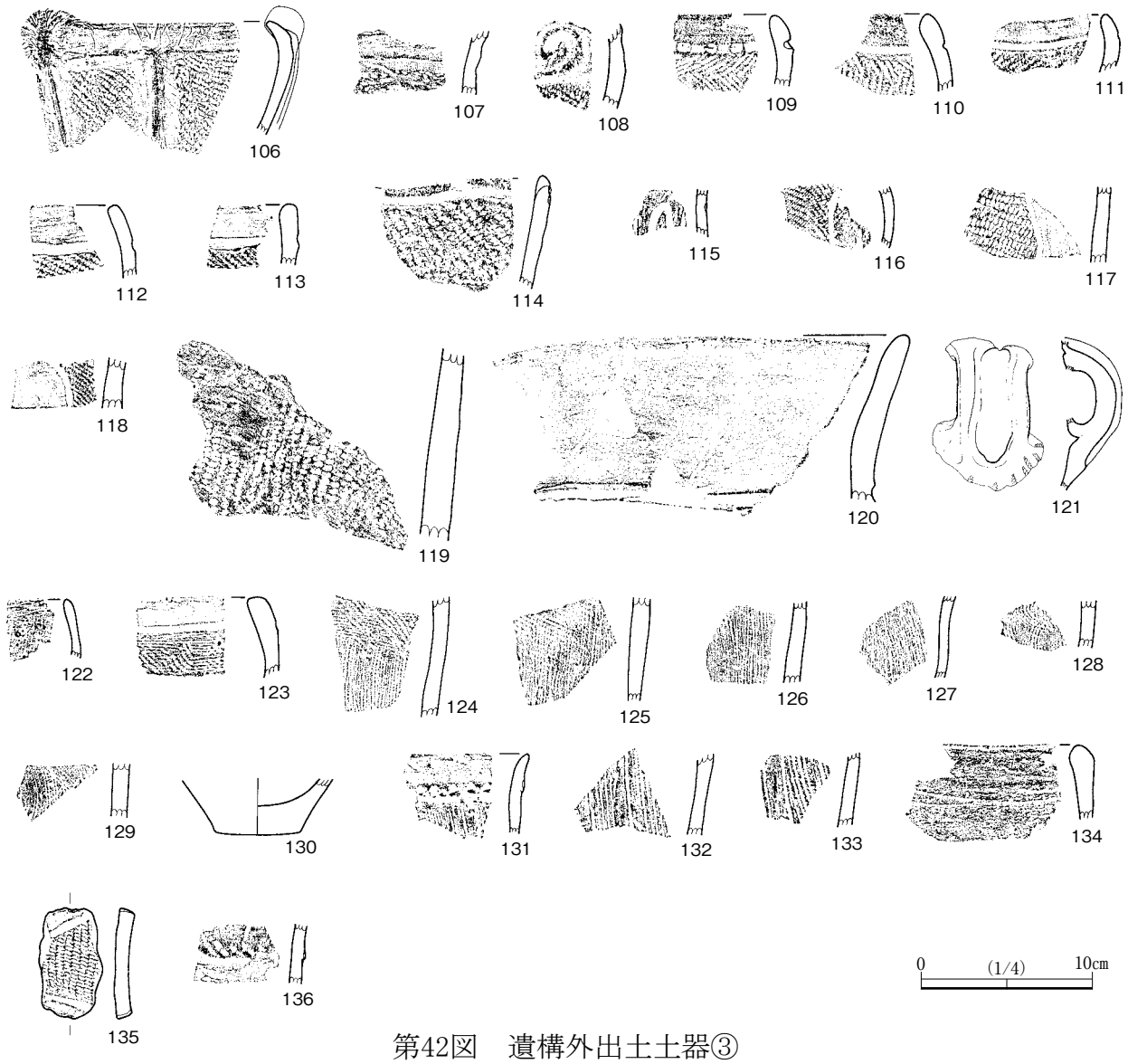
98～130は中期加曽利Ｅ式である。98～101は隆帯と沈線による区画、102は隆起線と沈線状のナゾリ、103～105は磨消懸垂文が施される。これらは加曽利ＥⅢ式であろう。106は隆起線によって口縁部無文帯が区画される。区画線からさらに隆起線が垂下する。隆起線の両側のナゾリは縄文部に及ぶ。垂下する隆起線の延長上に突起を有し、波状を成す。107は隆起線による横位連繋弧線文の可能性がある。108は隆



第40図　遺構外出土土器①



第41図　遺構外出土土器②



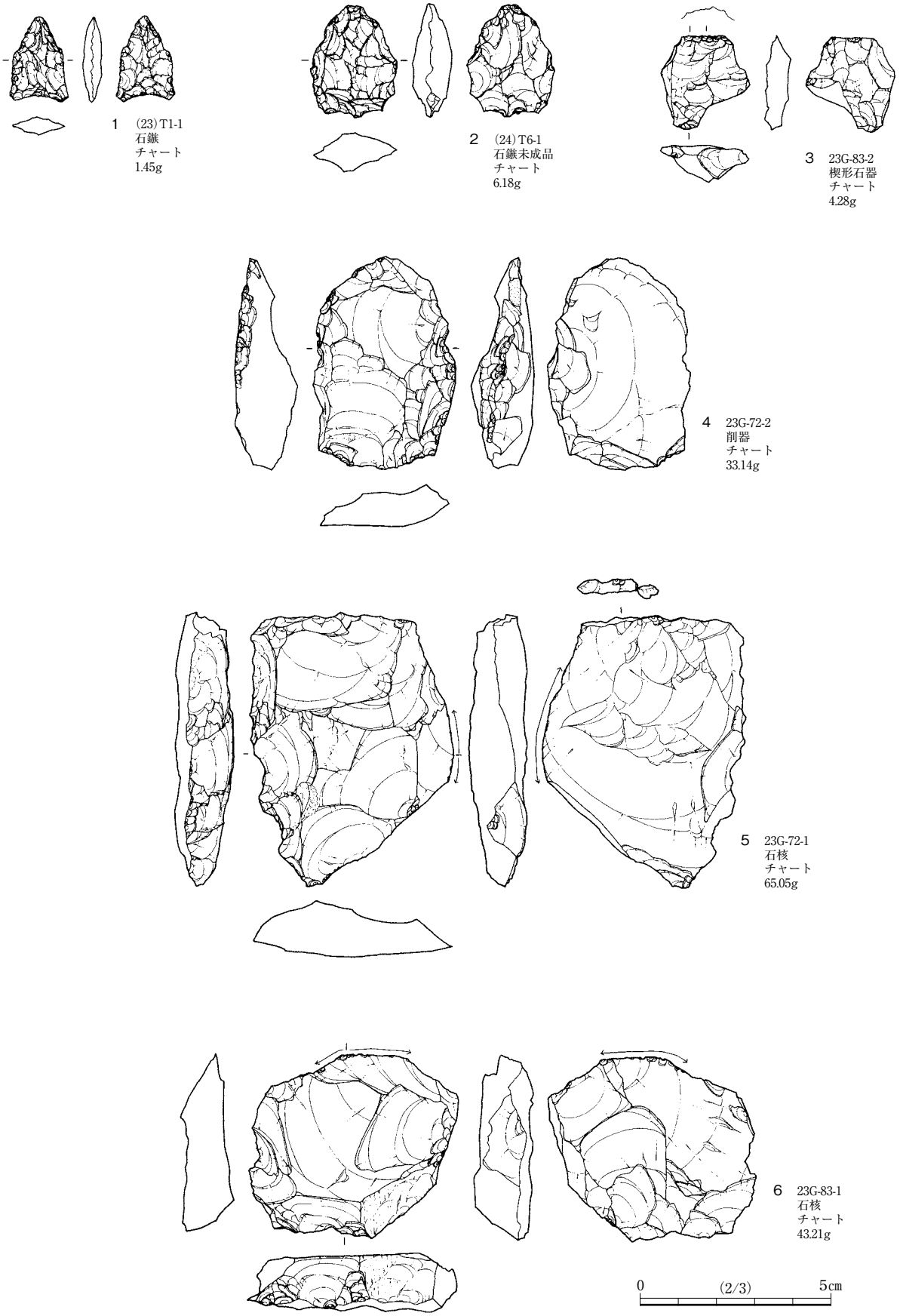
第42図　遺構外出土土器③

起線による渦巻き文がみられる。109～114は口縁部を沈線で区画するもので、109は沈線上に刺突文が施されている。115～118は沈線による懸垂文や逆U字状の区画がみられるものである。119は縄文LRのみが施される胴部片である。120は壺型土器で口縁部は沈線で区画される。121は橋状把手である。把手中央が凹み、下端の把手接合部分にLRが施される。123～129は櫛歯状工具による条線が施されるもので、123～125は更に無節Rがその上から施される。130は径5.0㎝の底部である。

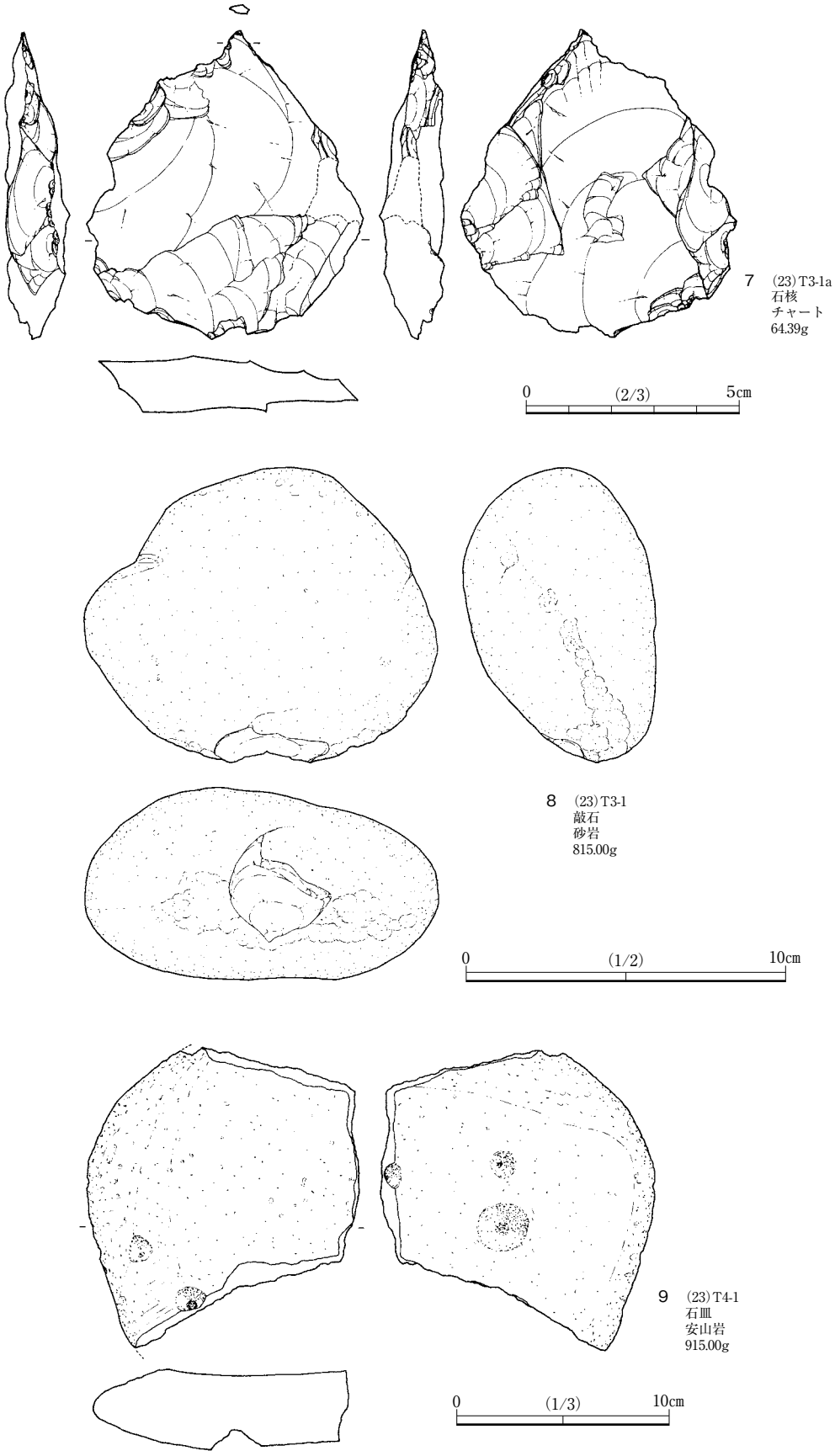
131～133は後期堀之内式と思われる。沈線による懸垂区画と櫛歯状工具による条線が施される。134は粗製土器の口縁部片である。晩期に属するものであろう。

135は土器片錘である。加曽利E式期の深鉢の胴部片を打ち欠いて作られ、紐かけははっきりとしている。長さ65㎜、幅36㎜、厚さ９㎜である。

136は弥生時代の甕の胴部片である。輪積み痕の上に押捺痕を有する。



第43図　遺構外出土石器①



第44図　遺構外出土石器②

３．遺構外出土石器（第43・44図、図版17）

石器類は30点出土し、９点を図示した。１～７はチャートを石材とする。１はいわゆる飛行機鏃で、両面に細かな加工が施される。２は石鏃未成品、３は楔形石器、４は削器、５～７は石核である。４・５・７は剥片を素材とする。８はやや厚みのある円礫を素材とする敲石で、石材は砂岩である。９は安山岩製の石皿の破片である。裏面に深さ１㎝程の凹みを有する。

第４節　近世

既報告では、野馬土手は上部が削平され、下部のみが地中に残された状態で、野馬土手を挟んで東側をSD001、西側をSD002としている。野馬土手とは、牧内の馬が隣接する田畑を荒らすのを防ぐとともに、野犬などの害獣の侵入を阻む目的で牧を囲むように作られた土手ととらえてよく、馬土手・野馬除土手・馬土堤・野馬土手・野馬除堤などと呼ばれることもある。牧は古代の律令制のもとに設けられたとされるが、現在確認されているのは江戸幕府によって経営されていた牧の遺構である。西初石五丁目遺跡で確認された牧は、慶長年間（1596～1615年）に整備された下総の小金五牧のうち上野牧に属し、「御林領主林請地林」として区画されている（「小金上野高田台両御牧大凡図」流山市史　近世資料編Ⅱ　262～263頁）。明治２年に牧が廃止された後もその名残はあり、明治13年の迅速測図（千葉県下下総国東葛飾郡下花輪村乃近傍村落　明治前期測量２万分の１　フランス式彩色地図）をみると、本調査区周辺は「草地」として記録されている。

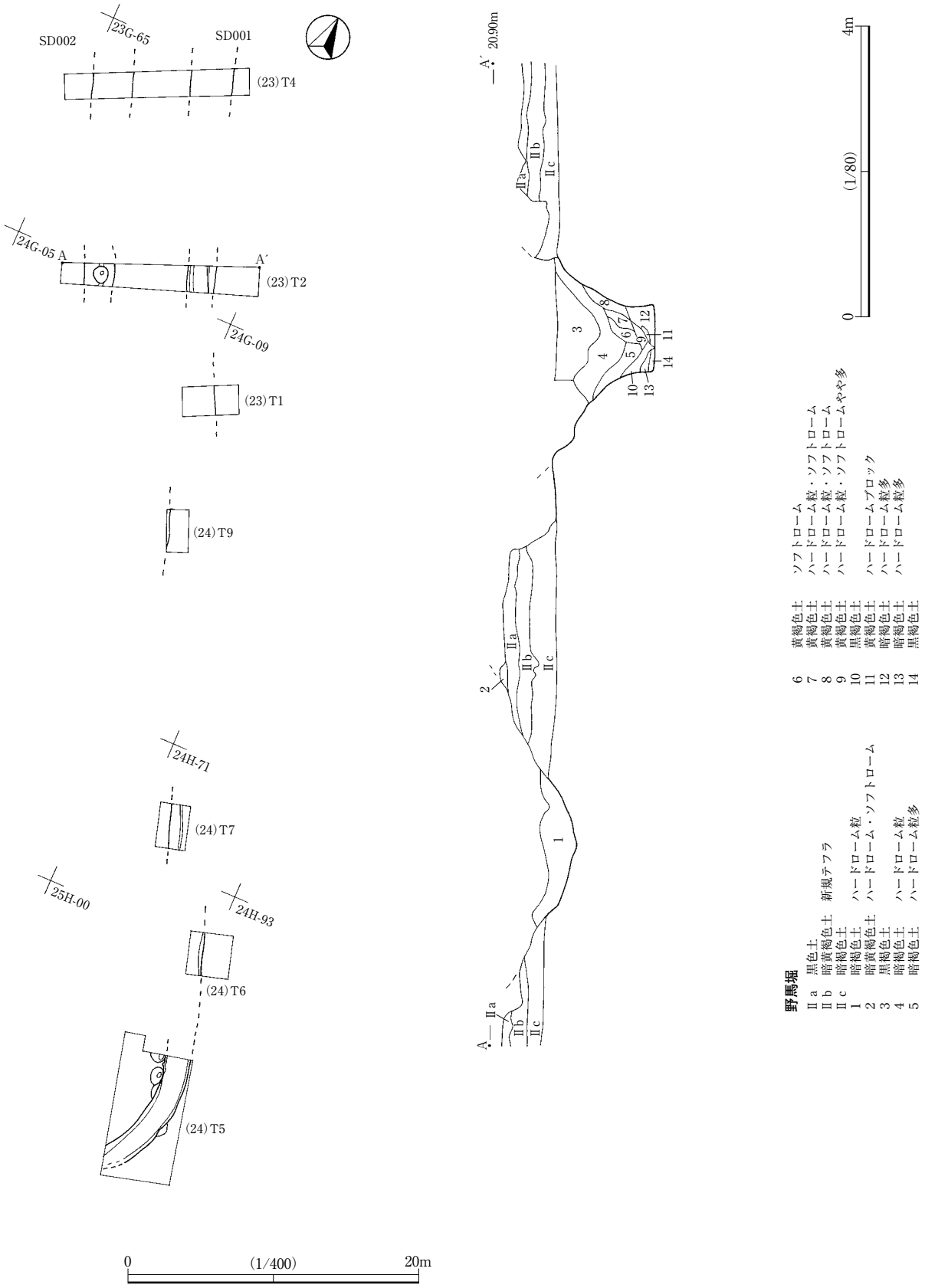
SD001・002（第45図、図版15）

先に報告された(20)SD001・002から続く野馬堀で、23G－85グリッドから南南東へ延び、25H－23グリッド付近で西へ向きを変えている。現存部分で76ｍほどである。本調査区でも野馬土手は残っておらず、野馬堀のみの検出となった。第23次調査では、幅２ｍのトレンチを野馬堀に直交するように設定し、遺構の規模や形状、土層の状態を観察する、という方法をとった。第24次調査区は既存道路と重なっており、填圧により堅く締まっていた。そのため、一部のみ掘り下げ調査を終了した。(23)Ｔ２の土層断面によると、SD001の断面形はＹ字状で、検出面での幅は2.80ｍ、底面での幅は0.90ｍ、検出面からの深さは140㎝である。覆土はハードロームを含む暗褐色土と黄褐色土を主体とする。

前回の報告と合わせ、これまでの調査で分かったことは、当遺跡の野馬土手は二重土手（にじゅうどて、あるいはふたえどて）と呼ばれるもので、大土手と、これを挟む堀２条が検出されている。掘り上げた土で牧側に小土手、村側に大土手を築き境界を成したものであるが、牧側の土手は現在道路となっており残存していない。北西に沿う(20)SD001には宝永の火山灰などの自然な土層の堆積状態が保たれていた。両堀には合計３基のシシ穴（犬落し穴を含む）が確認され、人為的に埋め戻された穴と自然堆積で埋まった穴とがある。

野馬土手で検出された遺物は、村側の堀である(20)SD002から古銭２枚、陶器１片が出土した。銭貨は寛永通寶－古寛永－と紹聖元寶である。なお、今回の調査では遺構に伴う遺物は出土していない。

野馬土手の北側には道路が走っており、この道が敷設された当時から野馬土手の起伏を避けて、あるいは沿うように人々の往来があったものと推測する。これまでの調査では野馬堀の一部である150ｍほどが検出できたに過ぎないが、遺跡範囲外へと続いていることは明らかである。


SD002
23G-65
SD001
(23)T4
24G-05 A
A′
(23)T2
24G-09
(23)T1
(24)T9
24H-71
(24)T7
25H-00
24H-93
(24)T6
(24)T5
0
(1/400)
20m
A′ 20.90m
A
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
0
(1/80)
4m
野馬堀
Ⅱa 黒色土
Ⅱb 暗黄褐色土 新規テフラ
Ⅱc 暗褐色土
1 暗褐色土 ハードローム粒
2 暗黄褐色土 ハードローム・ソフトローム
3 黒褐色土
4 暗褐色土 ハードローム粒
5 暗褐色土 ハードローム粒多
6 黄褐色土 ソフトローム
7 黄褐色土 ハードローム粒・ソフトローム
8 黄褐色土 ハードローム粒・ソフトローム
9 黄褐色土 ハードローム粒・ソフトローム やや多
10 黒褐色土
11 黄褐色土 ハードローム ブロック
12 暗褐色土 ハードローム粒多
13 暗褐色土 ハードローム粒多
14 黒褐色土

第45図　野馬土手

第４章　野馬土手

第１節　市野谷駒木野馬土手（第46図）

市野谷駒木野馬土手については『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書９－流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、流山市駒木野馬土手－』において報告済であるが、一部追加があったため、今回報告する。

平成23年度に調査された市野谷駒木野馬土手(2)は、遺跡北東端の32TT－30グリッドから34RR－40グリッドに位置し、台地縁辺に沿って緩やかなカーブを描く。調査範囲は流山市と柏市にまたがっており、柏市に所在する部分は報告済である。流山市に所在する部分の調査対象面積は223㎡で、そのうち28㎡について確認調査を行った。既存の道路に沿って幅3.0m、高さ0.6m程の高まりがみられ、高まりに直交するようにトレンチを設定して土層の体積状況を確認した。詳細は『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書９』で報告済であるが、柏市分も含め、今回調査した範囲から野馬土手の痕跡は確認されなかった。

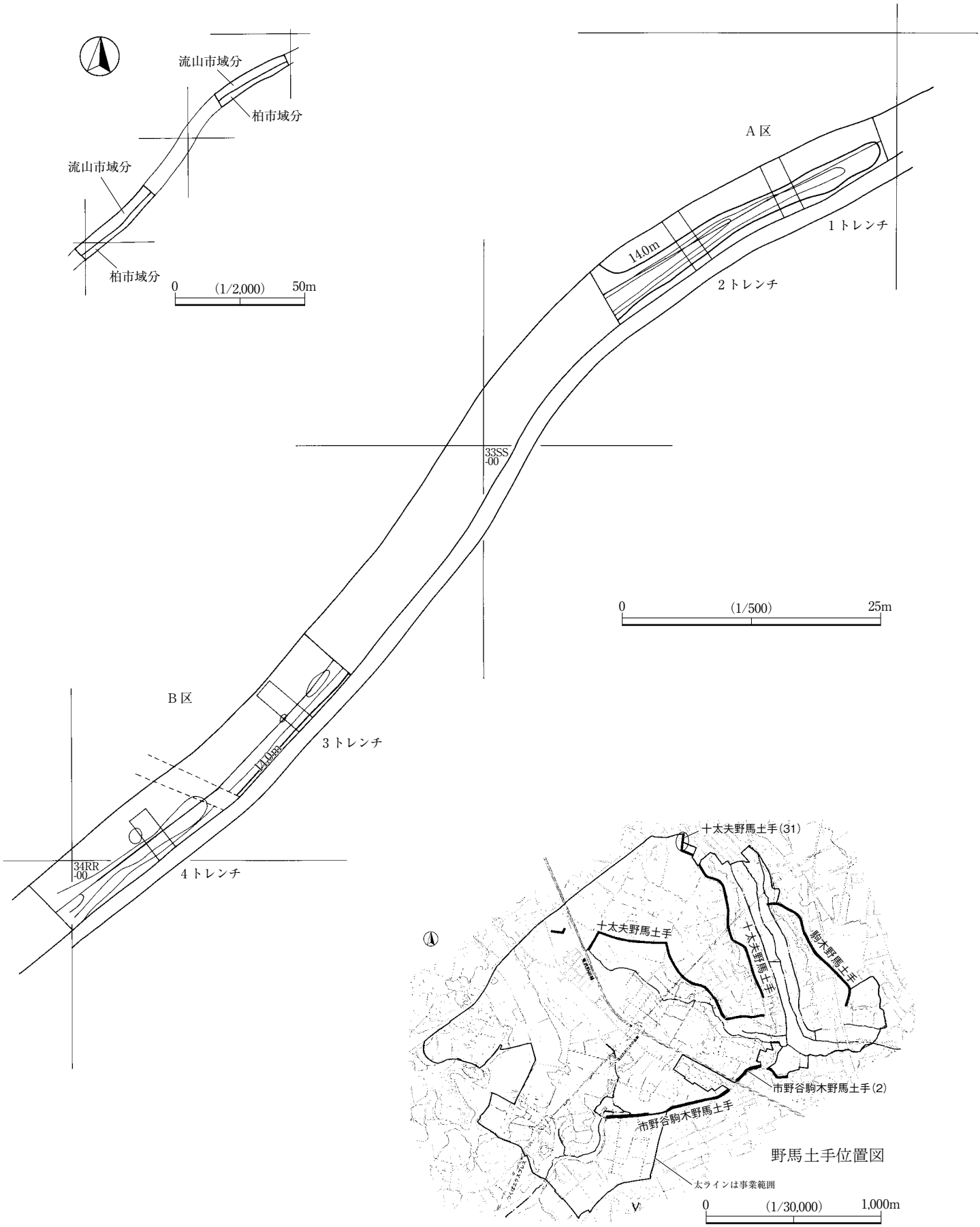
第２節　十太夫野馬土手（第47図、図版18）

今回報告する十太夫野馬土手第31次調査区は、新市街地地区の最北部に位置する。－1HH－28グリッドから南へ直進し、0II－60グリッド付近で東へ90°向きを変え、旧道路に沿って台地の平坦部と低地を分けるように延びていた。

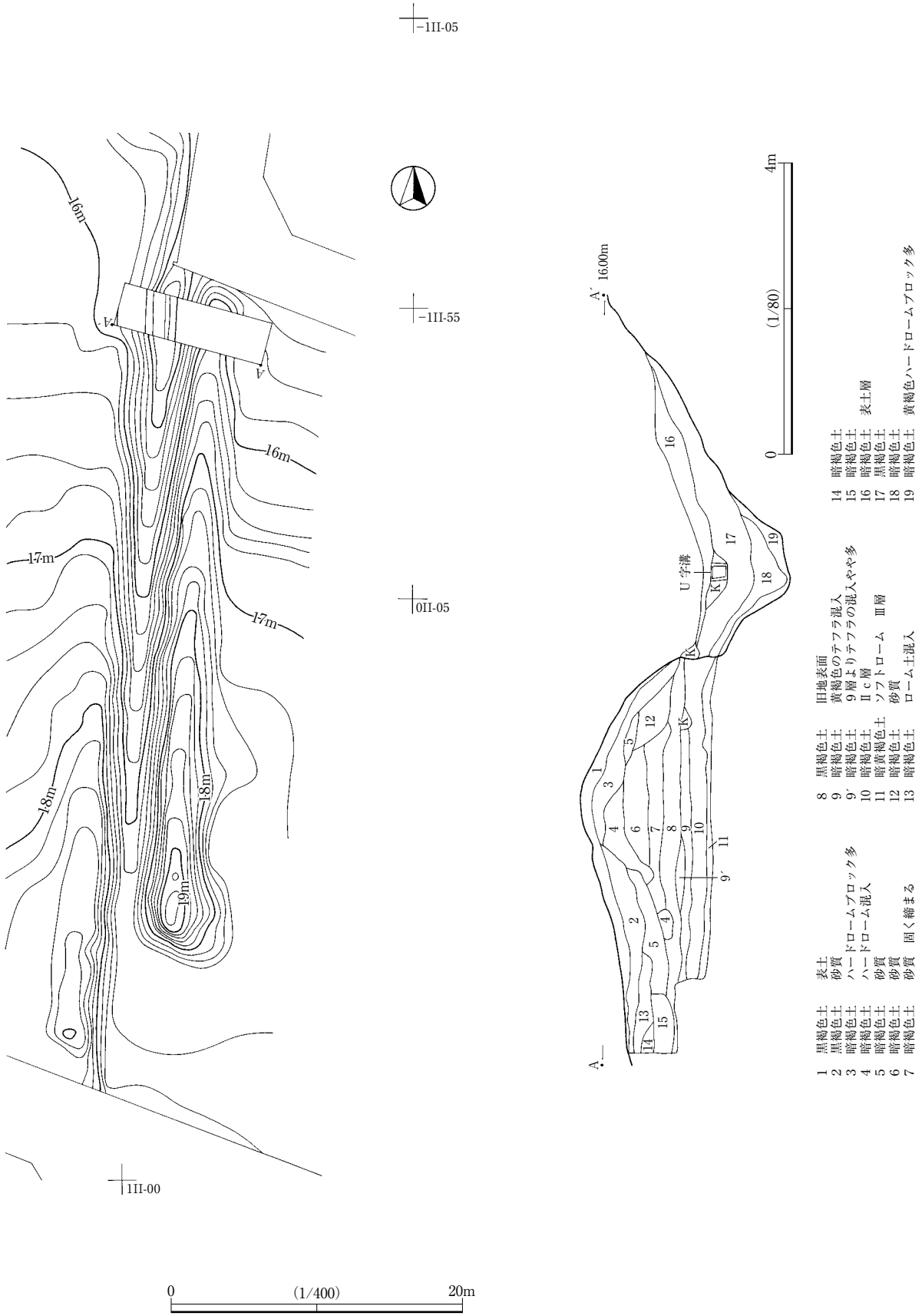
今回の調査区は、敷地境となっていたため遺存状態がよく、二重土手の間に堀のある様子が地形図からも窺える。標高の最も高い地点は0II－50グリッド付近で19.30m、低い地点は－1II－18グリッド付近で14.53mであった。野馬土手と堀の比高は平均で２mほどあり、西側地表面から土手を見てみると、高低差と幅を実感できる。調査区北側で野馬土手・野馬堀に直交するようにトレンチを設定して調査を行ったところ、西側の野馬土手断面は堀から鋭角にせり上がる形状であることが分かった。

参考文献

1　松戸市立博物館　1994 『牧と馬　かつて松戸は牧場「まきば」だった』 松戸市立博物館
2　青木更吉　2001 『野馬土手は泣いている　小金牧』 崙書房出版
3　流山市立博物館　2001 『流山市史　通史編１』 流山市教育委員会
4　青木更吉　2003 『小金牧を歩く』 崙書房出版
5　（財）千葉県教育振興財団　2006 『県内遺跡詳細分布調査報告書　房総の近世牧跡』 千葉県教育委員会
6　鎌ヶ谷市郷土資料館　2008 『野馬のいた風景－野馬土手、捕込が語る江戸時代の鎌ケ谷－』 鎌ヶ谷市郷土資料館
7　池田大助　2017 『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告９』（公財）千葉県教育振興財団



第46図　市野谷駒木野馬土手



第47図　十太夫野馬土手

第５章　まとめ

新市街地地区遺跡群の概要

流山新市街地地区遺跡群は、市のほぼ中央に位置し、江戸川の支流坂川の源流域と、手賀沼に注ぐ大堀川の源流域に展開する14遺跡・３野馬土手から構成される。このうち、坂川の源流域の遺跡群をみてみると、西初石五丁目遺跡をはじめ、市野谷宮尻遺跡、市野谷入台遺跡、市野谷芋久保遺跡、市野谷中島遺跡、市野谷二反田遺跡、市野谷向山遺跡、市野谷立野遺跡、大久保遺跡の９遺跡が所在しており、これらを時代順に概述する。

１．旧石器時代

旧石器時代は、遺物量の多寡はあるものの、９遺跡全てから石器が出土している。９遺跡全体では165か所の石器集中地点が検出され、湧水地に近い市野谷入台遺跡で26か所、大久保遺跡で44か所、市野谷芋久保遺跡で46か所、市野谷向山遺跡で25か所と特に多くなっている。もっとも古い時期はⅩ層上部～Ⅸｃ層下部に生活面をもつ市野谷芋久保遺跡の第１文化層で、ナイフ形石器や台形様石器、局部磨製石斧などが出土している。次いで大久保遺跡の第１文化層（Ⅸ層下部）、市野谷向山遺跡の第１文化層（Ⅸ層上部）があり、Ⅴ層～Ⅳ層の時期にピークを迎え、多数の礫群と角錐状石器・ナイフ形石器を伴う石器群が出土している。この時期は最寒冷期で、海面が低下し、谷が最も深く刻まれた時期とされており、河川によって浸食され露出した遺跡近在の段丘礫層の礫を用いて礫群が形成されたことが推察される。

２．縄文時代

主体となる時期は、前期黒浜式期と中期加曽利Ｅ式期、後期堀之内式期である。黒浜式期の竪穴住居跡を検出数が多い順に挙げると、市野谷向山遺跡で13軒、市野谷立野遺跡で12軒、西初石五丁目遺跡で７軒、市野谷芋久保遺跡で６軒、市野谷宮尻遺跡で１軒である。市野谷中島遺跡からは埋甕炉１基、市野谷向山遺跡の住居跡２軒からは遺構内貝層も検出されている。いずれの遺跡も土器の文様は縄文主体で、格子目状沈線や結節沈線文の土器を少量含み、時期差はさほど感じられない。

中期加曽利Ｅ式期の集落は、竪穴住居跡４軒と土坑群が市野谷向山遺跡から、同時期の埋甕炉が市野谷宮尻遺跡と市野谷入台遺跡から検出されている。市野谷向山遺跡では石器製作址と推定される多数の石器・剥片が加曽利ＥⅣ式の土器埋設炉とその周辺から出土している。土器について、文様を描出する要素は、沈線・隆起線共にみられるが、口縁部文様帯を作出する横一次区画文に胴部文様が付着するなど後出的な要素をもつ土器が多い。

後期堀之内式期の集落跡は市野谷二反田遺跡で13軒検出されている。市野谷入台遺跡、大久保遺跡からも同時期の遺構が検出されている。大久保遺跡では後期の土器と貝殻を伴った土坑も検出されている。後期は気候が寒冷化し、海水面が下がる海退期にあたる。この３遺跡は他の遺跡に比べ低位段丘面に立地しており、環境的な要因からこの時期に集落が営まれたと考えられる。

他地域との交流を窺わせる遺物として、大久保遺跡から出土した有撮石器（押出型ポイント）や市野谷向山遺跡から出土した三角壔（とう）形土製品が挙げられる。有撮石器は東北地方、三角壔形土製品は北陸・中部

高地を中心に出土している。

縄文時代晩期から弥生時代にかけて、流山市周辺では遺跡数が減少するが、坂川源流域においても同様の傾向がみられる。

３．古墳時代

古墳時代前期になると、新市街地地区遺跡群の北西に位置する西初石五丁目遺跡、市野谷宮尻遺跡、市野谷入台遺跡で大規模な集落が展開する。市野谷宮尻遺跡で90軒、西初石五丁目遺跡で22軒の竪穴住居跡が確認され、市野谷宮尻遺跡では東海・北陸との交流を示す土器が、西初石五丁目遺跡では小形仿製鏡が出土している。市野谷入台遺跡では前期～中期にかけての竪穴住居跡が35軒と、石製模造品の工房跡が存在する。この３遺跡で台地上の集落の全体像を窺うことができ、江戸川側の台地西側から集落が形成され、徐々に東側に広がり、最終的には東側に拠点を移し、その後台地上から姿を消すようになる。集落開始の契機は、他地域からの移植集団による新たな開発があったものと思われる。坂川を挟んで対岸の市野谷向山遺跡で８軒の竪穴住居跡が検出されたのを最後に、古墳時代の集落は姿を消す。

４．奈良時代以降

奈良時代の竪穴住居跡は、市野谷入台遺跡で４軒、市野谷中島遺跡で３軒、大久保遺跡で１軒確認された。出土した遺物から想起される年代は、いずれも８世紀中葉と思われる。

平安時代は市野谷向山遺跡で２軒、市野谷中島遺跡で１軒と非常に少ない。この時期、集落の主体は江戸川河岸の加地区遺跡群にあり、坂川源流域は単発的な竪穴住居跡がみられるのみとなる。

中世の遺構としては、市野谷入台遺跡で竪穴建物８基、土坑１基、溝状遺構３条が検出された。13世紀後半代の常滑産の甕などが出土しており、遺構もその時期と推定される。

大堀川源流域の遺跡群としては、東初石六丁目第Ⅰ遺跡、東初石六丁目第Ⅱ遺跡、十太夫第Ⅰ遺跡、十太夫第Ⅱ遺跡、十太夫第Ⅲ遺跡の５遺跡が事業地内に所在する。旧石器時代の石器集中地点は９か所、縄文時代の遺構は十太夫第Ⅲ遺跡から加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡１軒、土坑や陥穴が数基と、坂川の源流域に比べ、遺構・遺物数は少ない。

近世、この一帯は江戸幕府直轄の小金牧が置かれた。新市街地地区の遺跡群は、五牧からなる小金牧のうち「上野牧（かみのまき）」「高田台牧（たかだだいまき）」とされる区域に所在し、旧水戸街道から日光街道東往還に沿って広がる。上野牧は現在の東武鉄道柏駅～江戸川台駅の周辺、高田台牧は柏市の西半分、国道16号線より西側、柏の葉キャンパス駅を中心とする。牧は樹枝状の台地上で複雑に入り組むが、柏市と流山市の市境とされる大堀川により、十余二付近から駒木を経て呼塚付近まで、川とその周辺の湿地帯により牧が分けられる。日光東往還に隣接する大久保遺跡や市野谷立野遺跡、上野牧の南西境界に位置する市野谷芋久保遺跡から牧に関連する野馬土手や野馬堀、シシ穴状遺構などが検出されている。新市街地地区の北東には駒木野馬土手、北側には十太夫野馬土手、大久保遺跡と市野谷立野遺跡の境界から東へ延びる市野谷駒木野馬土手が所在し、複数年度に渡って調査が行われている。これらの調査結果については、『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告９』にまとめられている。

以上、本報告をもって、新市街地地区遺跡群の調査は終了となる。簡略ではあるが、調査の成果を以下にまとめた。文献については第１章を参考にして頂きたい。

調査成果一覧

遺跡名	旧石器時代	縄文時代	古墳時代	奈良・平安時代	中世以降
市野谷宮尻遺跡		竪穴住居跡 2軒 陥穴 2基	竪穴住居跡 90軒 土坑 3基		
西初石五丁目遺跡	石器集中地点 6か所 礫群 1か所	竪穴住居跡 8軒 陥穴 1基 土坑 3基	竪穴住居跡 20軒 土坑 8基		野馬土手・堀 2条 溝状遺構 1条 シシ穴 3基
市野谷入台遺跡	石器集中地点 26か所 礫群 1か所	竪穴住居跡 1軒 陥穴 5基 土坑 10基 炉跡 1基	竪穴住居跡 35軒 土坑 16基	竪穴住居跡 4軒	竪穴建物 8棟 土坑 4基 溝状遺構 3条
市野谷二反田遺跡	石器集中地点 12か所 礫群 5か所	竪穴住居跡 13軒 陥穴 3基 土坑 10基 石器集中地点 4か所			
市野谷芋久保遺跡	石器集中地点 46か所 礫群 16か所	竪穴住居跡 6軒 陥穴 25基 土坑 35基 焼土遺構 1基			溝状遺構 3条 野馬土手・堀 2条 シシ穴 9基 火葬墓 1基 土坑 6基
市野谷中島遺跡	石器集中地点 1か所	埋甕炉 1基 土坑 2基		竪穴住居跡 4軒 土坑 1基	溝状遺構 12条
市野谷向山遺跡	石器集中地点 25か所 礫群 12か所	竪穴住居跡 17軒 土器埋設炉 1基 炉跡 2基 陥穴 1基 袋状土坑 3基 土坑 29基	竪穴住居跡 9軒 土坑 7基	竪穴住居跡 2軒 土坑 5基	焼土遺構 1基 溝状遺構 1条 野馬堀 3条 シシ穴 7基
市野谷立野遺跡	石器集中地点 5か所	竪穴住居跡 12軒 焼土遺構・炉穴 12基 陥穴 14基 土坑 27基 溝状遺構 1条 礫群 8か所			野馬堀 2条 シシ穴 10基
大久保遺跡	石器集中地点 44か所 礫群 39か所	竪穴住居跡 3軒 炉跡・焼土遺構 3基 貯蔵穴 1基 陥穴 15基 土坑 9基		竪穴住居跡 1軒	井戸 1基 野馬土手 1条 野馬堀 3条
東初石六丁目第Ⅰ遺跡	石器集中地点 3か所	陥穴 1基			溝状遺構 1条
東初石六丁目第Ⅱ遺跡	石器集中地点 5か所 礫群 4か所	陥穴 1基 土坑 2基			
十太夫第Ⅰ遺跡		陥穴 1基 土坑 1基			溝状遺構 4条
十太夫第Ⅱ遺跡	石器集中地点 1か所 礫群 1か所				
十太夫第Ⅲ遺跡		竪穴住居跡 1軒 土坑 5基 礫集中 1基			溝状遺構 2条

写 真 図 版

図版1

遺跡周辺航空写真（昭和22年撮影）

市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡

市野谷向山(25)№2グリッド

市野谷向山(25)№2グリッドセクション

市野谷向山(29)旧石器ブロック

市野谷向山(30)標準土層

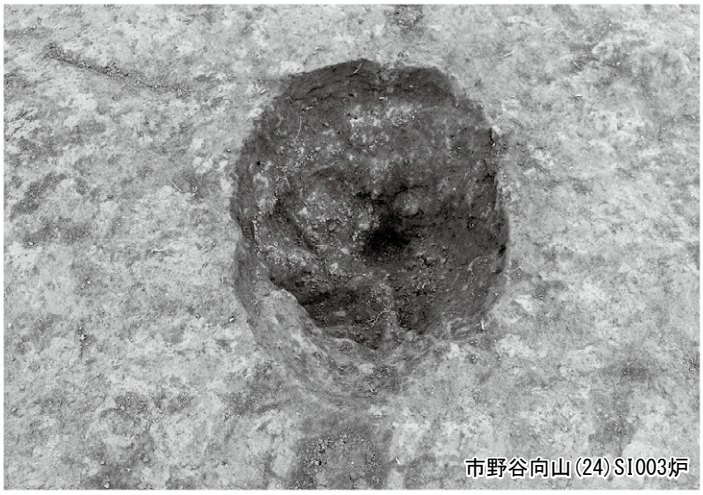
市野谷向山(24)SI001

市野谷向山(24)SI002

市野谷向山(24)SI002炉

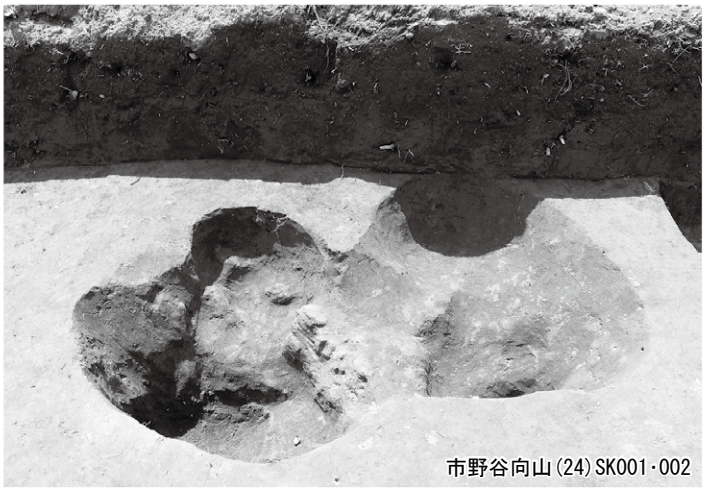
市野谷向山(24)SI002-P5遺物出土状況

市野谷向山(24)SI003

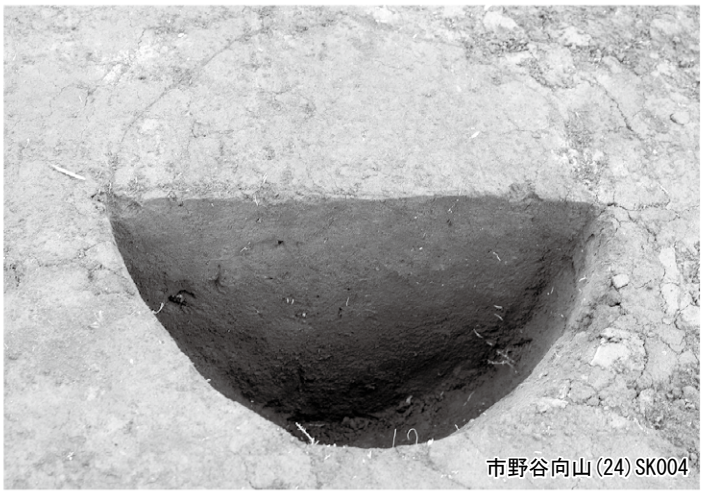

市野谷向山(24)SI003炉

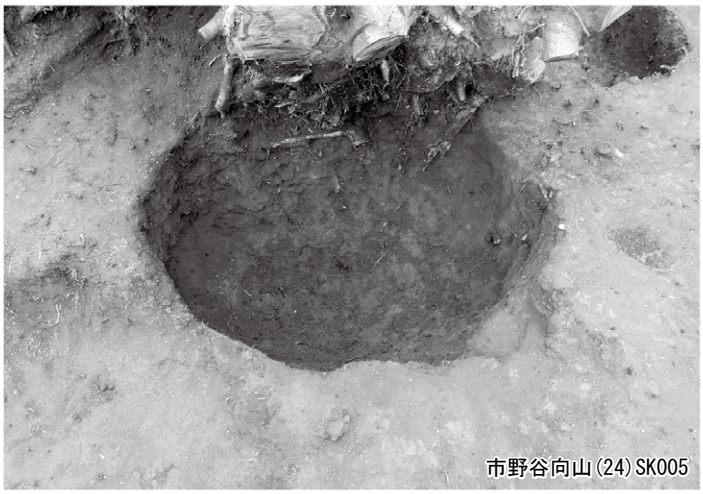
市野谷向山(24)SI004

市野谷向山(27)SI001

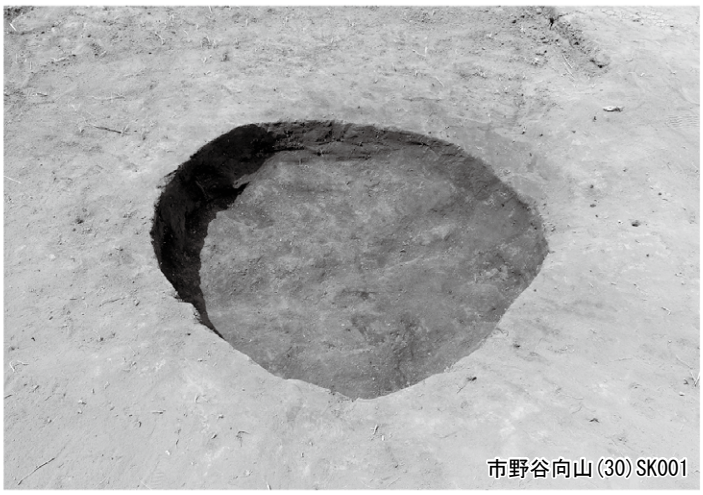

市野谷向山(24)SK001・002

市野谷向山(24)SK003

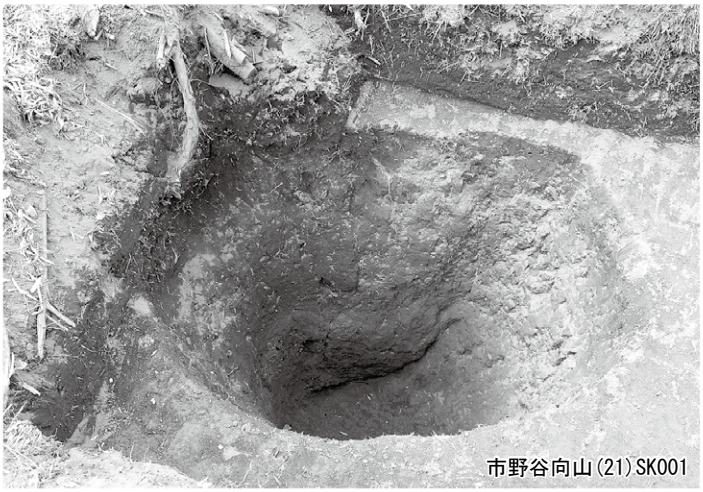

市野谷向山(24)SK004


市野谷向山(24)SK005

市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡


市野谷向山(30)SK001

市野谷立野(36)SK001


市野谷向山(21)SK001

市野谷向山(21)SK003

市野谷向山(22)SK001・002

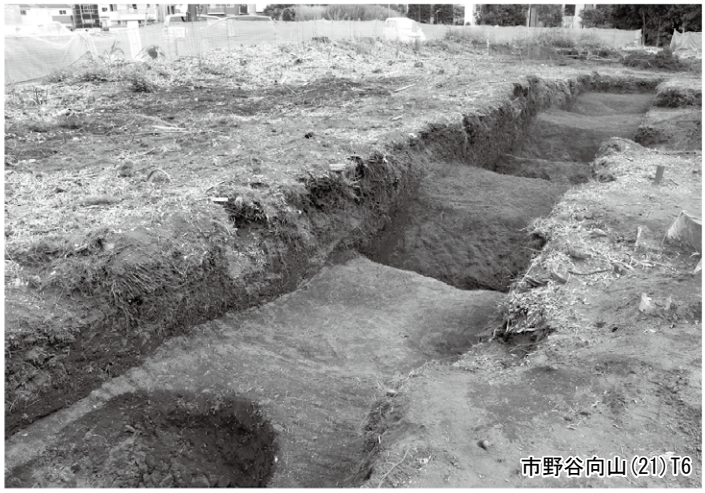
市野谷向山(22)SK003・004

市野谷立野(37)SK001～004

市野谷立野(37)SK005

市野谷立野(37)T1

市野谷立野(37)T1北壁セクション


市野谷向山(21)T6

市野谷向山(21)T7

市野谷向山(27)SD001・002

市野谷向山(31)SD001A地点

市野谷向山(31)SD001BC間

市野谷向山(31)SD002

市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡

市野谷向山遺跡

旧石器時代　縄文時代

49T-59-1

(27)SI001-93

(24)SI001-44

(24)SI003-94

(24)SI003-95

(24)SI003-96

(24)SI004-47

(24)SI004-48

(27)SI001-94

(27)SI001-95

遺構外－１

遺構外－２

遺構外－３

遺構外－４

遺構外－５

遺構外－７

市野谷立野遺跡

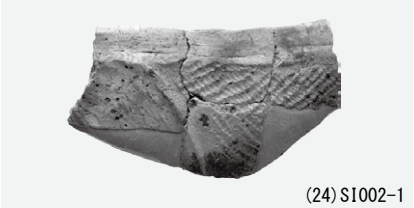
遺構外－６

遺構外－１

遺構外－２

遺構外－３

(24)SI002-1


(24)SI002-1

(24)SI002-1

(24)SI003-1

(24)SI003-65

(24)SI003-71

(24)SI003-72

(24)SI003-73

(24)SI003-74

(24)SI003-77

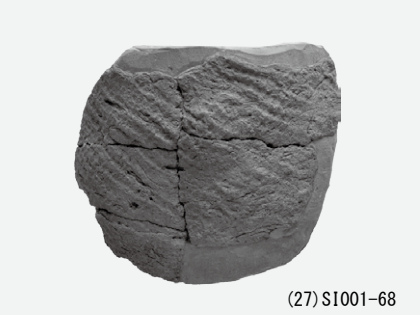
(24)SI003-79

(24)SI003-81

(24)SI004-1

(27)SI001-26

(27)SI001-56


(27)SI001-68

(27)SI001-75

(27)SI001-91

出土遺物（２）

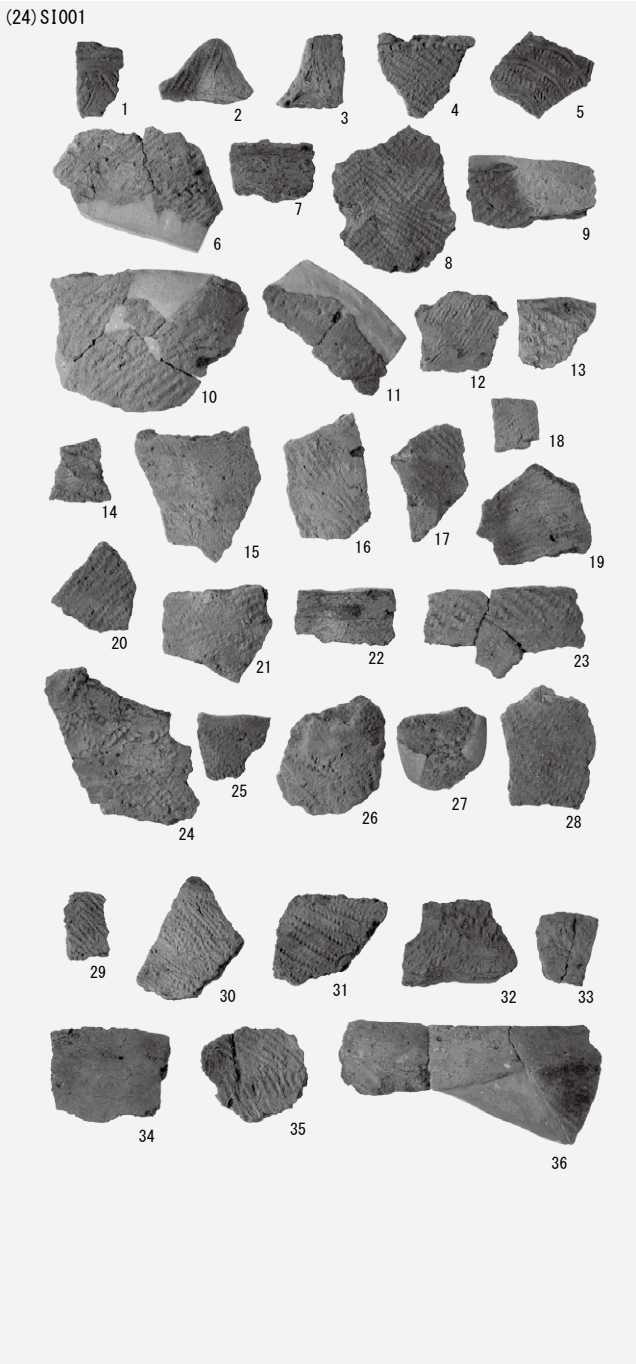
(30)SK001-1

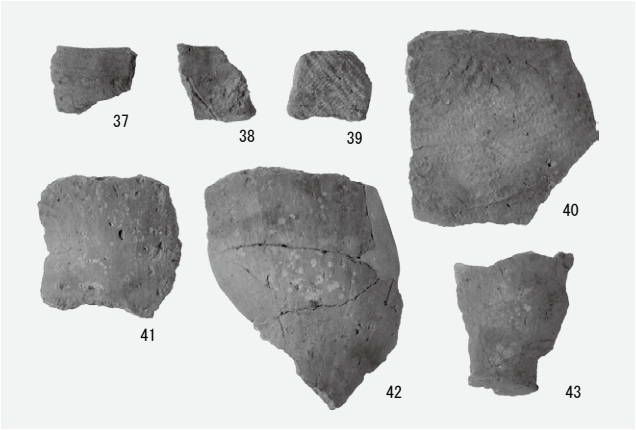
(30)SK001-16

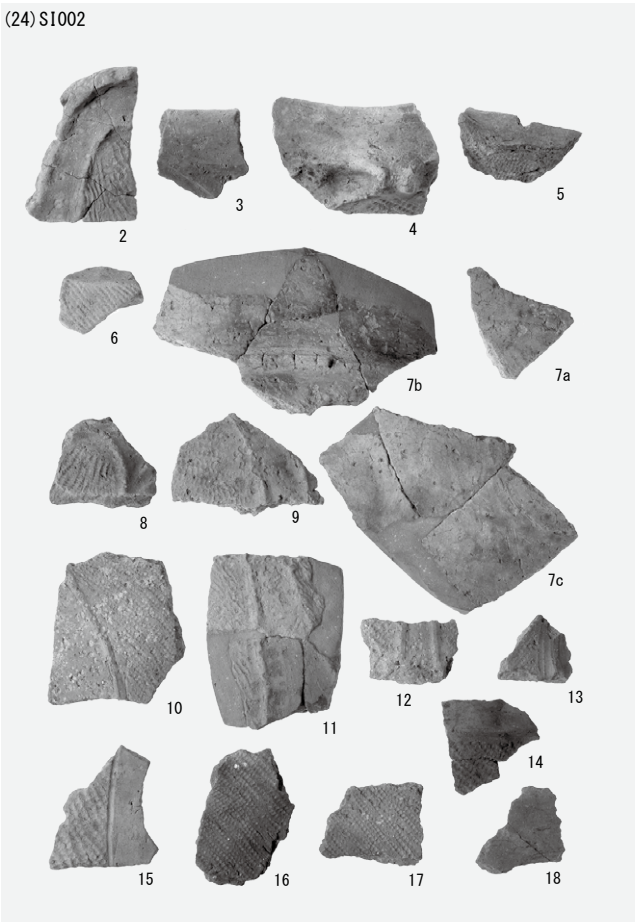
(30)SK001-179

(30)SK001-20

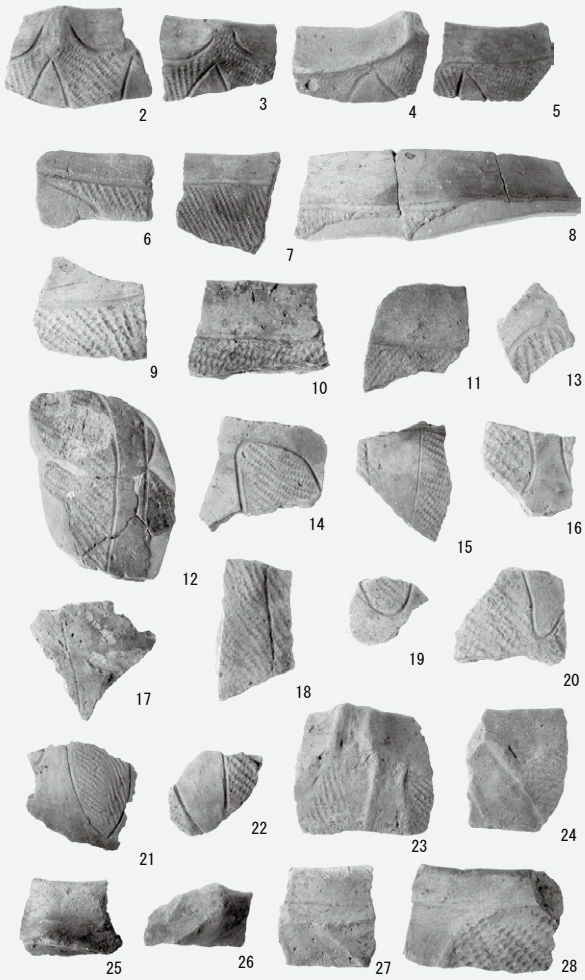
遺構外-287

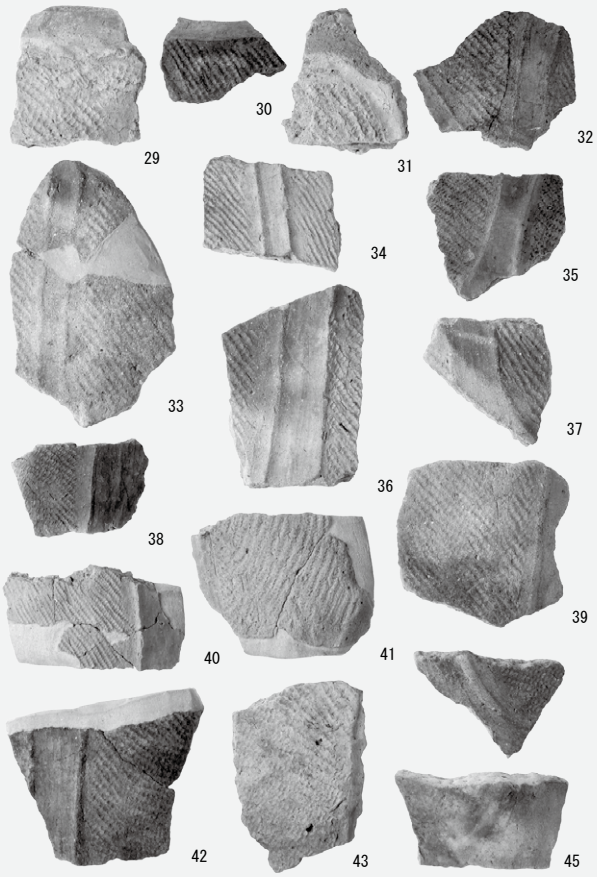

(24)SI001
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

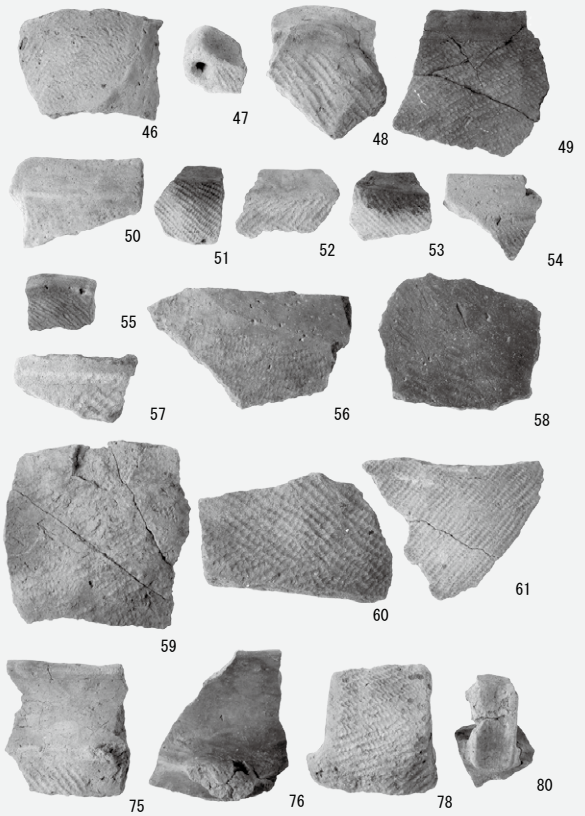

37
38
39
40
41
42
43

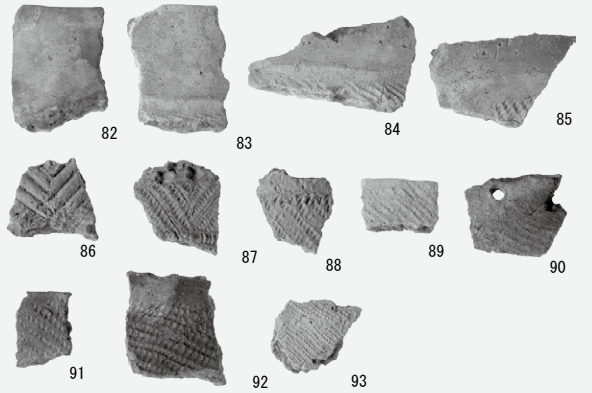

(24)SI002
2
3
4
5
6
7b
7a
8
9
7c
10
11
12
13
14
15
16
17
18

(24)SI003

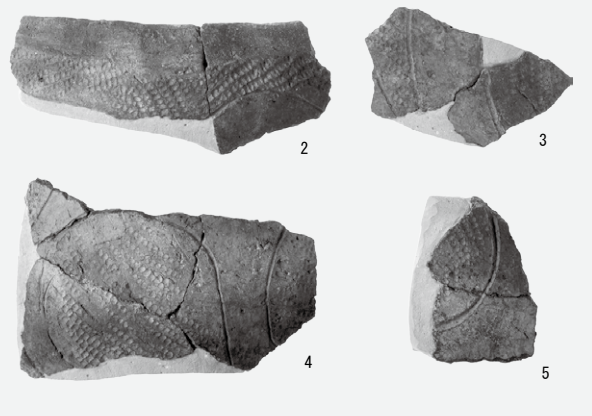


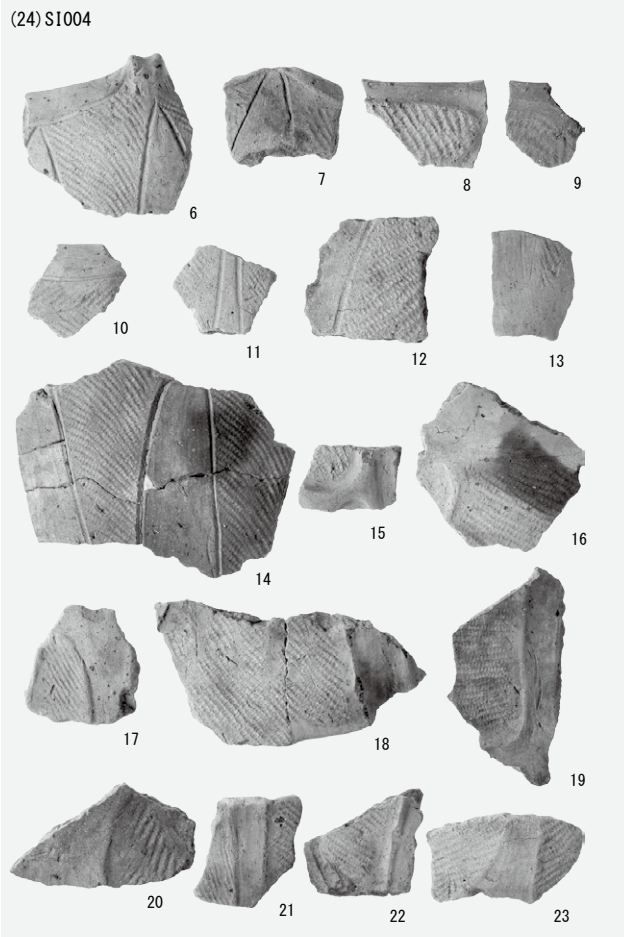


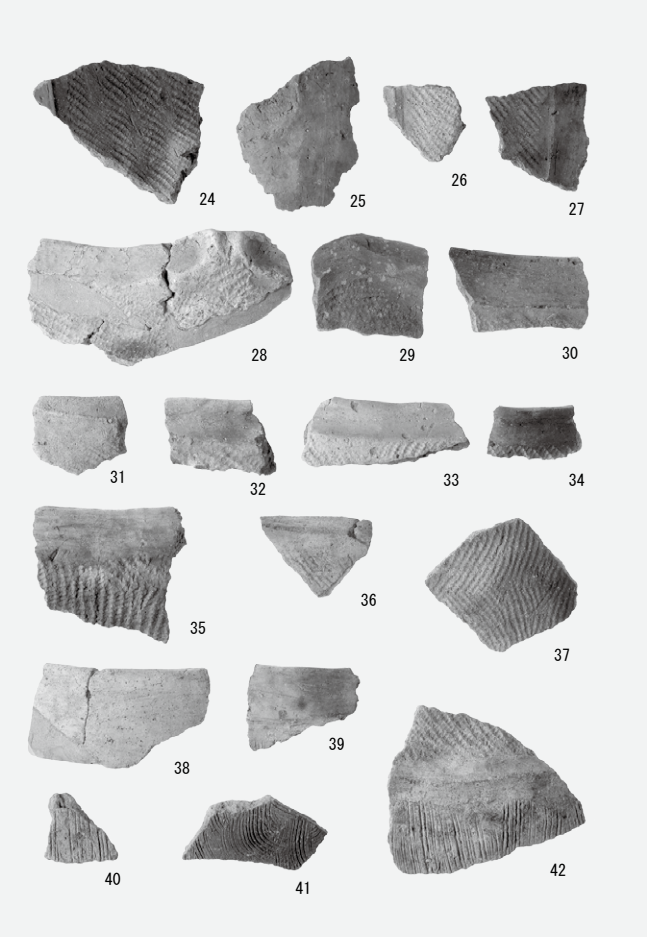


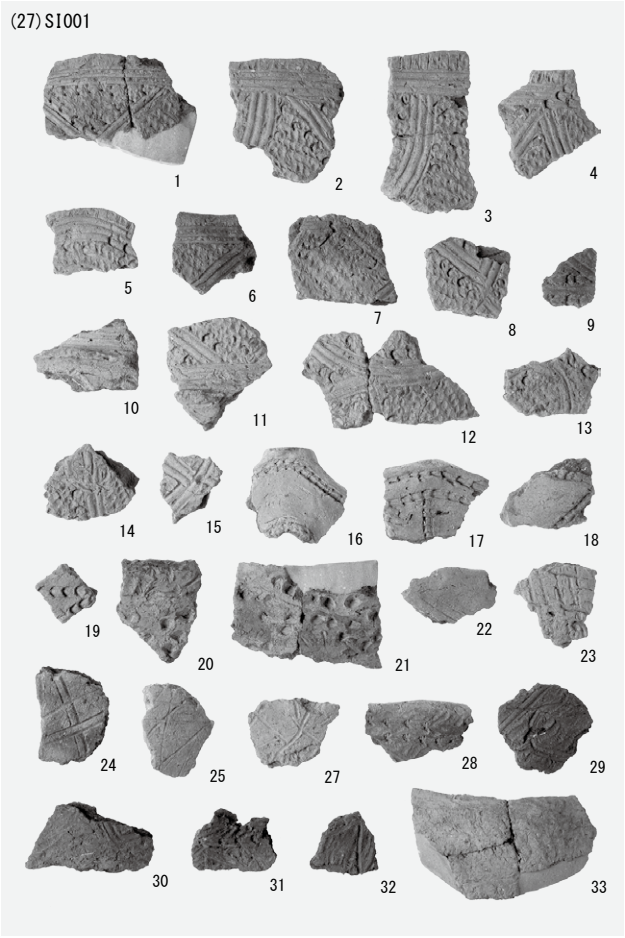


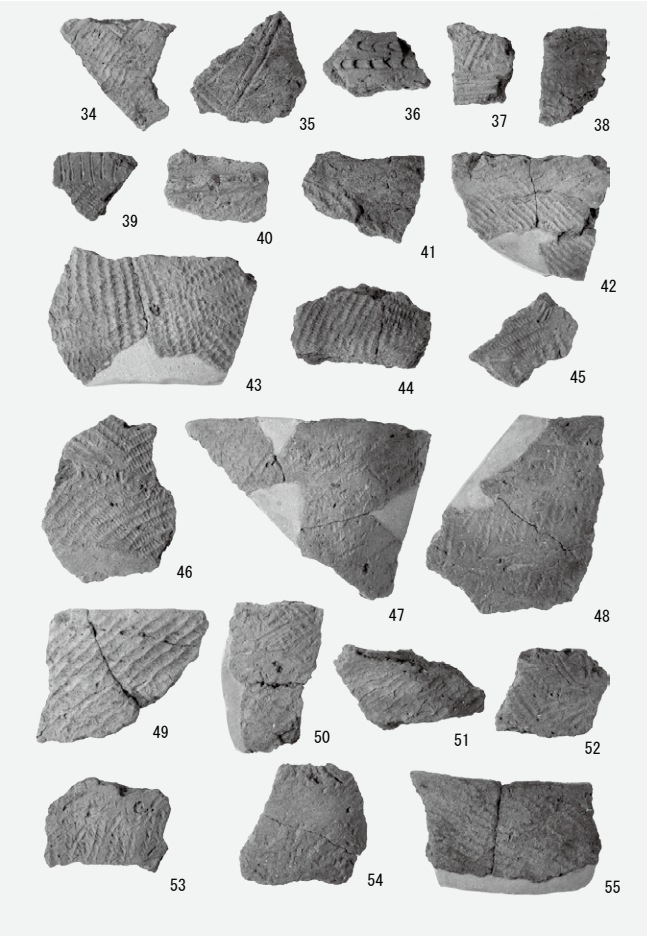
(24)SI004



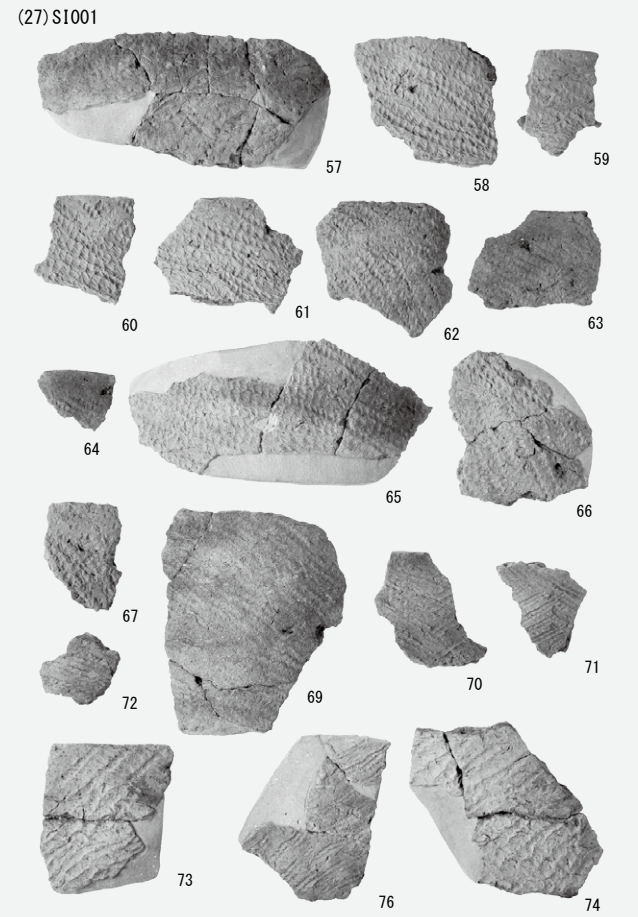

(24)SI004
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

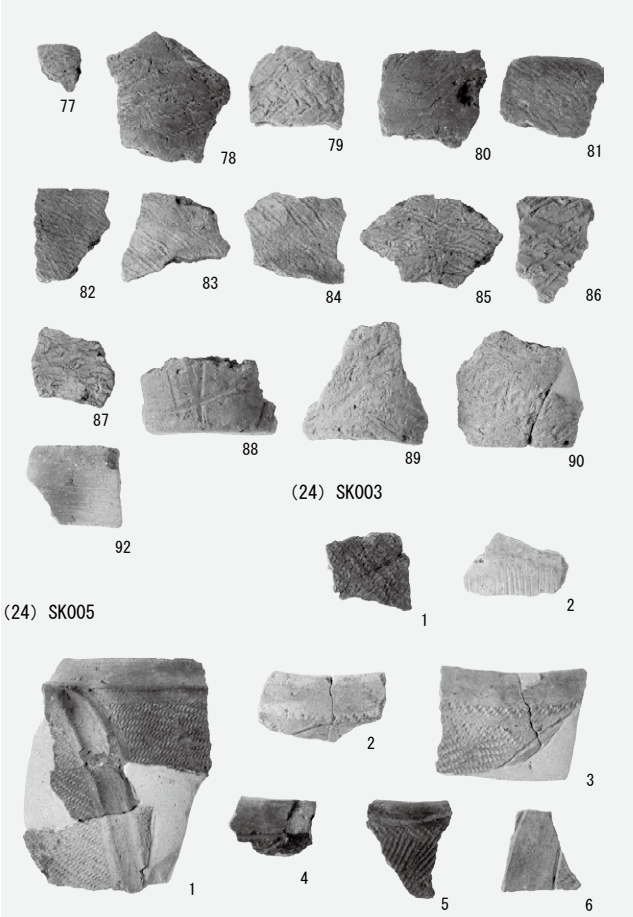

24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

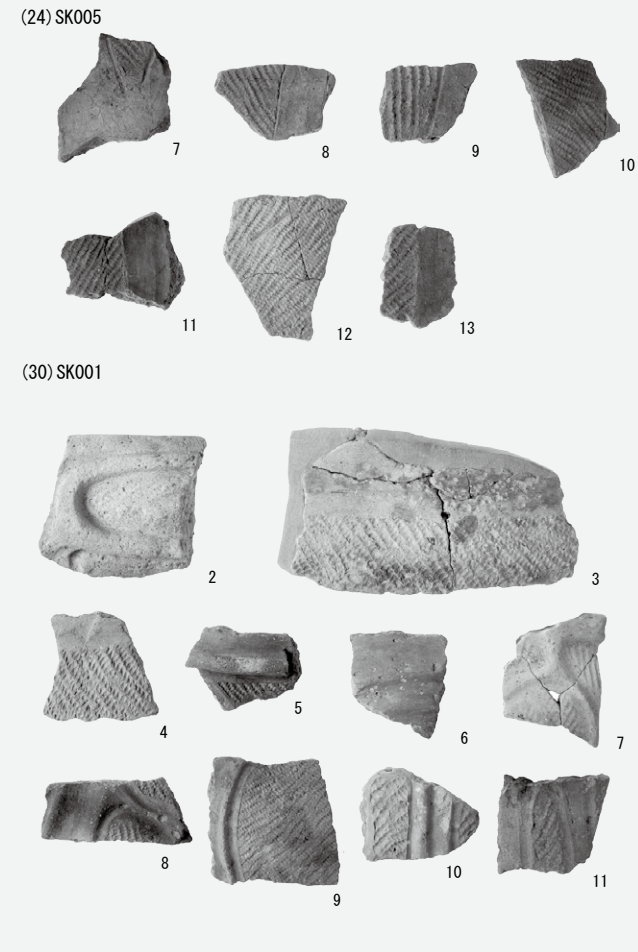

(27)SI001
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
27
28
29
30
31
32
33

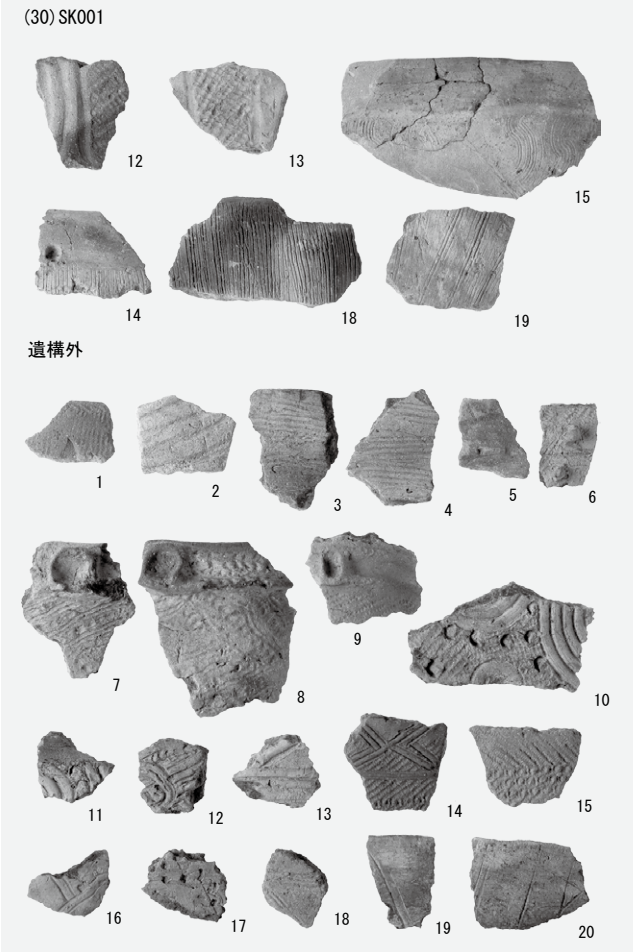

34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55

出土遺物（５）

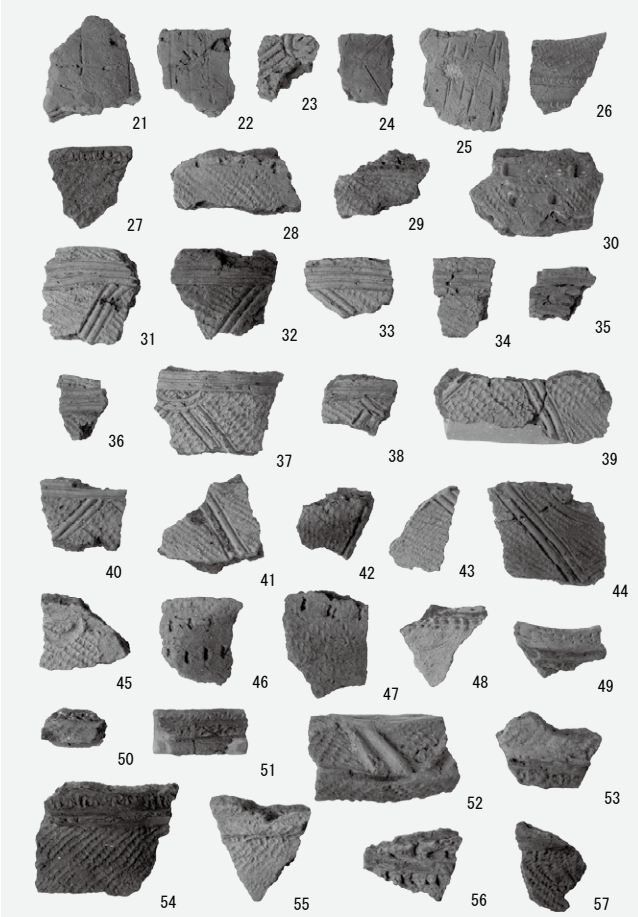

(27) SI001
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
69
70
71
72
73
76
74

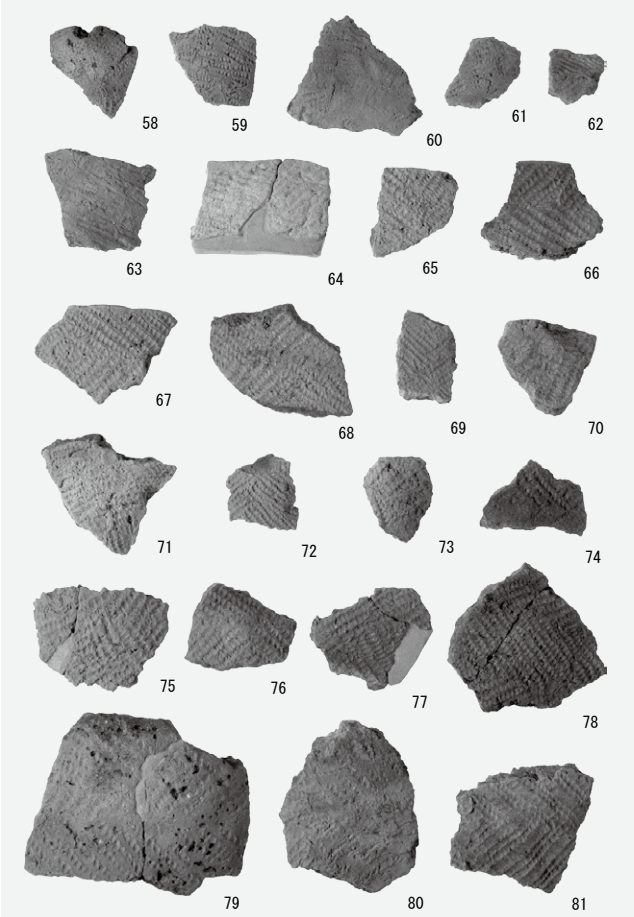

77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
92
(24) SK003
1
2
(24) SK005
1
2
3
4
5
6

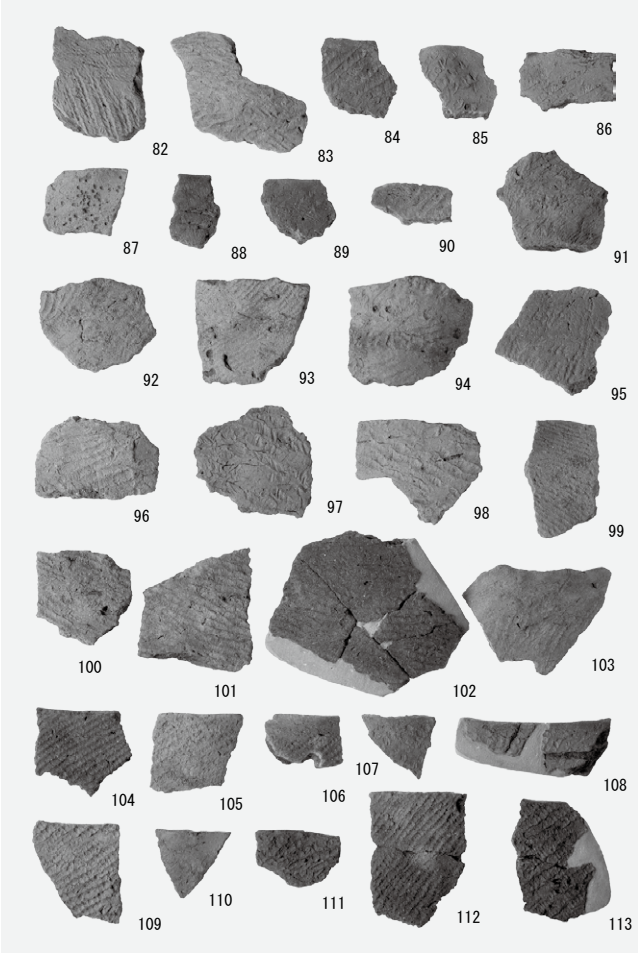

(24) SK005
7
8
9
10
11
12
13
(30) SK001
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

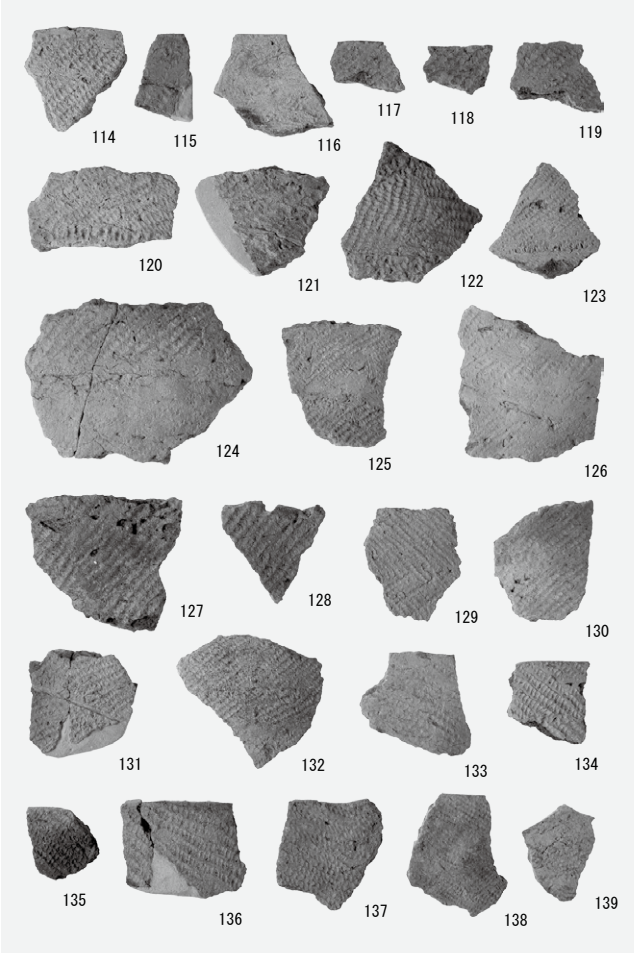

(30) SK001
12
13
15
14
18
19
遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

出土遺物（6）

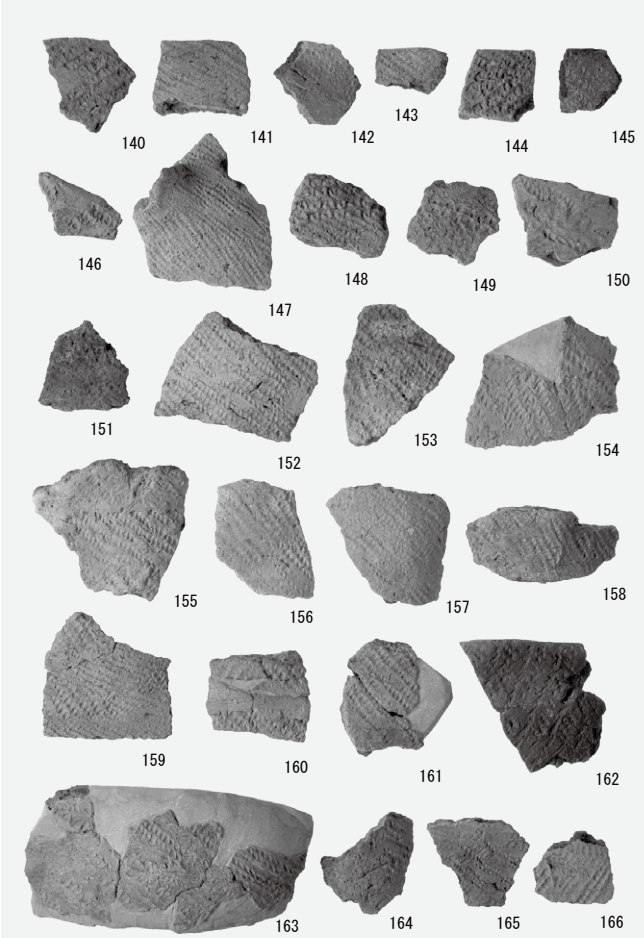

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57

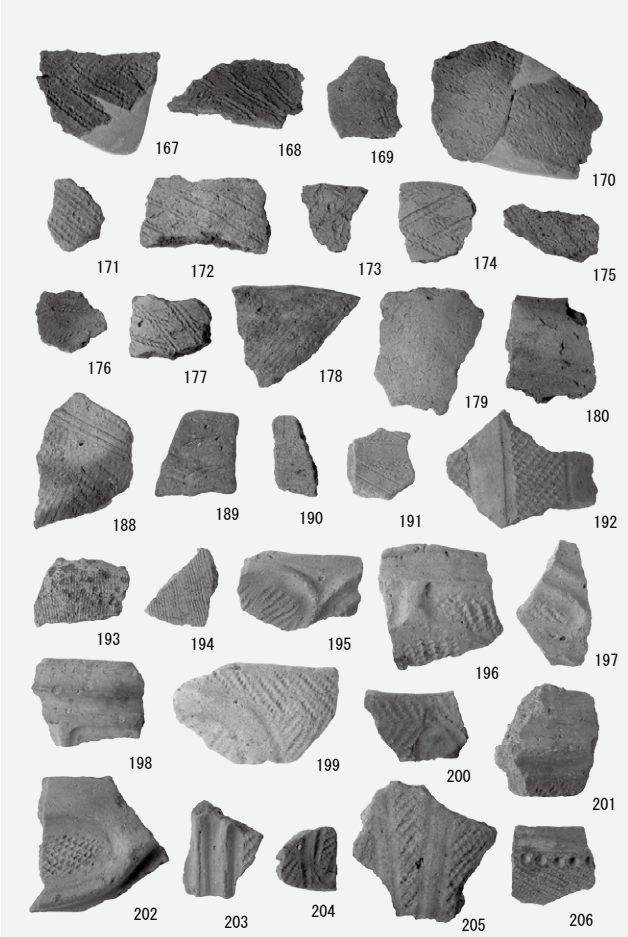

58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81

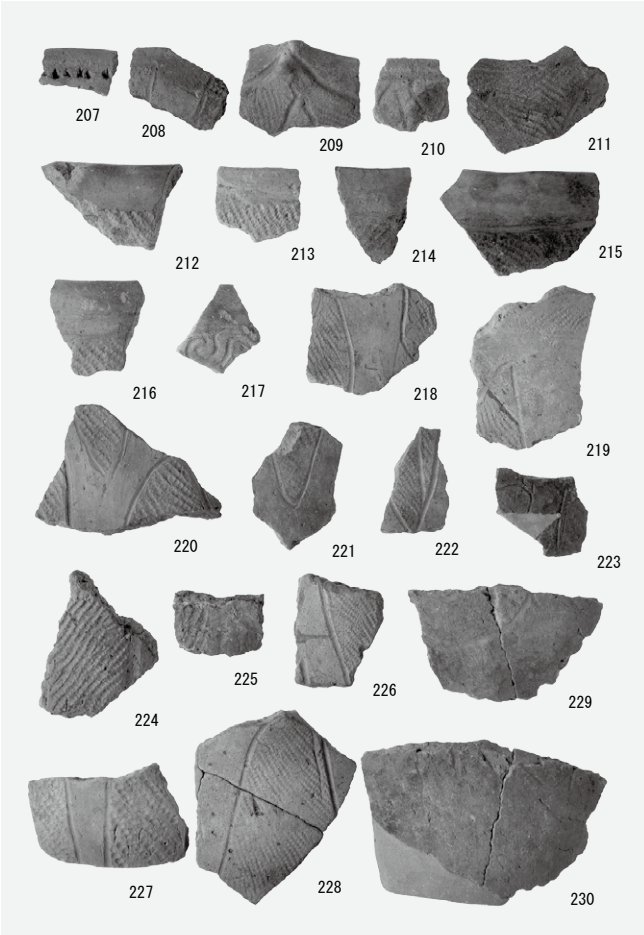

82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113

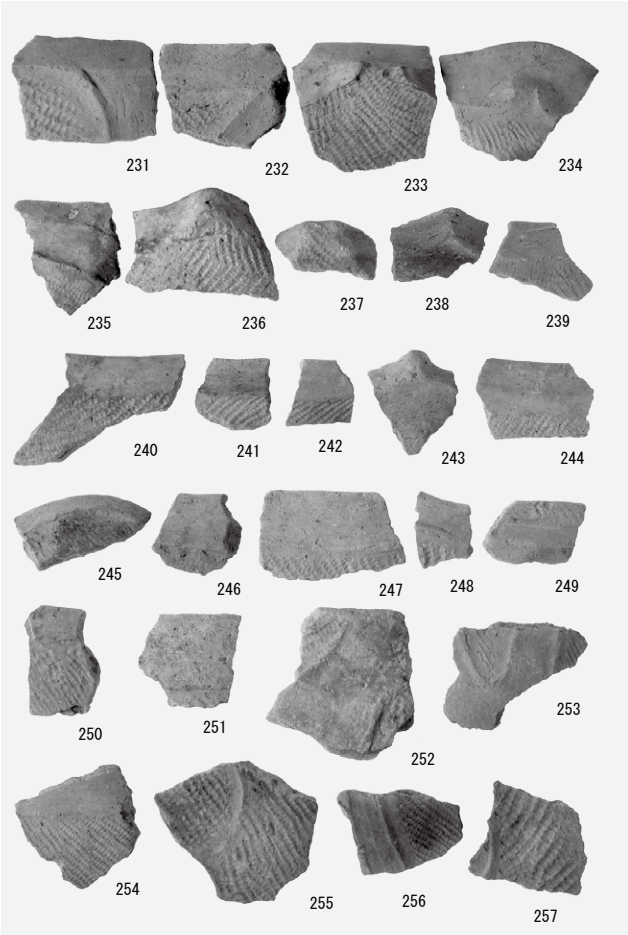

114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139

出土遺物（７）

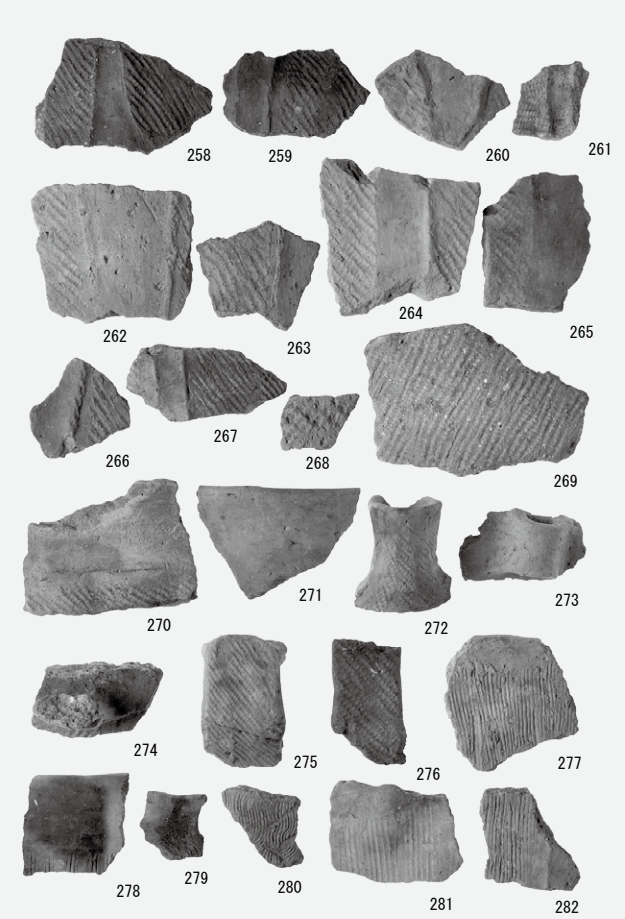

140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166

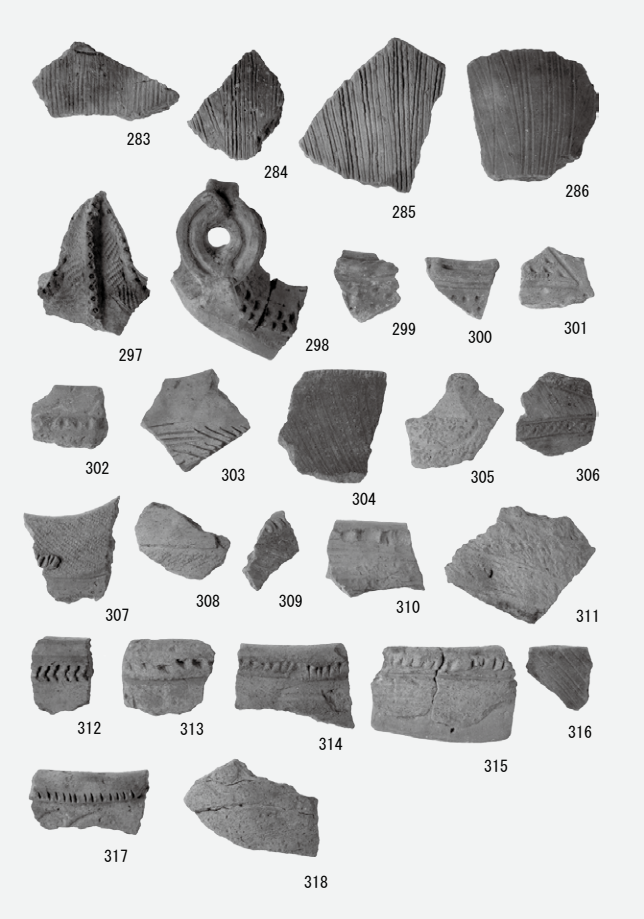

167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206


207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
229
227
228
230

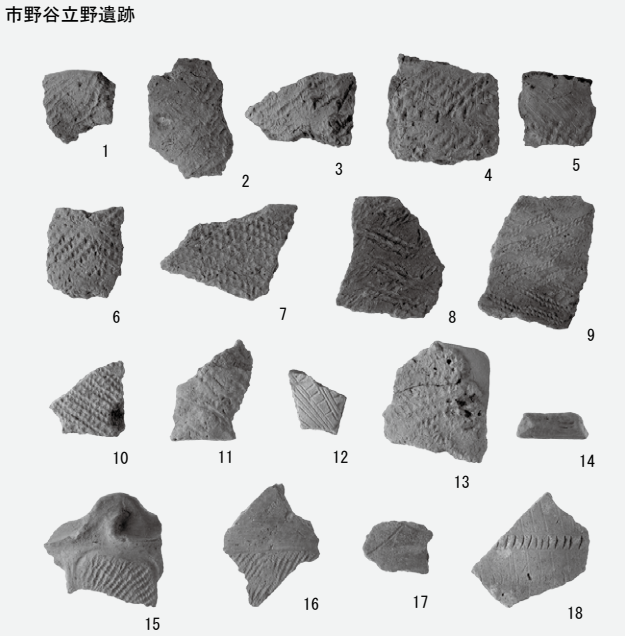

231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257

出土遺物（8）





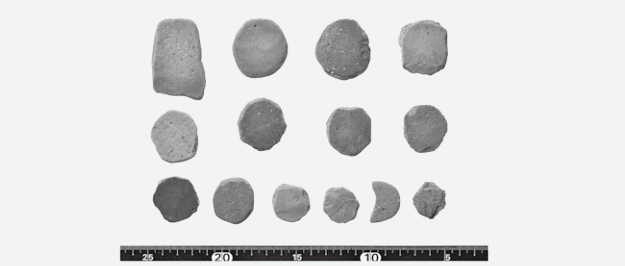
市野谷立野遺跡



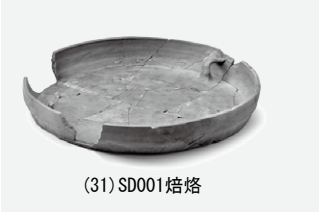
(31) SD001陶磁器

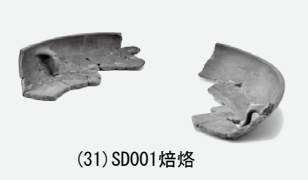
(31) SD001カワラケ

(31) SD001灯明具


(31) SD001土製・陶製円板

(37) SD001焙烙


(31) SD001焙烙


(31) SD001焙烙

(23) 旧石器時代遺物集中地点

(23) T5

(24) SI001

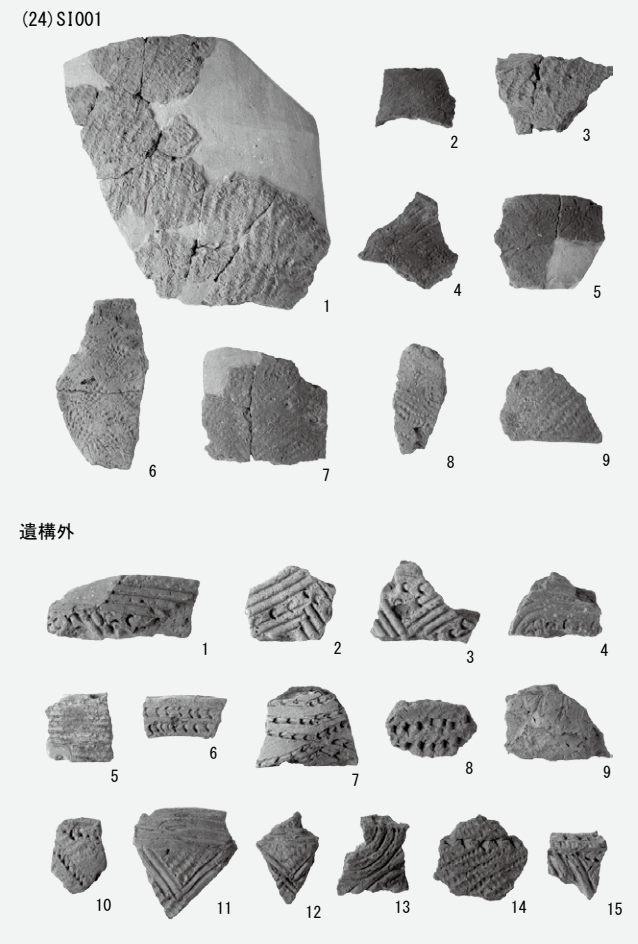
(24) SI001炉

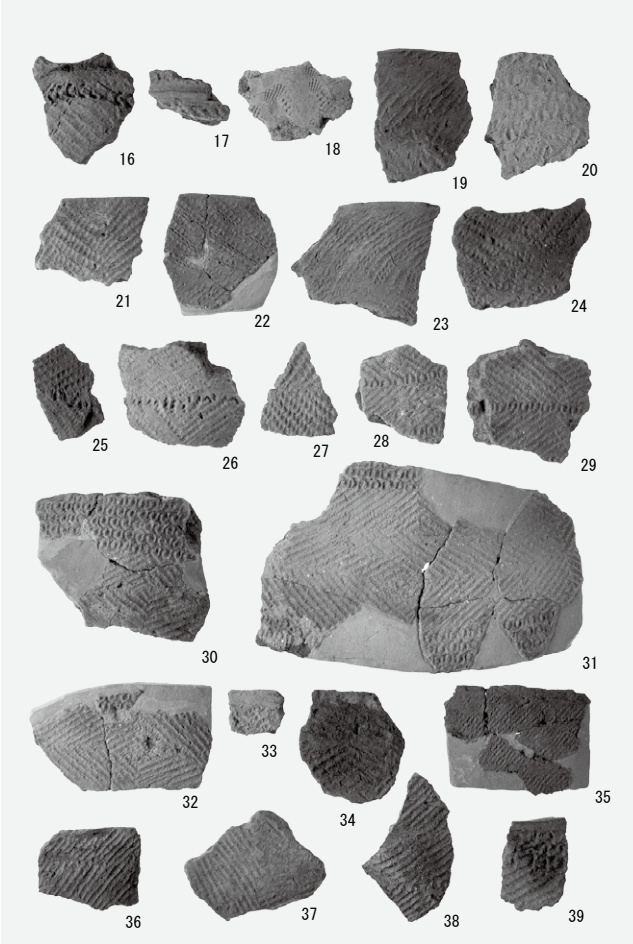
(23) T2

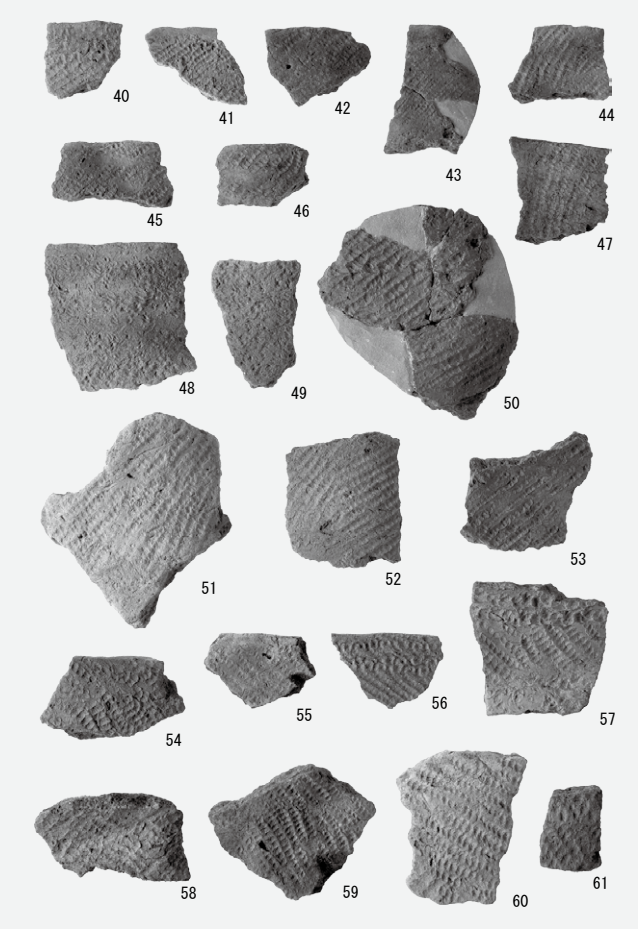
(23) T4

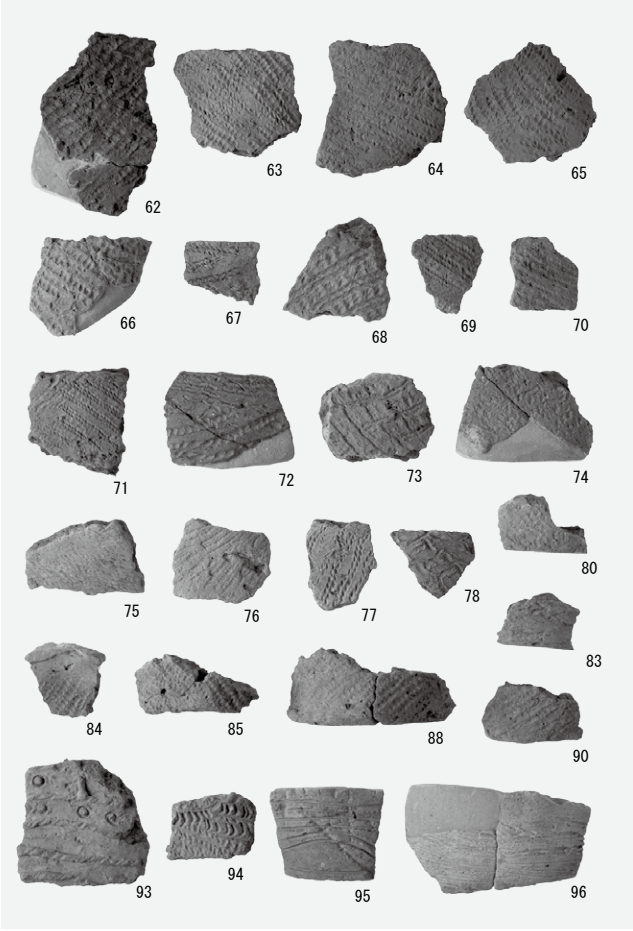
(24) 野馬堀

(24) T7

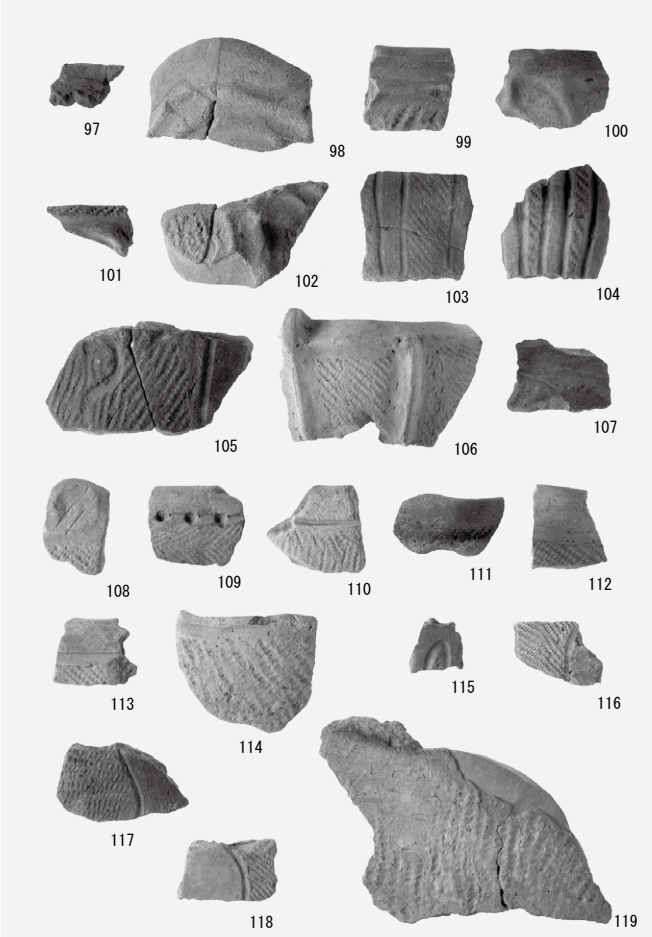


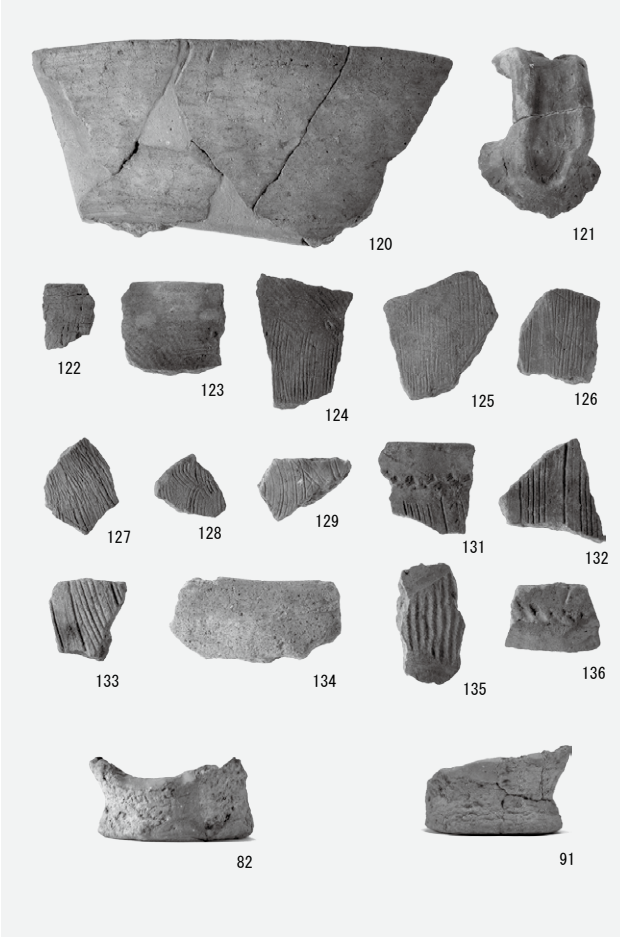


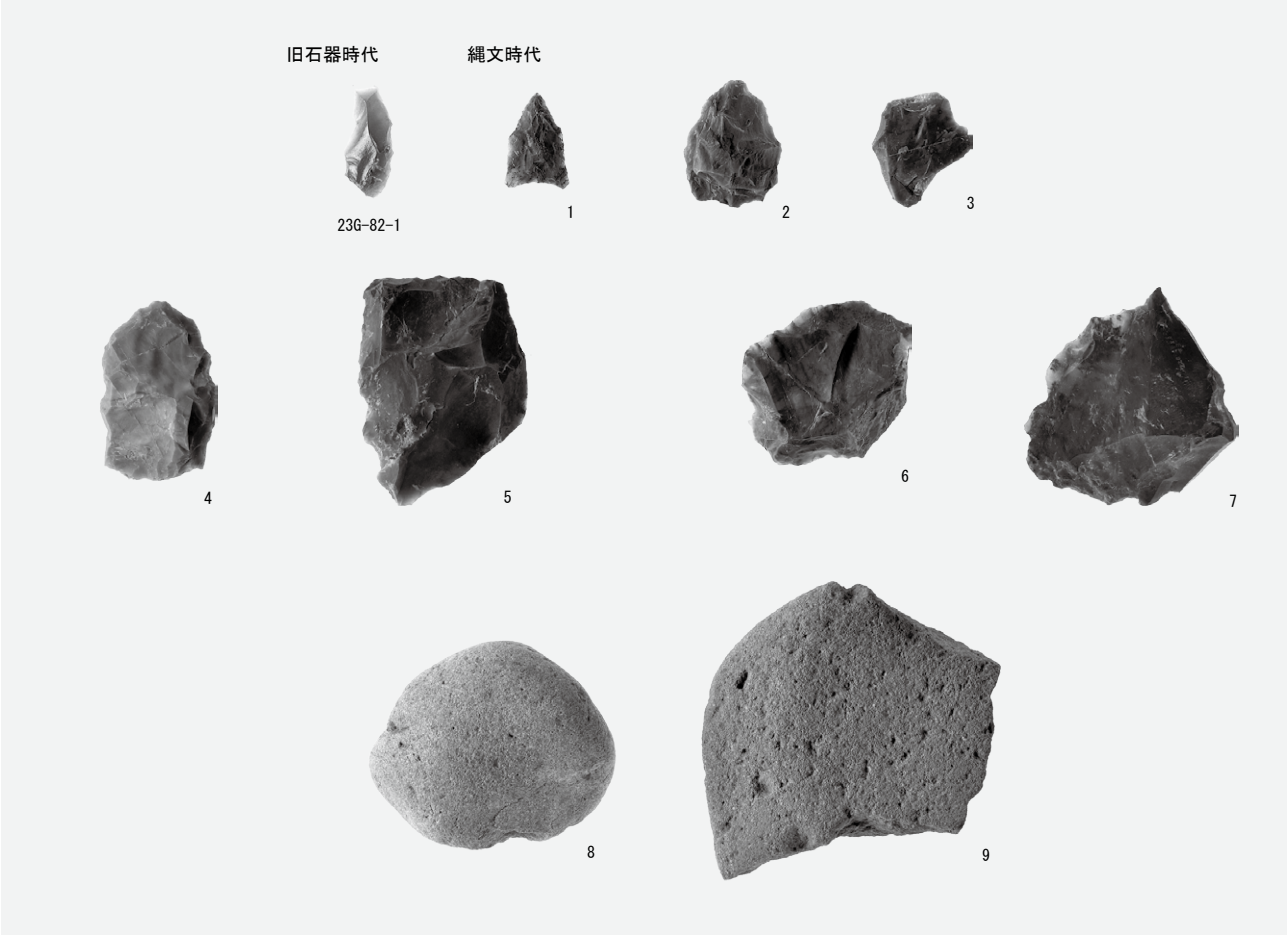




出土遺物（１）


97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119


120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
131
132
133
134
135
136
82
91


旧石器時代
縄文時代
23G-82-1
1
2
3
4
5
6
7
8
9

出土遺物（２）

十太夫野馬土手

調査前風景　北西から

トレンチセクション　北西から

野馬土手セクション

トレンチセクション　南東から

報　告　書　抄　録

ふりがな	ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石五丁目遺跡・市野谷駒木野馬土手・十太夫野馬土手
巻次	11
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第779集
編著者名	平井真紀子
編集機関	公益財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL043-424-4848
発行年月日	西暦2019年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
市野谷向山遺跡(20)・(21)・(22)・(24)・(25)・(27)・(29)・(30)・(31)	流山市市野谷782-4の一部ほか	12220	036	35度51分47秒	139度55分19秒	20170601～20180911	7,849	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
市野谷立野遺跡(35)・(37)・(38)	流山市市野谷780-8ほか	12220	022	35度51分54秒	139度55分26秒	20170116～20171215	4,085	
西初石五丁目遺跡(23)・(24)	流山市大畔482-6ほか	12220	045	35度52分25秒	139度54分58秒	20170417～20170706	1,564	
市野谷駒木野馬土手(2)	流山市十太夫1-8の一部ほか	12220	056	35度52分12秒	139度55分58秒	20111116～20111125	223	
十太夫野馬土手(31)	流山市十太夫119-1ほか	12220	048	35度52分55秒	139度55分40秒	20170215～20170221	679	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市野谷向山遺跡(20)・(21)・(22)・(24)・(25)・(27)・(29)・(30)・(31)	包蔵地 集落跡 牧	旧石器時代 縄文時代 近世	 竪穴住居跡５軒、土坑６基 野馬堀３条、シシ穴７基	二次加工ある剥片 縄文土器（前・中期）・縄文時代石器 陶磁器	
市野谷立野遺跡(36)・(37)・(38)	包蔵地 牧	縄文時代 近世	 野馬堀３条、シシ穴５基	縄文土器・縄文時代石器 銭貨	野馬堀は市野谷向山遺跡から続くものである。
西初石五丁目遺跡(23)・(24)	包蔵地 集落跡 牧	旧石器時代 縄文時代 近世	 竪穴住居跡１軒 野馬堀２条	ナイフ形石器 縄文土器（前・中期）・縄文時代石器	
市野谷駒木野馬土手(2)	野馬土手	近世			
十太夫野馬土手(31)	野馬土手	近世	野馬土手、野馬堀		

要　約

市野谷向山遺跡は江戸川支流に開析された標高17ｍの台地上に立地する。今回報告するところは、遺跡範囲西側部分と東側の市野谷立野遺跡寄り部分に分かれる。西側の調査区をみると、旧石器時代では立川ロームⅢ層から１点の石器が出土した。縄文時代では、前期黒浜式期の集落が見つかった。集落は既報告の第16次調査区に続くものである。東側部分でも、縄文時代前期の竪穴住居跡が１軒見つかった。近世では小金牧のひとつの上野牧に関係する２条から３条の野馬堀とシシ穴が見つかった。牧関係については限定的なトレンチ調査であり、シシ穴は多数存在するとみられる。

市野谷立野遺跡は江戸川支流に開析された標高17ｍの台地上に立地する。縄文時代は土器・石器が出土したが、遺構は検出されなかった。近世では、小金牧のひとつの上野牧に関係する３条の野馬堀が見つかったが、市野谷向山遺跡から続くものである。また、向山遺跡同様、シシ穴が検出された。牧関係は限定的なトレンチ調査であり、シシ穴は多数存在するとみられる。

西初石五丁目遺跡は江戸川支流に開析された標高21ｍの台地上に立地する。旧石器時代では、立川ロームⅤ層から石器が１点見つかった。縄文時代では、前期の竪穴住居跡が１軒見つかった。また、遺構は検出されなかったが、中期の土器もやや多くみられる。近世では、小金牧のひとつの上野牧に関係する２条の野馬堀が見つかった。

市野谷駒木野馬土手・十太夫野馬土手は小金牧のうち「上野牧」のほぼ中央部、牧内の外周及び広大な牧内を区画し、管理することを主目的とした土手と考えられる。十太夫野馬土手では、野馬土手１条とそれに付帯する野馬堀が良好な状態で残っており、野馬土手の構築方法の一端を確認することができた。

千葉県教育振興財団調査報告第779集

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書11

－流山市市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・西初石五丁目遺跡・
市野谷駒木野馬土手・十太夫野馬土手－

平成31年３月15日発行

編　　集　　公益財団法人　千葉県教育振興財団

発　　行　　独立行政法人　都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿６－５－１

公益財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　　株式会社　正文社
千葉市中央区都町１－10－６